

第 5 章

学生主体型授業



5. 山形大学FDシンポジウム

「学生主体型授業の冒険」

平成22年12月19日(土)、キャンパス・イノベーションセンター東京(東京都港区)にて「山形大学FDシンポジウム 学生主体型授業の冒険」を開催した。

シンポジウムには、全国各地の高等教育機関等から、84大学110名の大学関係者の参加があり、活発な議論が展開された。主催は、山形大学高等教育研究企画センターである。

最初に、「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」と題して、山形大学の小田隆治教授の基調講演が行われた。

次いで、山形大学の杉原真晃准教授、北海道大学の鈴木誠教授、静岡大学の佐藤龍子教授、岡山大学の橋本勝教授から、学生主体型授業の取組発表が行われた。

その後、基調講演及び取組発表を踏まえてパネルディスカッションが行われ、「学生の主体性を引き出す授業」について議論を深めた。

日 程

13:00 開会
あいさつ
山形大学高等教育研究企画センター長 渡邊 洋一

13:05 基調講演
山形大学 小田 隆治 教授
「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」

14:10 取組発表
(1)山形大学 杉原 真晃 准教授
「学生のつまずき・教員のつまずき
-学生主体型授業の不確実性-」
(2)北海道大学 鈴木 誠 教授
「意欲を引き出す授業デザイン
-学生を主役にする『蛙学への招待』-」
(3)静岡大学 佐藤 龍子 教授
「学生同士で気付き合う
-キャリアデザインの仕掛け-」
(4)岡山大学 橋本 勝 教授
「学生の潜在的主体性の引き出し方
-自然体の学びの実現-」

15:50 パネルディスカッション
「学生の主体性を引き出す授業」
司 会:小田 隆治 教授(山形大学)
パネリスト:杉原 真晃 准教授 (山形大学)
鈴木 誠 教授 (北海道大学)
佐藤 龍子 教授 (静岡大学)
橋本 勝 教授 (岡山大学)



基調講演



取組発表



パネルディスカッション

目的とした、初年次教育とかキャリア教育、PBL、Problem Based Learningとか、Project Based Learning、またチュートリアル教育、アクティブラーニング等々の新規授業の開設が迫られており、おそらくいっちゃって大学さん、もう既に始めて、山形大学より古くから始められて、もう何年もやっているよというところもあると思っております。こういうものが迫られている。それは、既存の昔の学問を中心とした授業とは全然違うものが今、大学の中にいろんなものが要求されるようになってきているからです。

しかし、大学によっては、いきなりはそうした授業を開設してない、文科省が言うからとか、どこかが言うから、この授業をやりなさいと。また、開設していないからといって疑問形にしておりますけども、私全国の大学にいろいろと回ってお話しさせていただきますと、開設してるんですね、そして実際に困っているんです。多くの授業担当者が困っている。急に順番制で、あなたこの授業やりなさいと言われて非常に困っている。授業担当者が困っているんですから、教えられる学生はもっと困っていて、学生も困惑しているんですね。「先生、これで何の力がつくんですか」とか、「何なんですか、この授業は」と言われたときに先生も答えられない。こういう形のものが、いろんな形で展開されている。これで教育の質の確保はできるのかというところが疑問なところなわけですが、置かれてる状況は、こういう状況というのが全国の大学でいろんな形で展開されています。そうしたときに、初年次教育とか、いろんなキャリア教育とか、PBLというものが全否定されます。そんなことは決してないのであって、そういう授業をどうやって大学の中に定着させるかが問われているんだと思います。ですから、大学は組織的に新規授業の開設を丁寧に設計する必要があるんだということですね。そして、授業をやり始めたから、うちの大学はこれを導入しましたよ、初年次教育を導入しましたよ、テキストも渡しましたよ、それでは済まないだろうと。この新規授業の持続的な改善活動そのものが我々はFDととらえて、このタイトルのようなFDをつけているわけでございます。

では、新規授業をどのように構築し、学内に共有化していったらいいのだろうかという形で、我々は考え、平成20年度の教育GPとして、こういうものをFDの新段階として位置づけているわけです。

そうしたときに、この「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」、勝手に作文で、こういうものが学内に、少なくとも1万人近く学生がいるところに、よそからトップダウンだったり、またどこかの組織がこんなことをやったら、さっき、私が問題提起をした、上からこういう授業があるからやりなさいといったときの当惑と全く同じであって、山形大学がこういうプロジェクトを可能にしたのはどうしてなのかという、その基盤として山形大学のFDの基盤があるからです。それは、今さっきからやってることであり、もう一つは大きな特徴として、公開性、共有化という形のもので、ずっとFDの根幹として我々はやり続けている。こういうことで学内で公開し、共有化をしているんだというものを、それは、皆さん御存じかもしれませんが、我々は学内にとどまらず、古くはといいますか、古くはということもないんですけども、平成16年ぐらいには、県内の大学さんと連携しまして、「地域ネットワークFD 樹氷」というものを立ち上げました。さらにそれを発展させた形として、東日本、関東から東北・北海道という形の「FD ネットワーク“つばさ”」、現在46校の大学・短大・高専さんが参加されています。そういうものに、この公開性と共有化という山形大学の

FDの根本を展開してるわけでございます。

そして、もう一つの大事な山形大学のFDの理念は何かといったら、相互研鑽になってくると思います。では、相互研鑽とは何かといえますと、やっぱりFDが意識される場所は、常にトップダウン、または教員の管理だということがどうしても払拭できない。それでいて、やっぱり教育改善ということは積極的に進めなくちゃいけないというところは、教員の多くのところが認めるところです。そうしたときに、我々がやっていることは、新しい情報は外からいろいろと仕入れてきますけれども、それと同時に、中の教員が何をしてるかわからないところをいろいろと発掘して、良いことをやられてる先生たちの方法を学内で共有しようということでございます。こういうことが相互研鑽という我々のFDの中の理念でございます。

一方で、こういうFDのいろんな既存の授業の取組と同時に、2001年に新しい授業プログラムにチャレンジしてまいりました。これは、当時の北海道大学の阿部厚先生から、もう学生の気質やいろいろと変わっているんだから、既存の授業だけでは立ち行かなくなってきたということを聞きました。それで、学生参加型とか学生参加型とかいろんな言葉を聞いたけども、何かよくわからなかったけども、これはやるうじゃないかということで、学生主体型授業の研究と実践を、私が「自分を創る」という授業で展開してまいりました。この授業、教養セミナーでやっていたんですけども、問題解決能力の育成とか、こういう形のよく一般的なジェネリックスキルの問題をやってまいりました。

そうしたときに、このときにおいた学生主体型授業というものは、いろんな目標を置いていましたけども、大事なところは意欲や主体性、自己学習能力だという形で展開していきました。当時、2001年にやったときは、朝日新聞の人が良いタイトルをつけてくれて、「学生の学生による授業スタート」と。スタートしてこれから先、何をやるのかわからなかったんですけど、こういう形で展開し始めました。グループで好き勝手なことをやっていいよという授業をやって、全体で、後、こういうふうなホールを借りて発表会までやりました。



こういう授業を、私が5年間、毎年展開して、それから次の年になったら、人文学部のドイツ語の先生が展開されて、今、うちのセンターの杉原さんが3代目としてやってくれてます。授業名「自分を創る」を次の人に渡すときに、2代目という「2代目 自分を創る」というタイトルにしたんですね。そしたら学生が、2代目といったら自分の子供をつくる授業かと思いましたとか言うので、ここをちょっと離すようにいたしました。

そして、いろんなそういう授業を公開して、共有化してきたんですね。当時、やっぱり珍しいので、学内の人たちが今振り返りますとた

くさん来ている。ああ、この人も来ているんだという形ですね。ポストアンケートもとっていると、すごく新鮮に思われ、また、こういう一見学生に好き勝手にやらせているようでいて、すごくこちら側が設計していることが、公開授業検討会に参加された方はよくわかって、やっぱりそれなりに考えているという形になりました。

そして、この授業で学生さんは、自由と責任があれば何でもやっていいよと言ったけれども、自由をバックというのは、責任とやっぱり表裏一体なんだなということに気づかれていました。そして、今度はこの授業を終えて気づいた教育観は、達成感、自信ということです。後から、これは北大の鈴木先生が詳しく話してくださると思いますが、そういうところにやっぱり共通に行き着くといえますかね、それがおそらく、後々いろんなことに、人生のいろんなところに役立っていくんだらうと思っています。自分たちが想定しない、飛べると思ってるハードビジョンのところを設定して飛べるとは、彼らの、やっぱり大変だったけれども達成感なり、それは自信になっていくんだらうと。人生こんなもんじゃないんだという、自分ができることはこれ以上になったらということが大事なことなんだらうと思っております。

こういう両者は教育にあつてとても大事なことなのに、大学教育の中にはこれまで計画的には仕組まれてこなかったと書きましたけれども、いや、全体としては卒業研究が終わるころには、こういうものがやっぱり備わるようにはなったんだと私は間違いなく思っております。

そして、この授業の公開と検討を行い、山形大学内に多様な授業を組み入れられるようになってきました。2001年の頃と、このプロジェクトを始める前もそうですけれども、我々、合宿セミナーで学生主体型授業の形式でワークショップをやっております。ですから、いろんな形で先生たちのこのような授業形式というものが身につけてきて、様々な展開がなされるようになってきました。それが、このFDをやるといいますか、こういうことの試みを行う前と、全然様相を異にしてきたことでございます。

本の宣伝ですけれども、これを今年の夏にまとめました。本日、御発表いただける先生方や全国のいろんな先生方に書いていただきました。「学生主体型授業の冒険」というのを、ナカニシヤ出版から出しております。多くの方々に読んでいただきたいと思っております。

では、このプロジェクトに入っていきたいと思います。教育GPに平成20年に採択されたから、期間を第一期、第二期、第三期として設計しました。

第一期、これは秋頃からしか事業を開始できないため、新規授業の調査研究を行いました。これは毎年やっております。

第二期は、パイロット授業の実施、開発、共有化という形です。山形大学の1年生を対象とした教養教育、今年からは基盤教育と呼びますが、1年生の学生、大体1,800人です。その学生たちが、教養教育ですから、必修ではなくて自由選択なんですね。そうやって選んでもらう教養セミナーの中から、このパイロット授業を展開してみたという形です。

そして、第3期、今年度で全学で新規授業の実施という形で、いろんな先生たちの専門性に合わせて、専門生と、あと個性に合わせて展開してほしいという形を、目標を定めてきたわけです。

では、実際にパイロット授業としまして、昨年度、前期に「未来学へのアプローチ」、後期に「未来学へのアプローチ」を実施しました。学生がたくさん集まるだろうな、集まったらどうやって断ろうと思ったんですけども、30名ぐらいですかね、前期は20数名ぐらいで、断らなくてもいいぐらいで、少し肩透かしを食ったところでございます。

そして、この授業はパイロット授業であり、汎用性が高いものにするため、3人の先生にやってもらいました。1人が地域教育文化学部の佐藤慎也先生、彼は建築が専門です。次に杉原真晃先生、教育学が専門です。最後に栗山先生、化学が専門です。

パイロット授業

山形大学 教養教育の授業

『未来学へのアプローチ』

- 「未来の持続可能都市を探る」
佐藤慎也（地域教育文化学部）
- 「格差問題をふまえて未来を創る」
杉原真晃（高等教育研究企画センター）
- 「環境問題を考える」
栗山恭直（理学部）

このような形で「未来学へのアプローチ」というタイトルのもとに、授業を大体4コマずつ、オリエンテーションがその前にありますけれども、最後に発表とかいろんな形がありますから、授業をやるときには、この4コマずつやってきました。けれども、授業は全員がでていきました、毎回ですね。全員がでていき、我々も出ていきました、ほかのスタッフも。そして、毎回、録画をし、毎回、授業を公開し、そして最後に学生を交えて検討会、学生全員ではないですけども、希望者を交えて行いました。他大学にも公開しておりましたので、他大学の人、または民間の人、いろんな方々がこの授業を見にいらっしゃいました。そして、検討会ではいろんな形でお話をしました。

これが、その一つの模様です。グループでいろんな形でお話を、グループの活動を中心としたそれぞれの問題を、学生が話をしたり考えたりしながら展開してます。これは建築のまちづくりを手作業でやっているところなんです。1年生です、彼らは、そして終わったら、このように30分ぐらい、毎回、授業についての検討会を行っています。学生がどう思ったのかとか、いろんな形でやっています。これには他大学の方もいらっしゃって、最後ぐらいにいらしゃったときには、授業を見て終わったら、学生に「あなたは本当は何年生なんだ」と、1年生とは思えないんです。やっぱりそのくらい成長されたというのがわかると思います。ある意味でいったら、これだけのスタッフが揃ってやっていますから、すごくインセンティブな教育効果があることも確かなんですけれども、こういう形で、いろんなおとなしい学生たちにも、やっぱり主体性が身についたということです。

また同時に、このプロジェクト、GPの支援もありまして、いつかやりたいと思ってた授業開発のためのFD教室の整備を行いました。これは、ここ何年も海外にもいろんな調査に行っていますと、向こうではスタジオがあったり、普通の教室は日本の大学と全く同じですよ、同じだけれども、そうでもないような、やっぱりこういうふうな実験のないような教室がある大学がある。そういうところをいつか整備したいなとも思っていました。



今回、ちょうどいい契機なのでそういう教室をつくりました。教室の名前は、「先端学習ラボ」、「L³」といいます。Lの3乗で「エルキューブ」という名前にしました。こういう形でちょっと写真が、赤と黒と白を基調にしまして、30人ぐらい入る小教室を、職員さんの協力のもとに整備しました。これは、大学の方だったら一番びっくりするそうです、教室をどうして提供できたんだということですよ。これは職員さんの力です。職員さんが一つの教室をこういう形で持ってきてくださって、整備することができました。そうして、電子黒板とかワリッカーとかコラボノートとか、たくさん的人数分のコンピューターを無線LANで繋ぐとか、いろんな形の先端的なことをできるようにいたしました。こういう形で、また、他大学からも、この教室の調査にもいらっしゃいました。

そして、こういうパイロット授業から、今、各個別の授業でやってるんですけども、授業風景のDVDをお見せしたいと思います。

(DVD上映)

これは、今年の前期に行われた授業です。初めが昨年度のパイロット授業です、3人の件。そして、後からののが、今年の理学部の化学専門の栗山先生がやっていたサイエンス・コミュニケーションの授業です。教養教育の、今年から基盤教育という言葉を使うようになりましたけども、全学、別に理学部の学生がとってわけじゃありません。いろんな学部がとって、ああいうふうなサイエンスに関する、きちんと地球温暖化を科学的に発表するような形に展開しているという形でございます。

今年の展開、さきほどビデオでご覧いただいたのは、全学で新規授業の実施という形、今、それぞれの先生が昨年のを参考にしながら、あくまで自分の専門性と自分の個性を照らし合わせているんな授業を展開していると、それを、今、ビデオで見たような形で共有化しており、我々は、他の人の授業を見て共有化して、いろんな検討会を行っているという形でございます。

では、その中で今からお話しするのは、私の授業についてです。私は、教養セミナーとして「生命を考える」という授業を1994年、平成6年からこの授業を開設してきました。何故かというのは、教養セミナーというのができたんですね。大綱化になりまして、少人数教育ということで、教養セミナー、もう勝手に皆さんやりなさいという世界がうちの大学で展開されました、少人数の特性を生かしてですね。そして、そこで私も何か出さなくちゃということで出したのがこの授業です。後から振り返っては、もうこんな昔からやっているのかと思いましたが、

そして、開講当時は、プレゼンテーションや討論形式の授業は山形大学の教養教育では殆どなかったので、意欲があり個性的な学生が全学から多数参集していました。6学部ありますからそれを対象に、ちょうど6学部の学生が来れるような時間帯に開講します。4コマ目にやったんですね。ですから、放課後もそのまま勝手に居残れるだろうという時間を私はわざわざ選んでいました。そうしますと、少人数だから30人以下という形になったんですけども、来るのがもう100人近くになってしまいました。他になかったからです、ライブがない。私のシラバスに書いたのは、何て書いたかと思ったら、ああ、しゃべりたくてうずうずしてる学生集まれという感じで書いていました。そして、何でこの授業を受けるのかと聞いていくと、しゃべりたくてうずうずしていますとか、そういう学生たちが、もう精銳が集まっていた、すごい個性のある人たちが。

もう当時の人たちは本当にすごかったです。学生たちは、今でもつき合いがあったりしますが、当時の学生の1人は、農学部を卒業して、ドイツに、スイスに農業研修に行っていて、私のところにはがきが届きました。何て書いていたか、ジャパンだけ英語で、あとは、「山形大学、授業で生命を考えるの授業をした先生」だけです。それで小田って書いていないんです。それで私のもとに届きました。そののがきは、そういうふうな形でたくましくいろんな形をやって、つき合いがずっとありました。

もっと面白い学生は、私が親しい教員のところへ行ってだべっていたんですね。だべっていたら、とんとんとノックして学生が入ってきました。そしたら、僕の授業を受講している女子学生なんです、医学部の女子学生。そして「何なんだ」と言ったら、「いや、小田先生の声が聞こえたから入ってきた」とか言うわけですね。全然違う研究室ですよ。それで、それで彼女は何を持っていたかと思ったら、パイを持ってたんですね。パイを持っていたから、「パイをどうするの」と言ったら、「隣の先生から本を借りたからお礼に」とか言ったから、「じゃあ、おれたちで食おう」とか言って食ったんです。ひたすら食っていたら、ちょこっと残ったから、「これをまた持っていったらいいんじゃないの」と言ったら持っていきました。そういうふうなすごく個性的な学生たちがいました。

そこで毎回、極めて活発な全体討論が繰り返されながら、彼らは夜遅くまでやっています、もう勝手な世界で、もう本当によく、彼らは自分たちで話し合いをしたりしていました。初めは分裂するんじゃないかというような感じでしたけども、彼らはすごく本当にやっていた。

しかしながら、近年は、教養セミナーでプレゼンテーションや討論形式の授業が増えていったんですね、自然に増えていった部分があります。そして、以前のような個性的な学生ばかりでなく、普通の学生が履修するようになってきました。そうしたときに、もうこのようなあのつくりで、すごく初めから能動的に来るような学生というのは、そうそういないんですね。だから、普通の学生のプレゼンテーションや討論を通して、思考力を育成する事業が求められるようになってきました。

こういうふうな私自身の授業に関しても、そのような変遷があります。学内でいろんな形で展開されたんです。そこで、このようなプロジェクトで、今年何をやるか、「生命を考える」の授業をやったんですけども、シラバスの中の一部ですけども、テーマとして「考える

ことは、その対象を尊重することである」とかいう形で自分で書いて、このセミナーは学生主体型授業です。皆さんの話し合いと発表で、楽しく充実した授業が進んでいきます。気軽に御参加ください等、いろいろと書いています。

そして、ねらいとしてまた笑いあり涙あり、次は、さて、参考までにこれまでの発表テーマをあげておきますと。どういものかと言いますと、この授業は生命というキーワードで、自分でそれから引っ張り出して何でも考えて、そして、ひたすらこうやって皆さんの前で発表して、それで、他の学生と議論するという形になっています。そういう授業形式。ひたすら発表と全体の議論、それで成り立っているんですね。

ですから、今まで話されたのも、アニメと生命とか、ベットの生命、生命倫理とか臓器移植、地球環境問題とか、もう好き勝手なテーマです。こういう形のもので彼らは話し合っていく。そして目標として、討論や発表を通して、生命や社会、自分に対する思考を深めていきますと。また、同じ大学生が何を考えているのかも学ぶことができますと。

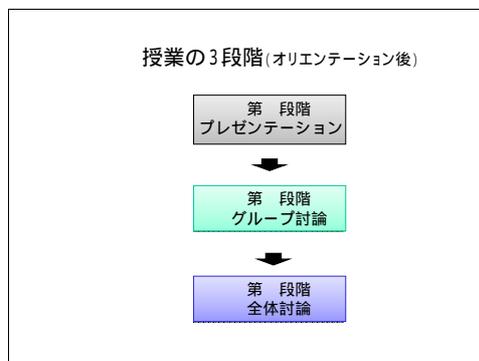
これが、びっくりしたのが、こういう授業をやっている私が驚いたのは、同じ年の人間が何を考えているか、学生同士知らなかったんですね。これに驚きました、正直言ったら。そして、他の人はこんなオリジナルな考え方をしているというふうに言うんですね。それに新鮮な驚きがあるんだけど、そんなのはこっちから見たら凡庸の考え方だろうと思うんですね、それは言いませんけどね。言いませんけども、そういう発見というのはこの人たちはなかったんだと。人の意見というのは殆ど知らない、同級生の意見は、こういうことに新鮮な驚きを私は思いました。そして、そういうところからやっぱり学ぶのは、同級生の意見からかなり学んでいくんですね。我々、先生の意見というのは、かなり遠いところの距離にあるんだということがわかってきました。そして成績評価は、発表とか授業への貢献度とかレポートとかいう形でやっております。

そして、学生へのメッセージという欄、その他もありますから、しゃべりたくてしゃべりたくてたまらない人求めます。大学生同士の話し合いから多くのことが学べます。自分をこうだと決めてかからないでください。少しの勇氣は大きな成長につながります。とかいう形で書いております。最後に、まずは話をしましょうと。昔はこんな優しい言葉は書いていませんでした。話をしたくないやつは来るなというタイプだったんですけど、今頃はそういう態度じゃない、謙虚な態度にしています。

そして、今年は同じ授業を二つ開講しました。火曜日の4コマ目、そして水曜日の2コマ目です。自由主張でいろんな授業が展開されていますし、大学の教養教育のカリキュラム改革も行われたので、人が来てくれないとやばいなと思ったんですね。そこで、火曜日では33名が来てくれました。1人が全然来られなくて32名ですけど、大体初めから全員続けたと思ったらいいです。学部としてはすべての学部から、6学部全部からこういう形で来て、男性が16名で女性が17名と。水曜日の2コマ目は、受講生18名で3学部から。男性と女性は同じような率でした。

では、ちょっとずつ私の授業のちょっと説明をしていきたいと思えます。私の授業の一番初めに、昔に実験した、2001年からずっと5年間実験して、今、3代目になっている「自分を創る」という授業は、

これは市民会館まで借りての発表ですけども、こちらのほうは、現在、すごくかなり形式的といいますが、ある汎用性を持たせるために、その前のパイロット授業を設けて、パターン化するような授業を構成しました。そのような授業だと御理解ください。ですから、授業の3段階、15回の授業があるんですけども、オリエンテーションの後に、第1段階としてプレゼンテーション、第2段階としてグループ討論、第3段階として全体討論、この3段階を15回の授業の中で組んできた、順番にですね。



何故このような組み方をしたかといいますが、私の専門といいますが、学部の方の授業で、グループ討論を私がやりますと、あと建築の人たちは建築と環境のコースですので、建築の人たちがグループでものをつくらせるんですね。そうしたときに、ある違う先生が1人が来て、1人ずつ何かきちんとつくって言えと言ったときに、自分たちは弱いんですけど後から言ったんですね。グループでやる力は強くなってのけども、1人でやる力は弱いんだと、私にうちの研究室の学生が言いました。ああ、これはまずいと思いました。やっぱり個人の力をベースとして、やっぱりグループの力、全体の力というところが必要なんであって、ああ、ちょっと悪い方向に流れているなというところで、プレゼンテーションとしては、まず個人の力をやりながら、そして人数を増やして行って、五、六人から、さらに全体の中でものを言うという力をつけさせようとしたんですね。

では、プレゼンテーションの一つ、プレゼンテーションは4つのモジュールから成り立っていて、1番目、グループ内の発表が1人3分。基本的にはグループ学習ですので、1人3分ずつ話をさせます。そして、厳しいところは、私はFDでも厳しいんですけど、FDでもSDでも研修でも同じなんですけど、これ、ほとんど同じやり方なんですけども、私は初めに言うておきます。3分で話すときに、評価は、1分で終わりましたとかあり得ないことですよ。情報は両方、量と質で私は評価するんだと。それを3分で話したときに、1分で話すって3分の1じゃないですかということを私はきちんと初め評価を説明します。ですから3分頑張って話しなさいと。プラスマイナス10%はいいですという形で時間、それから内容ですと、はっきりですね。そういう形を言って、1人3分ずつきちんと言えば、発表します、3分間、だあっとしゃべり続けます。そして、グループの中で一番支持された人が全員の前で発表する。この形式は、我々、他大学の調査で、三重大学の森尾先生からこれを基本的には学んだことです、その方式を、これ、いろんな形で汎用できるなという形で学ばせていただきました。

それから、全体の前、5グループだったら5人が前に出てしゃべるんだけども、その中で、また順位づけをやる。このときに私が言っ

てますのは、よその人の、よそのグループのいいところ取りをしないと。我々はここで決着をつけることではない、いいところがどれだけこの時間の中で伸びるかだけが問題なんだということを言っております。そういうことも、ぐだぐだ私は説明するんですけど、そういう形で説明します。

そして、学生とSA、Student Assistantの略なんですけども、学生のアシスタント。大学院生じゃありませんので上級生たちがやって、そして私の口頭によるコメントを入れております。

そして、プレゼンテーションのテーマと授業内容、学生たちがどのようにやるかといったら、初め、大学に入ってきたばかりですから、ちょっと前まで18歳なんですから、自己紹介の次は、ふるさと自慢大会というものをやります。今さっきの自己紹介は、予告もなくやるわけですから、ちょっと大変な作業なんですけど。次に、ふるさと自慢大会を来週はやりますと予告します。そして、こういう形でやりなさいと。

こちらであえてプレゼンテーションについての意味づけを話します。教員の指示・指導と書いてあります。相手に喜んでほしいという気持ち、相手に対してこれを伝えたいと思う強い意志が必要だとか、いろんな形のことを言ってます。そして後々にも、誠意、あなたの話なんて、自分の話もそうですけども、普通人はだれも聞いてくれませんよと。これを、五、六人の人たちとか、グループの人とか教室の人が黙って聞いてくれるんだから誠意を持って話なさいという形まで、いろいろ話します。私は、そして、ふるさとをよその町村の人に説明することなんてあり得ないよと、ふるさとのことをきちんと伝えなさいと、それがふるさとに対する敬意ですよという形。

また、私のスーパースター大会というのを次回やって、自分の生き方に刺激を与えた人、これは親が多いですね。びっくりしたのは、親と高校などの今迄の教師ですよ。そういう人が多いことがわかって、こちらも勉強させてもらっています。

10年後の私大会とか、あと自分でテーマを設定、こちらあたりから、いろんな生命に関することの発表になっていきます。こういう形でプレゼンテーションはみんなができるように、一応短いのをできるようにしています。

ですから、最後の二つの学生が発表したテーマはどんなのか、脳死についてとか臓器移植についてとかいう形のもの、こういうものを彼らはいろいろと生命という言葉に触発されてやったものです。

次、第 段階のグループ討論ですけども、これを五つのモジュールになって、2週間やります。1番目、全員の前で話題提供者を2人ぐらい振っておきます。そして、各々10分、パワーポイントを使って発表するようになります。

もうこの前に、個人の発表でパワーポイントを使わせるようにしております。山形大学の学生に、こうやって30人ぐらい、パワーポイントを使ったことない者と言ったら何人か手を挙げます、5、6人ぐらい。そして、じゃあ来週パワーポイントでねって、私は指導しません、実際、ほかの友達なり、情報センターに行ったら教えてもらえるから。コンピューターを持ってない者といったら何人かいます。そうしたときには、次の発表のときに人に借りるなり何かしてください。それだけの指示で済みます、はっきり言えば、山形大学のレベルだと思えます。これが私は必要なことだと思ってます。全員できない学生、今のところいません。積極的な学生でもないのに、これだけのことをき

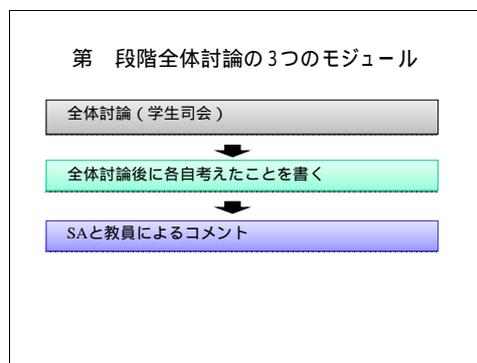
ちんと言えやってきます。そしてパワーポイントで発表できます。ですから、次の段階、個人が全員がクラスでできるようになっていきますので、今度は、代表者2人の10分の発表を、基本的にはテーマに興味のある学生たちに発表してもらって、そのことを受けてグループ討論をして、グループ内容を全員の前で発表する、共有化していくわけですね。そして全体討論をします。そして最後に入れるのは、討論だけじゃなくて、自分で考えたことを20分間ぐらい書いてもらいます。そして、だあっと20分の時間の中で書き上げてくる。こういう形で、議論と、グループの中で埋没しないように最後に自分で書くという形を組み立てました。

グループ討論の内容は、こういった脳死の問題を2回と、人工妊娠中絶を2回やっていった。学生の変容をこういう形で書いております。ちょっと写真で模様を見ますと、こういう形ですね。これが第段階のところですよ。おそらく写真あります。話題提供で10分ずつ話したところですね。それを受けて、グループで討論しております。



もうこのころには、人の話を聞くときには第1回目と言ってます。第1回目に、人の話を聞くときにはメモするのが当たり前だよと。そしたらメモします、それはずっと続きます。講義も同じなんですけど、これは、そういう形で彼らはメモしながら、それを題材にして、話し合いながらメモをとって、何とかまとめようとする。そして、グループごとの発表をしていって共有化をしてという形です。最後に私がコメントを述べてという形ですね。

第 段階、全体討論、三つのモジュールとして、もう今度はグループ討論というよりは全体討論、全体討論後に各自考えたことを書いてもらって、我々がコメントを述べるという形にしております。



これで発見したのは、やっぱり5、6人では、こういう形で全部しゃべるんですけども、30人ぐらいになるとやっぱりしゃべりづらいといいますが、発言力が弱い学生が出てきますね。これあたりをどうしたらいいのか、また、彼らは興味があるかないかによって、5、6人のときは全部話すんですけども、そういうところが、ことしの普通の学

生たちに対して思ったことです。全体討論としては、自殺についてとか地球環境問題、生きることにについてという形で、彼らは話していました。

こうして彼ら、彼女たちが考えた、その20分間で書いたことを見ますと、例えば農学部の学生ですと、「今までこんなに真剣に脳死や臓器移植について考えたことがなかったので、今回、自分で考えたり他の人の意見を聞いたのは、とても貴重な経験になった」と。そして、「私たちのような一般人が考えるということも必要だということも強く感じた」。彼らは、専門家だけが考えるんだと思っていたんですね。そのようにまた駭かれてる部分もあります。私自身は、市民というものがこれからは大事だと思っていますので、市民がどれだけ考える人間になるかというもので、日本の認識が崇高なものになるかどうかということが、私は今チャレンジしていることであって、市民が考えることは大事なんだと思っています。

次に、「本当にその考えは正しいのか、他の考え方はないのか考え続けていくべきだとも思った」と。次のコメントで、「考えることの大切さと同時に、自分の意見を持つことの大切さや他人の意見を尊重することの大切さも考えさせられた」と。

次にBの男子学生、「賛成と反対の立場に分かれながらも互いの意見を尊重し合い、はっとする意見が幾つもあり、とても考えさせられる話し合いであった」ということでした。幾つかありますから後から読んでいただければと思います。

人工妊娠中絶で考えたことですね。Cの学生は、「今回の討論会の発表を通して、人工妊娠中絶について、さまざまな角度から考えたり、ほかの人の意見を聞いてたりすることができてとても貴重な時間を過ごすことができたと思う。このような形で、この問題についてほかの人と意見を交わすことは多分生まれて初めてのことだろうと思う」と。大体、意見を交わすというのは、ここは総合学習ができてるんだけど、それとは本当に新鮮だったみたいですね。「自分は中・高の保健の授業の中で、性教育を受けてきたはずだったので、むしろこのような場が、実は今まで一度もなかったということに驚いていたりもします」と。よく言われるのは、中・高でこういうことについて、もう少しやっぱり話し合いたかったという形で意見が出されたりします。

また、Dの女子学生からは、「地域・家庭・学校などのネットワークについて、性教育だけでなく、子供が社会の中で成長するためにとても重要であると思う。そのような連携がかなり希薄な社会になっているのは確かだが、このネットワークに期待できると思う」という形で、地域ということ、この人工妊娠中絶、個人の問題として、性の問題としてとらえがちなのが、地域の問題としてかなり上がってきたのは、一緒にうちの学生の4年生の女子学生が受けていたんだけど、びっくりしたと、地域の問題にまで踏み込んできたということを語っていました。私もその点では確かにびっくりするような形で、やっぱり話し合う時間を十分にとると、そこまで行き着いていくんだなと思いました。

自殺については、この農学部の学生がすごく、「本来はもっとしっかり国民を守らなければならない政府や国家という組織は、なぜ自殺を議題として取り上げないのだろうか」と。取り上げているんですけどね、実際は、「国を守る存在以上に地方の国立大学の学生のほうが内容が濃く、質のよい討論をしていると感じた」と。そん

なこともないと思うんだけど、思い上がりだとは思いますが、彼はそのように、「危機感があったとしても、その意識を行動に移すことができなければ全く意味がない。生命を考えるの授業風景をビデオカメラで撮影して国を守るという組織に送り、ぜひ感想を聞いてみたいものだ」と、若者としての独善性があるけれども、しかし、自分たちが考えて、触れられるマスコミとは違うんだというところを思ったんでしょう。

学生たちの授業に対する感想(ポストアンケートより)

- 問「授業内容の量についてどう思いますか」・・・3.00(適切)
- 問「授業中に良く考えましたか」・・・4.78(とてもよく考えた)
- 問「あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか」
・・・2.39(やや難しい)
- 問「授業時間外学習に積極的に取り組みましたか」
・・・3.94(やや積極的)
- 問「授業外学習の時間」・・・3.22(平均1～2時間)

では、この授業に関する感想はどうかといいますと、授業の内容の量についてどう思いますか、まあ適切だと。授業中によく考えましたかが4.78。5段階評価ですから、とてもよく考えたという感じですね。あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたかというの、ちょっと難しいくらいです。この時間外学習に積極的に取り組みましたかが3.94、とりあえず積極的で。授業時間外学習の時間は平均1から2時間、大体が単位の実質化という言葉に合ってる感じだったです。基本的にはそのくらいしか私は求めませんでした。他の授業の負担にならないような形で意識していました。「自分を創る」なんて、むちゃくちゃな時間をかけてますから。

受講して良かった点と伸びた能力は、発表の準備がよい訓練となった、口頭発表などプレゼンテーションの仕方がよく身についた、クラスやグループの友人の考え方がよくわかった、自分が関心を持つ分野で深い知識を得た。

獲得した、あるいは伸びた能力は、プレゼンテーション力が4.50、コミュニケーション力が4.28、問題発見能力。こちらが期待したような能力は身につけているということです、はっきり言えば、

次に、学生たちの今後の学習や生活に対する効果はどうかというアンケートでは、この授業で学んだこと・向上した能力が、ほかの科目あるいは今後の学業に役に立つと思います。4.78。これは予想外に高いです。ええ、本当かなと僕は思うんだけど、いや、そう言ってくれる、他の授業とかいろんなものに役立つと言ってくれるところに、このうれしいことがあります。そしてさらに、この授業で自分の大学でこれから専門として、何を学んでいきたいかについてヒントを得ることができましたかって言ったときに、3.89、4を切っておりますけども、それでも学問を教えているわけでもないし、専門性をでもないのに、これだけの人間が自分なりに次の専門に繋がるようなヒントを得てるということはいずれのことです。さらに、この授業で学んだこと・向上した能力が、日常生活や人生にとって役に立つと思いますかって言ったら、4.72という形で、役に立つと言ってくれます。

行動変容としては、積極的になったという人は39%、4割近くの人たちは言ってくれる。また、大学は楽しくなったかが28%。ちょっと

前、高校生だった人が、こういう形で大学への接続にこの授業がちょっとでも役立つらしいところでした、はっきり言えば、

学生の授業の感想としてはいろいろと、この人は、Fの学生は、最後から2行目、今ではガクガクだったのがカクカク程度で済むようになりました。ありがとうございますという形で、ユーモアを交えて書いてくれてうれしいところです。という形で、時間もそろそろあれですので、こういう形で書いてくれました。

こうして、我々の目的は、この授業は、我々教員がよかったよという形じゃなくて、社会人基礎力、人間力を身につけようといったときに、この社会人基礎力はどこから来たのかといたら、これは経産省から来ました。社会的なものです。社会の人から見て、学生はどのように育っているか見てもおうじゃないかと思って、課題発表コンテストというものをしました、こういう形を。高校の先生、進路指導の先生とか、それから企業の方々に何人か来てもらって、学内の我々も審査員をやりました。10分発表してもらって、そして5分質疑応答、それを7つぐらいの授業で放課後にやりました。こういう形で、そして最後に、こういう形で順位もつけまして、審査員が順位で、1、2、3位、副賞が米沢牛だったんですね。1番が米沢牛1万円分。これだけでみんな万歳と、みんなそういう感じになってます。後期もこういう形でやりますので、授業を担当してる人は、確実にこれに向けてやるところもありますので、もう米沢牛狙いで、私も食べることはできないんですが、ここで愚痴を言ってもしょうがないですけど。

最後にまとめをします。時間がちょうどいいぐらいですね。まとめ、こうしたことができていること、山形大学のFDの積み重ねが、今回のプロジェクトにつながっています。突然こういうものが始まったわけではないんだということは、御理解いただけたかと思います。

組織に新規性のある刺激(新しい授業形態)を導入すると、組織が活性化され、新しい試みが自立的に起こってくる。これは過去のもので、2001年の頃のことから起こっています。今回のプロジェクトで急に起こったということではありません。そういう形で、昔の「自分を創る」をやった頃から、やっと大学の中で本当に起こってきました。

次、高い専門性と個性のある教員が展開する授業の自由な工夫こそが、大学の財産であり新しい時代を切り開いていく突破口となると思っています。我々は単に制度化をすることではなくて、大学の中から自由がなくて、研究はもちろんのこと、教育もないんだということです。これはおそらく少し忘れかけている部分もあるんだろうと思っています。そして、それをどうやって展開していくか。

大学の財産を発掘するために、授業の公開を高める必要があるんだと。いろんな大学には眠った財産がいっぱいありますからね。そういうものを発掘していくことがすごく必要なんだろうと思っています。

そして、教員の相互研鑽によって授業の質は高まり、改善されていくんだろうと。ですから、それぞれの大学さんの校風というもの是非常に大事なんであって、決して何か見せたくないものを暴いていくという作業は非常に難しいですよ。それで、大学の中の風土は悪くなったりしますから。そこらあたりは大事にされたほうがいいと思います。

最後に、そして、定期的に、組織として同じベクトルに向かうように調整する必要があると。自由というものは、あるときになったら拡

散していきます。これを大学の力として、分野を同じベクトルにどうやってやっていくかが、また組織として問われているんだろうと思っています。

最後に、現在の大学教育に求められているのは、対処療法として授業の種類を増やすことではなく、人間の骨格を形成する授業こそが求められているのではないだろうかということで締めくくりたいと思います。それは、例えば、キャリア教育とか初年次教育とかPBLとか、そんなに列挙したものが全部やりなさいと言ったら、120を有限の中で増やすわけにはいきませんからね。120の単位の中でこれを増やしていくことによって、大学の持つ根幹の力というものも薄れていくところもやぶさかではないんだと思っています。

ですから、我々はコミュニケーション能力とかだけではなくて、大学をばんと見たときに、この大学を卒業した学生というのはすごい自立して、すごく生き生きとしてエネルギーに漲っている学生、そういう者を私は世に出すことなんだろうと思っています。その中に、この学生主体型授業というものも大きく絡んでいくんだろうし、これからは冒険としているんなことにチャレンジしていくことが全国で展開されれば、日本の高等教育が良くなっていくんだろうと思っています。

取組発表(1)

「学生のつまずき・教員のつまずき
-学生主体型授業の不確実性-」
山形大学 杉原 真晃 准教授



杉原 皆様こんにちは。ようこそおいでくださいました。

寒い山形から参りまして、この僕の発表が寒くならないように気をつけたいなと思っているんですけど、小田先生の後で、この後3名の先生は本当にもうベテランといたら失礼ですけども、熟練されて素晴らしい実践を発表されますので、私のようなその若輩者が一体何を発表したらいいのかと、正直、足、皆さんからは見えないと思いますけどがががなんです。

私が、では何を発表することで皆様にとっていい時間になるかなといういろいろ考えまして、本日は、こんな授業をやっていますよと、どうですかみたいな成功事例といいますが、そういうものを提供するよりも、ここのタイトルにもありますけども、私自身のつまずきといいますが、難しいんやねみたく、そういうところは是非皆様と共有できればいいかなと思っています。

この後、3名の先生は、特別その山形大学の「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」と関係した授業発表というわけではありま

せん。「学生主体型授業の冒険」ということで、各先生方の学生主体型授業の取組について御発表いただきます。そういった関係で、私の発表では、先ほど小田からの話にありましたようなプロジェクトの延長上として、私が昨年、「未来学へのアプローチ」というパイロット授業をしたという説明があったと思いますけれども、それをいかに自分の授業に応用して、いかにそこでミスをしたかみたいな、そういう話をしながら学生の姿を御紹介していければと思っております。基本的には、皆様のお手元のレジュメのとおりに進めたいと思います。

まず、不確実性ということ、これは一体何なんだということです。ここの部分を是非共有していただくと私はほっとできるんですけども、こうやれば学生はこうなりますよとか、こうやったら上手くいくんですよみたいな、それはあるでしょう。私の中にも、こうやったら上手くいった事例もあります。けれども、それは違う授業では上手くいかなかったり、あるいは他の先生の発表で、ああ、素晴らしいな、これはということ、ちょっと真似してみようと思って、ある程度自分の中で加工してやってみたものの、やっぱり上手くいかないと思いますね。

学生同士、グループディスカッションをするときに、まず親しくなってもらうためにアイスブレイキング、自己紹介とかやっても、逆にアイスメイキングをしてしまうときもあるわけです。もう学生が凍りついて、特に1年生だけだと、結構オープンなマインドでやってくれるんですけど、そこに3年生がぼんと入るだけでも、3年生的にはもうちょっとこんな感じで、もうだめだみたいな感じでなっているわけです。そこに引きずられて、もうそのグループ4人が全員凍りついてしまうとか、いっぱいミスをするんです、私のほうで。

そういうふうな、果たして、あるんだろうかということが、ここに書いてあります。つまり、レイヴ&ウェンガーという正統的周辺参加論というのを論じている方々ですけども、要は、学習は文脈に依存していると、この文脈というのはいろいろあります。その学生の質というものもあるでしょう、教員の特性というのものもあるでしょう。あるいは環境、地域性、あるいは国、いろんな時点でいろんな文脈を持っていますので、必ずしもこうなれば必ずこうなるなんていう論理はないと言われてます。でも、その中でも応用できる部分というのはあるはずだ、ここの間でこの葛藤といいますか、どうしたらいいんだろうという悩みに打ちひしがれているわけです。

2つ目の点ですけども、学生の主体的活動の尊重と教育責任の放棄の境目ということです。教育の心理学化、今井康雄先生という東大の先生がおっしゃっていますが、要は、学生の主体的学習を尊重して移譲していくわけです、学生に、授業時間、あるいは教育活動から学習活動へどんどん学生が決定していく、決定権を移譲していく。そのときにどこまで私が介入すべきなのか、介入し過ぎると学生は簡単に答えを待ちます。簡単に、先生、次何、みたいにはばっと見るんですけど、何でもいから考えて書いてって言っても、どう書いていいか先生の答えを教えると必ず言ってきます。といって、何でもいからどうぞと、書けないのはあなたのせいでしょうなんていう責任放棄といいますか、してしまうと、学生全体がどよんと下がってしまって学習の質が保障されない。このあたり、どこまで介入してどこは介入してはいけないのかというところは常に真剣勝負なんです、必ずしも上手くいかないのが私の現実です。

よく、学生の、大学生の意欲が無いだとか学力が無い、FDをやっている。FDをやっているでも最終的に学生のやっぱり意欲が無いと始まりませんよね。やっぱり学生にもちゃんとそこは言わないといけないというように落ちつくことが多いんですけども、そのときに、その学生の意欲をどうやってたきつけるんだというのは、生半可なことじゃないわけです。意欲スイッチみたいなのがあれば、ぶちっと押さえればいいんですけど、そんなものないわけです。私たちは学生の脳の中にぐわっと行って、電波で学生の脳を刺激してという、そういうことができないわけですね。その中でどういう形であれば、学生がぐわっと自分の意欲を炊きたてて、エンジンをかけていくのかということ、そう簡単にできることではないんだろと思ってます。そういうことで、先ほどもちょっと申し上げましたが、よい結果の報告ではなくて、つまりきとその試行錯誤をお伝えしたいということになります。

授業の概要ということですけども、前をご覧ください。ここは、皆様のお手元に書いてない情報です。「なせばなる！～大学生活事始め～」という、こういう授業を御紹介したいと思います。基盤教育、全学共通教育とお思いただければいいと思いますが、教養セミナーで選択科目の授業です。受講者は1年生が主体で、6学部の学生が全員受ける権利があります。大体20名から40名ほどです。このようになっている授業になります。授業目標はもう皆様のお手元にありません。別にメモをとるほどのものではありませんので、ざっと読んでいただければと思います。

要は山形大学を知る、初年次教育として、私はこれをデザインしましたので、よく自校教育と言われるようなものがあるかと思いますが、単に自校の教育したってつまないだろうということで、ここに学生主体型を取り入れてみたらどうだろうと思ったのがこのきっかけです。ですので、単に知るとかそういうことではなくて、自分の学びをつくっていくためのツールといいますが、きっかけとして、山形大学ということがテーマとしてあるということになります。

(1)、(2)、(3)とありますけども、山形大学における教育の仕組みとか、大学生活の様子を理解して自分自身の生活のイメージを構築するとか、2番目、主体的な学習のあり方を見つけるとか、3番目もそうですけども、自分なりの意義を見出して、よりよく生きるための活動をつくり出すということを目指しています。これは山形大学の中に、学生が自分たちで企画を立てて、何かやりたいことをやっていく、そのための財政支援を大学が行っていくという元気プロジェクトというものがあります。そこに、やりたいことを考えて企画を申請しようと。そのために、じゃあ何をやりたいのか考えるために大学を知りましょう、あるいは地域を知りましょう、自分自身を知りましょう、そういう授業です。

授業構成はこのようになってます。お手元のレジュメの授業概要が文章ですと書いています。それが図式にした形でいうとこういう形で、毎週土曜日に集中講義として、毎週行っています。授業は、山形大学は1コマ目から4コマ目までありまして、8時50分開始で、終わりが16時10分です。これと同じ時間帯を毎週土曜日に行っていく、4回行うということになります。

レジュメのほうにも書いてますが、第1回のテーマは山形大学を知る、大学生を知るとかということで、新入生歓迎フェスティバルというのがあります。これをフィールドワークに行くというようなことをやっ

ています。

第2回授業では、周辺地域にフィールドワークに行く。ちょっとこの写真に載っているような、本当に地域に出かけて、おそば屋さんとか不動産屋さんとか、あるいは町を歩く人とかに何でもいからインタビューしてくるという、無茶なフィールドワークですけども、とにかく大学生あるいは山形大学が、あなたにとってはどういふうなものですかとか、どういふうなことをしてほしいですかとか、どう思っているんだろうということについて学生が突撃インタビューに行くという課題です。

そのような形ですが、その合間合間に授業時間外学習があって、学内のいろんな諸施設、文化施設、図書館、博物館、あるいは留学生の交流センター等に行き情報交換をしていく。そういう中で、自分たちは一体何ができるだろうか、大学にとっては、今、一体何が課題なんだろうかということ、自分で考えて見つけ出すといういふうなことを授業時間外でやってきていただく。

それで、第3回の授業で、右側の写真ですけども、ディスカッションをして、企画をグルーピングして立てていくという授業になってきます。

レジュメのほうをめぐっていただいて、2ページ目ですが、授業時間外学習3で、その第3回授業で練った企画に対して、プレゼンテーションを第4回でします。そのためにプレゼンテーションファイルをつくってきなさいというのが授業時間外学習3ですね。そのようなことで、この授業は、いわゆるプロブレムベースでもありますし、プロジェクトベースでもありますし、企画をつくり出すという意味でプロダクトベースということも可能だと思えますが、そういう探求型の授業になっています。

そこで3番、学生のつまずきということで、じゃあ、どういふうなところにつまずきを学生は見せるのかということですが、活動の自己目的化と書いてます。要は、主体的学習により何を学んだのかということ忘れて、活動的になること自体が目的になってしまう。活動したから何かやった気になるんです、学生としては何か学べたような気がする。ぱっと何か見つけたような気がして、そのときは心が開かれる。しかし、ひょっとしたら、それはここにも書いていますが、何のためにやっているかを見失っている場合、あるいは課題で先生から与えられたから、授業時間外の学習をただやっているだけに終わってしまうんじゃないかなと。それはよい成績をとるといふ、それまでの受験的勉強の繰り返しになってしまう、これは本当の意味の主体じゃないんじゃないかなという気がしています。

2つ目、学習目標の下方修正ということで、学習目標を学生自身が決定していきますので、困難な課題から逃避しようとするのはやっぱり生じるんですね。これは学生間格差とも関連します。やる気のある人とやる気のない人、フリーライダーとよく言われますが、そういう人がいると何か上手いかないんです、グループワークというのは、そのときに、活動を下へ下へ下げていくことを大抵は選びます。このときに教員がどうしたらいいのかというのが私の課題であります。とにかくこういった形で下方修正ということが起きている。

これに対して4番、私は一体何だったんだということをお問うたわけですが、先ほども言いましたが、つまずき、この放任すべきなのか、あるいはここに介入すべきなのか、この下方修正を、ちょっと低すぎないとか例えば言って、この辺まで行ったほうがいいん違うのと

かって、果たして言っているのかどうかとか、それを言うことは答えを僕は持っていて、初めからそれだったら僕が言えばいいわけです。この目標に向かってあなたたちはやりなさい、1回でも学生自身に考えてもらったわけですが、自分たちで。そうすると、それを否定して、やっぱりこっちだよと示すのは、何かちょっとルール違反のような私は気がして、どうなんだろうと思ってるわけですね。学生の主体性を損ねずにつまずきを克服することは可能なのかなとか。

そういう意味で、駒林先生なんか80年代に提唱されてました、つまずきの積極的活用に関して少し参考にしたんですが、要はつまずき自体を学生が自覚をして、それをじゃあどうするか自体も、学生さんにリフレクションといいますが、考えてもらって、私とその学生をつまずきを取り除いたりとか引っ張り上げるのではなく、学生自身がつまずきに気づいて、このつまずき、じゃあどうすると、どうしようと、みんなでそれ自体を議論していくということに今回は焦点を当てたわけです。

5番ですが、教員の思考錯誤ということで、このような形で、一応はつまずきの積極的活用のために、まず本物に触れるということをもう一度焦点を当てて、これによって学生が自ら教室の中の学習課題だけじゃなくて、自分たちのためにやっていて、自分たちのやろうとしていることは社会と直接関連するんだという、そういう自覚をしてもらおうと思って本物に触れるということをやります。

そして、学習目的は問いかけ。最大限、私がかここで学生に投げかけたのは、本当にこれでいいのという言葉ぐらいだったと思います。本当にこれでいいのと、本当にやりたいのと、いいねんなみたいなことを言うぐらいしかできなくて、それでもそこできらっと目が変わる学生さんもいます。

その中で1番ポイントなのは、きらっと輝いた学生は必ず困るんですよ。輝かない学生がいますから、グループの中に、輝いた学生だけ浮いちゃう、疲弊していく。私、嫌で嫌で、本当はリーダーなんかになって、こんなまとめたくなかったのに何となくなってしまうから、でも嫌なんです、本当はみたいなことが、ぼろぼろ出てくるんですね。そこまで経験させてしまうことは、大学教育にとって本当にいいのかなとか。僕たちでも克服できない歪ですよ、多分。それを背負わせていいんだろうとか、中々私の中でも矛盾を感じながらやっていくわけです。

(2)の学習目標の下方修正の対応も同じですね。今言ったような形で、いろんなことをしますが、結局最後は三つ目のその点にあります。目標設定・自己認識へ問いかけることしかできない。問いかけてきらっと変わった学生を、そばに寄り添うしかできないんですね。そうやな、つらいなとか言いながら、どうするとか言いながらサポートしていくしかなかったんですね。ああだこうだ、こうでアドバイス、こうしたらいい、ああしたらいいというアドバイスは極力控えたわけです。そんなことで、学生さんも苦しみながら、私も本当に苦しみながら、本当にこれでいいのかなとか、ぎりぎりのところで、あえて手を出さずに、あえてどろどろしたところに学生を置いておきました。放任ではなく、あえて意図的に置いておいたんですけども、そうしたら学生さんはどうなったかという、6番目です、3ページ目。全体的にアンケートもとりましたら、非常にこの授業は良かったという、幸いに好評をいただきました。その中で、例えばこのように書いてあるような、学生Aの意見だとか学生Bの意見とかが出てきたわ

けですね。学生Bさんなんか聞いて、僕は涙が出てきたんですけども、この授業を受けてからずっと「なせばなる」という言葉をつぶやいて頑張っているんですというようなことを聞いて、間違っはなかつたのかなと思っています。

(2)で半年後の振り返りということで、学生さんのC、ああ、今から思い出せば、あの授業でやっぱり上手くプレゼンできなかった、ディスカッションも上手くいなくて、やっちゃったなと思ったけども、そのときに、だめだ、やっちゃったねとか、でも私も無理やったから大丈夫だよみたいな、そういう支え合う文化があったと。決してできないことに対して、私が、それできてないよとか、こうあるべきだなんて示すと、恐らく学生さんたちは、できないことに対して引っ込んでしまうのかなと、いいように解釈すれば思ってます。そこを彼ら自身で支え合ったということが乗り越える一つのきっかけになったと言ってくれたというのは有難いなと思います。あとは時間の都合で全部読みませんが、要は、学生DもEも非常に、その授業後、授業が終わってから半年後も、この授業が非常にいい意味で生きているということを書いてくれました。

最後のまとめですけども、そういう形で学生さんは頑張っているの、私は今は精いっぱいやっていますけども、まだまだ努力は足りないんだろうと思っています。そのために、学生の中で、先ほど、そのできないこと、自分たちができないことを認め合って支え合うということが、彼らのできないつまずきの克服には必要だった。同じように、やっぱり私たち教員も授業を上手くできない、失敗した、上手くやろうと思うけどもどうしたらいいかわからないということを確認合って支え合える文化が必要なんだろうなという、これがFDなんだろうなと思った次第です。以上で私の発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

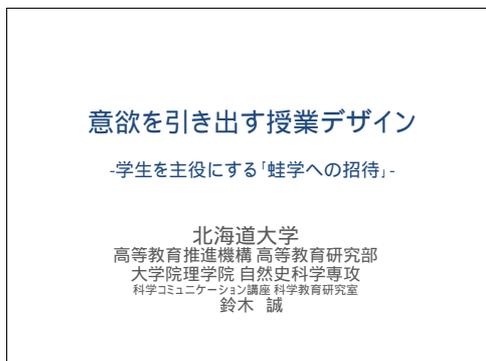
取組発表(2)

「意欲を引き出す授業デザイン

-学生を主役にする「蛙学への招待」-

北海道大学 鈴木 誠 教授

鈴木 皆さんこんにちは、これから20分近くお話しいたします。ちょっと心臓、今、ばくばくで、本当はこういうところでお話するのは苦手なんですけども、私がやってきたことについて参考になればと思ってお話したいと思います。



テーマは、「意欲を引き出す授業デザイン」、学生を主役にする、これ「かえるがく」と書いて「あがく」と読みます。「蛙学への招待」と

いう授業を北海道大学で持っております。北海道大学の全学教育については御存じの方も多いと思いますので、話から省かせていただきますけれども、「蛙学」というのは、京大の市川衛先生が昔書いた名著で「蛙学」というすごい専門書があるんですけど、そこへのオマージュで「蛙学への招待」と名づけたわけです。

私の話をする前に、私の略歴をお話した方が、何故こんな授業をやっているのか御理解いただけると思って、実はこういうスライドを用意してきました。下の職歴のほうを先にご覧ください。今、キリンビールに吸収されてしまったんですけど、私は元々民間企業にありまして、本当の専門は細菌学なんです。それから中学校の教諭、高校と、十何年間、現場で教諭をやっていました。いずれも名うての教育困難校で、新聞やNHKや、あるいはいろんなところに報道されたところで、ずっと生徒指導をやっていました。

一度、退職届を書いて、もう1回教採を受けて高等学校に行くと、そこでも、そこは年間退学者が110名ぐらいのやはり教育困難校で、その頃から、どうも実験ばかりやっていたはだめだなと、意欲とはそもそも何なのかというテーマにぶつかって、今日があるわけです。

まだ高等学校の教諭をやっていたときも、本格的にこの研究をやりながら、意欲とは何かって、意欲を引き出す授業デザインとは何かということをやっています。

フィンランドへちょっと飛んで、何かおまえは海外教育に関心があるのかと思われるかもしれないんですけど、私が開発してる意欲を測定する調査要旨と、ヘルシンキ大学の調査要旨、ベースの理論が一緒なので、そういうところからフィンランドの教育。最近、こちらの話をしてくれというのがすごく多くて困るんですけども、私は日本が優れていると盛んに言うんですけど、少々困っています。元々は意欲の研究が私の中心になります。北海道大学に拾われたのは、意欲の研究をやっていたということだったんだろうと思われます。長くなりました。

実は、これが私の蛙学へのベースになります。中学校ですべて生徒指導をやって、かなり疲弊はしたんですけど、とりあえず校内暴力も治まったと、再び教採を受け直して、この商業高校、これ関東地方です、商業高校に私は赴任しました。

必ず診断的評価というのをやっていました。要するに入試以外のどんな力を持っているのか。この子供たちは、実は「さぶろく、じゅうろく」と答えるような高校生ばかりです。偏差値で人を判断してはいけないんですけども、本当に自信がなく、テストでぼろぼろになってきている子供たち。特に、入試以外に彼らのバックに何があるんだ、どんな学びをしているんだろうということで、こういうテストをやりました。カエルの絵を書いてみましょう。そうすると、これは農家の長男なんですけど、2本足のカエルを書いてきたんですね。本人を呼んで、どうしたの、間違えたのと聞いたら、いや、カエルは2本足だと、おまえが間違っている。そこで、写真を見せたら、それは写真の世界で現実とは違うと言い張るんです。今、皆さん、笑われたと思うんですけども、実際、私は1学年全部もってましたので、大急ぎで診断テストを全員見たら、2本足は1人でしたけれども、50名ぐらいがとても生物とは思えないような絵を書いてくるんですね。それでは恐らく、所謂、細胞から始まる、理知的概念から始まる、次にゲノムが出てくるような生物はできないだろう。



この商業高校に私が赴任する一つの条件として、校長から理科は好きにしていよということをお願いしていましたので、早速、教科書の内容を逆転しました。BSCSというのは、Biological Science Curriculum Studyというアメリカの教科書なんですけど、それは初めに生態があって、最後にゲノムがあるという、マクロからマイクロへの流れのものでした。こういう子供には、まず自然があって自然体験を潤沢にさせなければいけないだろう。その高校の教科書を参考にしながら、日本の教科書の配列を逆転させました。

農村部の商業高校で猛禽類がいる。夜中はフクロウがほうほう鳴いているようなところですので、非常に両生類が潤沢だったんですね。これは、まさにお金をかけなくても採ればいいんだと、手に入る人を連れて、これを主体にした授業構成にしたわけです。両生類というのは進化もあり、生物もあり、外部形態、内部形態、生態、あらゆるものに使えるんですね。それから、ああいう子供ですから本物との直接体験、とにかく本物と接させよう。「さぶろく、じゅうろく」という答える子供たちは本当に自信がないんですね。まず褒められたこともない、とにかく彼を主役にしよう。これが、お恥ずかしい話ですけども、二十数年前に思い立ったことです。これが、今日の北大でやってる蛙学の原型になりました。

授業の風景です。今、ここにカエルが落下しています。これ1時間かけて、高校の裏にある池に全員放し飼いにします。放っておくと、どこかに上がったりまして、ばっくれたりしてしまうんですけども、その辺はきちんと私が管理しながらですね。とにかく、まず初めに自然がある、こういうとこにカエルがいるんだよと。生態から始めるような授業を開始しました。当然、形態学というのは魅力的です。何故かという、正確性と固執性というのは、ある一定の能力を育成させるきっかけをつくることのできるんです。ものを正確に見せるというのは、非常に大事な科学の、サイエンスの基礎になります。こういう状況で必ずつって全員にやらせてみました。これ、はさみの角度で、この子がいかにスキルに習熟してるか、おわかりになる先生もいらっしゃるかもしれません。要するに事前指導を徹底して、そして事後指導もきちんとやって、こういう形態学習を導入しました。

本物との接触が一番重要です。これ、一番左は私なんですけど、とにかく僕は学年主任、それから学校、職員全員を敵に回しながらも、とにかく彼らの視点に立たなきゃどうしようもないということで、1日、森の授業ということで、全員を山の中に連れ出して、実験実習をやりました。もちろん、これには事前、前後の事前指導を行います。本物との接触の徹底ですね。校長には危ないここには連れていけないよと言うんですけども、そこに行かないと自然の巧みさというのはわからないんです。敢えてこういうところもルートに入ります。

終わった後、グループごとに、とにかく自信のない子にチャンスを与える。とにかく何か報告しなさい、簡単授業をやってくれというふうに頼みます。彼は自信はないんですけど、一生懸命調べてやってきます。昔はこういう模造紙で書いてプレゼンしていたんですけど、とにかく褒めてやる。字を間違おうが、意味がわからなろうが、とにかく褒めて褒めて、私はよく言うんですけど、なめまぐるということをよく言うんですけど、抱きしめてなめまぐるくらい、うんと褒めてあげています。これが今日の北大の蛙学のベースです。

大学が求める能力 大学入試センター1991 鈴木2001

- ・基礎知識・基礎技能・数理能力・語学力
- ・理解力・読解力
- ・問題解決能力(情報収集・情報処理・推論・メタ認知)
- ・創造性・固執性・思考の柔軟性・発想力・探究心
- ・学ぶ意欲・正確性・チームワーク力
- ・文章表現能力・自己表現能力
- ・判断力・注意力・集中力・人間性・持続力
- ・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力

大学が求める力、これは大学入試センターの因子分析の論文に少し私が手を加えたものです。通常、我々は上の2行、基礎知識・基礎技能・数理能力・語学力、理解力・読解力、このあたりを学力と呼んで、いわゆる入試でチェックするわけです。でも実際、大学で求める力は、もちろん大学でいろいろあるんですけども、例えば北海道大学の場合は、やっぱり赤で書いたところ、いわゆる問題をいかに集め処理し、ロジックを組み立て、メタ認知するかという力、そのベースはやはり意欲であろう。その裏には創造性やこだわりもあるだろう。このあたりの入り口をやはり見せると、人と中等教育の様子を、割と私は知っていたつもりだったので、多分このあたりの教育は欠けてくるだろうと思って、先ほど、高校時代にやっていたことをベースにしながら授業を開講したわけです。

「蛙学への招待」のコンセプト、表向きは両生類無尾目の総合学習。両生類を一種モチーフにするわけです。この授業は、文学部から医学部、自由に選択できる授業ですですので、文系にもターゲットを与えている。理数もあります。けど、文系にも理数マインドを。そして、本物との接触を徹底させよう、これがこの蛙学の立ち上げた一つの私の動機です。今から11年前になるでしょうか。

2つ目、問題解決の入り口をとにかく体験させる。問題解決能力というのは非常に難しい能力で、一朝一夕に養えるわけじゃないんですね。でも入り口を見せてやろうと。徹底した情報収集、処理、これにはあくまでも正確性とこだわりを求めた。これらはチームでやろう。学習方略を獲得できるようにしてやろう。

そして3つ目、北大生だから意欲があるというわけではなくて、実は中にはいいけてるやつもいるわけです。これは、私が中高の子供たちとずっと接してきてよくわかっているの、とにかく意欲を引き出してやる。授業の主役にさせてやろうと。そのときに、自分の授業デザインは明確にすると、これが非常に重要なところなんですけども、今日、この話ができないんですけど、目的とか評価とか、そこを徹底して上手くやろう。評価は評対ではなく、いわゆるもっと動的な評価を導入しているということです。で、学生主体型授業を徹底しようということで蛙学が始まりました。

これが蛙学のシラバス。ネット上にも出ているので、何の変哲もない、ただのカエルの総合学習のように見えるんですけど、ちょっと色をつけてみましょう。オレンジで書いたところが学生が中心になっている、参加という言葉が適切かどうかわかりませんが、学生が絡んでくる。赤で書いたところは学生が主体になるシーンです。私の授業の最大の特徴は、これは今年の授業なんですけれども、7月8日から始まる学生授業です。最初は、私のカエルのいろいろ形態学とか進化とか、あるいは種、生態の話をしてるんですね。段々学生を授業の主旨に据えながら、いつの間にか学生が主役になるようにすりかわっていきわけです。ここに関しては、この授業と以外のところで、学生が約2カ月半、グループをつくって、テーマを自分たちで設定して、自動運転で授業づくりをしてくるわけです。60分間の授業をつくらなければならない。そこにいろんなハードルがあるんですけども、そのハードルに従って、学生は一生懸命、調査・研究をやり、私とミーティングをし、あるいはボランティアで集まってくるOBとミーティングをしながら授業をつくる。60分の授業をつくった後、20分のインタラクティブにやりとりをし、集まってきたいろんな方々の評価をもらうというような授業をやる。

私の授業の一番ポイントはここにありまして、要するに主役が見事に逆転する。最後は私が生徒になってるという状況をつくり出すわけです。とっても実は授業が足りません、1つのコマで半期できちゃうくらいですから。特別研修で全員のメールを私持ってますので、今日、どここの沼でカエルの声が聞こえてるぞ、集合と、夜中の2時に集まっていったり、そんなことをしたりしています。

とにかく学生を主役にする、これは学生にも縛りがあって、決められてやる授業は、ほかの学生の意欲を引き出さなきゃいけないんだと。つまない授業というのは一体何だと、こういうリズムよく短時間にKJ法を使って、この問題点を出してすぐ発表させる、これはどこの大学でもやられてることだと思いますけど、私も同じようにやっています。

これは授業づくりのデータをとろうとしているところで、これ夕方なんですけども、地区の小学校の保護者と子供たちを集めて、北大の農場でカエルの捕獲をさせて、そこで彼らとデータをとろうとしているシーンです。私のスタンスはあくまでも助手でして、場の設定あるいは渉外の仕事はしますけども、あとはすべて彼らに任せます。危なくなったら出る、危なくなったらときに手を差し伸べる、その間合いが非常に難しいんですけど、それを上手くできてるのは、絶えずいろんなルートでモニタリングをしてるからです。私は学生との間で交換ノートみたいなものやっていますし、メールのやりとりとか、昼間のミーティングとか、それできちんと学生を見ているつもりだと思います。

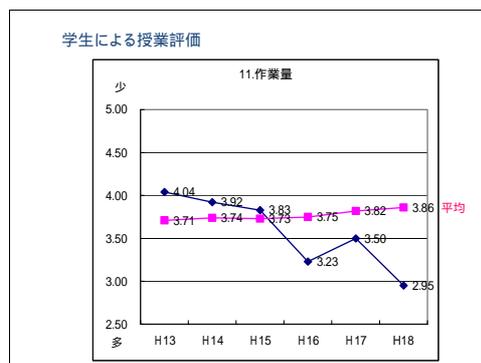
変な帽子をかぶっていますけど、これは小学校で両生類を飼育させて、どの程度の教育効果があるのかというのを調べる、それをテーマにしたグループです。小学校の協力を得て、放課後、実際カエルの形態学の勉強、それから飼育をさせる、そしてデータをとる、そのときの彼らが行ったときのシーンですね。



これは、カエルは食文化でも非常に魅力的なものです。フランス料理、それから中華料理もそうですね。そこで見事な成分分析表をつくりながら、プレゼンテーションを彼らは準備してきたんですけど、やっぱり本物の体験がないんですね。私の知り合い、札幌のホテルのレストランにシェフがいました。そこに私は手紙を書いているんです。そのグループの一部を修行に出しました。どうやってカエル料理やるのか、やはり体験させなきゃいけないと。2日間、フライパンで殴られながら修行してきたんですけど、この表情を見ておわかりのとおり、非常に生き生きとした顔で帰ってきました。見事なプレゼンで勝負してきました。

授業はこういう感じで、一切、手原稿なしですね。ツボカビのところなんですけど、必ずインタラクティブにやるということです。実験・実習を中に入れると、要するに、授業を受ける学生を動かすということが一つのキーワードになっています。これは自分たちがつくったモデルです。ツボカビがどうなってるということを、今、画面上で示した後、実際に自分たちでモデルをつくって、こういうやりとりして、これから擬似的なデータをとる。それをパワポで、エクセルでつくって、どこに問題があるかを引詰めていくような授業を彼はしています。

それは一体何がねらいなのかというと、要するに学生が授業をすると、要するに2カ月半、教材を研究してくるには、当然自分たちの課題の把握、それから学習状況の把握、目標がきちんと設定できなければいけません。つまりメタ認知、ここが強化できるんですね。そして課題に対するプランニングとか、情報処理も非常に重要になってきますし、学生が私を教えるわけですから、当然教える役割。私は単に、おまえを期待しているという声もかけますし、これ自己効力を構成する概念なんですけど、教師としての位置は明らかにしていますので、彼らは私に頼らずにやろうとする。でも時には頼ってくる。そのときは手を差し伸べる。そういう構えをしながら、意欲のベースになる自己効力の一部を評価しようとしているわけです。



じゃあ、おまえの授業は本当に意欲が高まるのか、それはよくわ

からないです。しかし、授業評価に一つの形が出ています。おまえの授業 とにかくしゃべりがむちゃくちゃ多い。ひどいもんですね、平均点よりずっと下です。これ、平成19年、20年も同じような感じですよ。むずい、難易度が一気に下がってきます。平均より、うんと下がっています。ところが意欲はある。普通、こういう低いと、大体嫌だよというのが普通なんですけど、意欲は促進されるわけです。知的でも刺激される。大学の授業ですから当然です。学問ですから、当然、知的に刺激されなければならないわけです。

これも高校生の実験雑誌に載ったやつなんですけども、学生が授業をする！「遊べない、バイトできない、寝られない」と。こういう授業を実は北大でやっていました。いましたと過去形にあえてします。

実は4年前に大きくシフトチェンジをしました。大きく変化した学生たちの学び、これは皆さんもおそらく経験されてると思うんですけど、学生の質がやはり大きく変わってくる。10年前やっていたことは、やはり通用しなくなってくる。授業を4グループやっていたけども、良いのは1グループぐらいになってきた、数も減ってきた。粘り強さもない、どうしよう。いろんな要因が考えられるんですけど、これを全部埋めるわけにいかず、一つ私は大きな決断をここでしました、本物との接触をさらに徹底させよう。

実は、両生類というのは基本的に日本語の文献というのは少ないんですね。原書を翻訳させよう。いろんな調査、授業するときに、必ず本物の聞き取り調査をやりなさい。例えばツボカビをやるんだったら、ツボカビを解く研究者の第一人者に必ずメールをしなさい、手紙を書きなさい。こういうことを徹底させました。

それから系統解剖実習、これを徹底するようにしました。生半可な解剖じゃないと、神経の1本1本まで見てくるような解剖を、この中に導入しました。

それから、異なる領域とのコラボレーション。例えば、両生類と教育を切る、そういうことも彼らに求めるようにしました。単位とればいいという、だから、私の授業は単位とった後のフォローをしています。要するに授業だけで育てるんじゃなく、その後も、しつこくつきまわって面倒見ちゃうと、そういうことをしています。

先日、私の家に学生たちが押しかけてきて、院生たちが押しかけて、そんなところから、いろんなアイデアを彼らからもらっています。

自己効力をさらに意図的に育成すると、簡単にはいきませんが、さらにモニタリングを、しっかり子供を見る。それと言語的支援ですね、やっぱり褒めてやる。どうしても我々は欠点に目が行きがちですけど、で、主役にしてやる、そんなことを心がけています。

これはドライ・ラボといって、私が高校教員のときに特許を取ったものです。こんな感じで、これ授業風景ですけども、時間が6時間ぐらいかけてます。開始が16時25分。そして授業終了が23時です。欠席はゼロです。これに関しては多くの方が授業をご覧見えますので、もしも皆様、関心がある方がいらっしゃったら是非お出かけください。私の指示はほとんどないです、ほとんど自動運転。つまり、事前・事後指導で私が何をやってるかがここでわかります。要するに、彼をあくまでも主役に引きずり出すわけですね。解剖という一つの手段を使って正確性とこだわりを養成しようというのが、私は大きなねらいなんです。それが今の、現代の教育に一番必要だろうというふうに思っているからです。



さらに、私の授業は徹底していきまして、授業で非常に面白い、これはいけるというのが時に出てくるんです。そしたらもう学会に近い研究会に東京まで連れていって発表させる。これがそうですね。どんどん本物の場に引きずり出す。あるいは、北海道にカエルや喫茶という夢のような喫茶店があるんです。そこで、喫茶店を借りてそこでサイエンス・コミュニケーション、授業を一般市民に開放していく。そういうとこで、彼らの自己効力、達成感をより確かなものにしようというふうに考えているわけです。

私の授業は全て自由に公開していますので、こういうホームページの、私のホームページが書いてありますが、ここにメールアドレスも載っていますので、ご連絡いただければ、いつでもお出かけください。これは北大のホームページからも、このホームページには行くようになっています。

取組発表(3)

「学生同士で気付き合う-キャリアデザインの仕掛け-」

静岡大学 佐藤 龍子 教授



佐藤 皆さん、こんにちは。いよいよ眠くなる時間ですので大きな声、もともと地声が大きいんですけども、いつもよりは小さ目の声ですけども、静岡大学の佐藤龍子でございます。よろしくお願いいいたします。私は、今、格調高い鈴木先生と、これからお話の超抜群に上手い橋本先生の間には挟まっていますので、元気さだけが取り柄ですので、中身がない分は元気さだけでカバーしていきたいというふうに思います。

今日私がお話しするのは、キャリアデザインという授業なんですけれども、大学設置基準が改正されまして、法改正が既に終わりました。来年からいよいよ本格的に、もう既に私立大学の方々は、もう十分おやりになっていらっしゃると思いますけれども、国立はどうしても余り早くございません。2005年から私が全学で担当しております、ここでのお話をしたいと思います。私はできるだけ汎用性のあ

る、来年からでもすぐ皆さん真似できるというのはおかしいんですけども、盗んでいただいて、ああ、これはできそうだなというようなお話になるかと思しますので、ぜひ気軽に聞いていただければと思います。

最初の頃はちょっと飛ばして、初年次教育のお話を少ししたいと思います。これは既に御存じの部分が多いと思いますので、ちょっと駆け足でお話をしたいと思います。大学初年次に学生が経験するあらゆる教育学習経験の総称の概念ということで、皆さんのお手元にちょっとないパワーポイントもいくつかあります。一応、私自信は授業ではパワーポイントはほとんど使いません。15回のうち1回使うかどうかです。1回もとても短いです。ビデオも超短いんです。ビデオもすごく短いんですけども、パワーポイントは基本的には使わないんですけども、きょうは目線を上げていただくという意味もありまして、目線を上げていただくのとメモをしていただくという、こういうので、少し、ないパワーポイントも入れております。大体半分ぐらいあります。

これはアメリカで80年代からで、日本は90年代後半から、移行、トランジションが非常に困難になってきたということもありまして、日本では非常に90年代から言われ始めているということです。領域としては、そこに今、皆さんのお手元にありますように、山田礼子先生がまとめてくださったものを引用させていただいていますけれども、スチューデント・スキルとかスタディ・スキルとか、オリエンテーションやガイダンス、それから専門への導入、導入教育と初年次教育は明確に分けている、最近分け始めていますけれども、専門教育への導入、それ以外の総称した部分を初年次といっている場合が多くなってきていますけれども、それから、自校教育、キャリアデザインということで、これから私のお話する部分は、この大体赤の部分を中心にしています。

● 初年次教育の内容(アメリカ)

- 1 学習スキル
- 2 時間管理
- 3 自己探求・自己評価・自己概念
- 4 大学生活への移行
5. キャリアガイダンス

名古屋大学 近田政博氏

近田先生がまとめた、名古屋大学のアメリカの例でいいますと、学習スキル、時間管理、自己探求・自己評価・自己概念、大学生活への移行、キャリアガイダンス、アメリカではこの五つぐらいが大きくて、キャリアガイダンスも非常に大きいということになっています。これからの日本の初年次教育としては、やはりユニバーサルアクセスみたいですから、大学生活への適応という部分は非常に大きい。もちろん大変大きな移行ですから、つまずきや、それから迷いや、それから大変大きな壁もあるんですけども、その中でもやはり適応していかないと。

それから生活全般、私が話す学生の何人か、やはり夜遅くなってゲームをしていたり、メールをずっとやっている、ツイッターをずっとやっている、ずっとツイッターが音を流れてる。若い先生の研究室へ行くと、時々、何の音と言うと、ずっとツイッター鳴っているんで

すね。若い先生、20代の先生たちがどんどん今いるわけですが、同じような現象が学生たちにもありますので、ずっとツイッターやっている。ブログとかではありません、今、ツイッターですけれども、それで遅くなる、ゲームをやって遅くなるということという、朝、起きられない。夜の居酒屋のバイトをしている。こういうのでいうと、朝、起きられなくて授業に来れないというのがありますので、生活全般への配慮もこれからは必要。

それから、先ほど、小田先生が市民生活や市民という話をしましたけれども、公共心とか市民生活、こういう視点で大学でもそういうことも気をつけなければいけなくなってきたのかなというふうに思います。ただし、これらをする場合に、新しい経験の提案、これはまさにマーチン・トロウが言っていた言葉なんです、新しい経験の提案を通して、こういうことを授業の中で取り組まなければいけない時代なのではないかということです。

そして、私どもの概要ですけれども、山形大学とは医学部がないだけで、ほとんど似ています、学生規模はですね、教員は、専任教員は700名ぐらいです。職員は三百数十名ということです。

私の授業は今までの授業と全く違うんですけども、最大300人です。300人で結構なコマを私はやります。昨年、300人やって、学生からもブーイングが出て、これTAなしです、貧乏ですから。私1人で300人の授業で、学生参加型というのをやるんですけども、それで、ついに今年は若い教員を採用しましたので、彼に半分分けてもらって、今、130と120ぐらいでやっています。

彼は、若い先生は、非常にIT機器がお得意ですので、クリッカーを使った、私とは全く違う授業を展開しています。それでいいと思います。なぜかという、ツイッターを使ったことによって、私が、全学生にそういう意味でいったら効果的な授業というのはないと思うんです、私自身はないと思います。ですから、もしかしたらツイッターなどによって非常に効果がある、あるいは非常にいい学生もいはいかもしれない。私のようにどっちかというオールドフックスなスタイルの授業で、あるいは学生を参加させるのがいいかもしれないというのでいうと、今、効果測定をはかるというのもある、同じような授業を全く違うやり方でやっています。これは1年生の対象で、最大300、普通120人ぐらいで授業をやっているということです。

● 授業内容

初年次教育がベース
スチューデントスキル+大学生活への移行
+キャリアガイダンス

- ・生徒から学生になるとは？
- ・自立的な生活、自学自習、学びの基礎
- ・大学で学ぶこと、成長すること
- ・働くとは、職業とは
- ・産業と社会
- ・自分を振り返ってみる
- ・コミュニケーションの重要性、技法 etc

ここに書いたように、私自身はこの授業をつくる時に、必ず初年次教育をベースにしたいということを、うちの副学長に言いました。このあたりのことはナカニシヤの本に詳しく書いてございます。私のキャリアの話から含めてここに書いてあるんですけど、いわゆる就活を目前とした、あるいは就職概論やインターンシップに行くためのキャリアではなくて、初年次教育をきちんとベースにしたいという

お話をしました。

同じような科目で、私どもでは新入生セミナーというのがあるんですけど、これは学部によって15回やる学部もあれば、8回、7回から8回で終わり。その中には、地震防災であるとか、セクハラであるとか、図書館の使い方であるとか、もう定番メニューが幾つかありまして、実際にこれらのことをやるのが難しくなっているという背景もありましたので、私はダブらないというふうに思いましたので、こういってやり始めました。やって丸5年ということですよ。

「学生同士の気付きとそれを促す仕掛け」というお話をしたいと思います。これはもう授業の仕組みといいますが、中身というよりは、もう皆さんはすぐにでも使えるし、もう既にやっているという方もいっぱいいらっしゃると思いますが、少しまとめたものです。

発問を多く取り入れる。きょうは学生主体型授業なのに、いつもの私の講演だと、他大学だと、これみんな当てるんですけど、今日はそういうスタイルじゃなさそうなので、いつもあらゆる先生が理事長とかに、学長がいるとこでもどどん当てるって嫌がられるんですけど、眠くなりませんかとか言いながら当てるんですけど、今日はちょっとやりません。いつもは当てるんですね。

発問も入れます。これは幾つか手法があります。全員参加型をさせるタイプ、例えば4択、3択、それがイエス・ノー、それから、いわゆるオープン・クエスチョン、クローズ・クエスチョンをきちんと分けて、これは幾つかの段階を経てやります。ですから、前半部分ですと、後から話します「広場」というミニッツペーパーも、最初は文章を余り書けませんので少なめにします。そして、真ん中ぐらいから少し多くします。そして最後になると、どどん書けるように長くする。これ幾つかのいろんな細かい仕掛けも踏まえまして、こういってやっています。

それから、ピア・レビュー、これは、やる時もやらないときもあるんですけど、やると、こっちが面倒臭いんですけど、授業のレポート300人分、赤ペンもします。赤ペンするんです。300人返すんですけど、その前に学生たちにペアで作文のピア・レビューをさせるんですね。この手法は、実はうちの新任教員研修のときに、新任の先生に教えてもらいました。作文のピア・レビューをどうやってやるのかというようなことも、そこで学びながら、新任の先生の研修をやりながら私が教えていただいて、それを、じゃあ翌年やってみようみたいなので3年前からやり始めたりしています。チームワーク。

● 授業実践・授業の工夫

発問を多く取り入れる。
 学生相互のピア・レビュー
 チームワーク
 先輩学生や卒業生の活用
 アイデアの出し方等の訓練
 コミュニケーション技法
 プレゼン
 毎回の感想文と「広場」の作成
 事前事後学習のすすめ(参考図書)
 詳細は「学生参加型授業の実践」(ナカニシヤ)をご覧ください。

それから、先輩学生や卒業生の活用ということで、この授業や私が持っている大学を考えるという高等教育の授業の先輩たちを活用する。それから、アイデアの出し方とかコミュニケーション技法とかプレゼンとか、それから毎回の感想文、ミニッツペーパーですね。

ミニッツじゃなくて結構最後は大きくなるんですけど、それを一時、電子掲示板でやってたんですが、そうすると、だれかを見て書くというタイプがいい場合と、一斉にやはりメモを見て、この3分から5分の間でどんなことを考えたかがわかったほうがいい。幾つかやってみたんですけど、今は旧来のスタイルで、300人を、後半の7分ぐらいで感想文を書いてもらって、それを私が手書きで打ち込んで、300人のうちの30人ぐらいを選んで、なぜこれを選んだかというのを後から謎解きもしたり、しなかつたりしながら、原始的に私がワードで打って今やっています。これは幾つかいるんな手法をやってみたんですけど、ここに今は落ちついているということです。

事前事後は参考図書の勧めをいろいろしていますので、15回の授業で50冊ぐらいは、学生たちは私の中での図書を、読む子は読む、読まない子は読まないということに今のところはなっております。この辺はナカニシヤの本に詳しく書いてあります。

先ほど、真ん中ぐらいいに書きました「広場」という話なんですけど、同じ授業を受けているのにとらえ方がこんなにも違う、表現がこんなにも違うということで、学生たちが最初には、まずみんなここで驚きます。15回のうち、300人いると一度も選ばれない学生、15回のうち10回選ばれている学生、これは明確に出てきます。ですから、そうすると気づき始めるわけですね。多分この人同じだな、人文学部の言語の人って、この人、毎回同じ人だぞって、いそだとか、あるいは私は全く載っていない、なぜなのかということも学生たちが気づいたり、あるいは表現方法や、ええ、こんなこと気づいてるの、こんなことを要約上手くしているの、ええ、なんで同じ1年生で、ええ、僕、理学部なのに、いろんな、学生たちは気づく。そして、なぜとかどうしてという問いをきちんと立てて、自分の中でリフレクションやリフレーミングやメタ化をきちんとできているような学生たちをよく載せるので、そのことで学生たちは気づいていくということです。

そして、「広場」で変化する学生ということで、これはお手元にありますので、ちょっと読みます。言葉は大切だ。影響力がある。キャリアデザインの「広場」を読んでいてすごく感じる。先生がおっしゃったことから、ここまで意味を酌み取れるものか。そのために必要なのが聞く力であろう。それがなければ幾ら言葉を発しても伝わらない。自分にはわからない、どのようにすれば身につくのか。今もわからない。しかし、だからといって諦めるのではなく、意識して聞いてみることにする。自分を変えたいから。また、自分の言葉によってだれかに影響を与えたいから。毎回の「広場」を読んで、自分は少しずつ変わってきた。もっともっと変わっていきいたい。という農学部の生物専攻の学生ですね。

● 学生同士の気付き 2-ペアワーク・ピアレビュー

こんな考えがあるの？！
 学問分野(専門)が違っていると、発想が違おう？？

- ・古生物学を勉強したい学生と、法科大学院志望を学生が出会う。
- ・教師志望で教育学部に入った学生と教師志望だが人文学部に入った学生が出会う。
- ・やりたいことがなくて入学した学生と友だちをつくりたい学生が出会う。

それから、ペアワークでピア・レビューですね。学問分野が違くと発想がこんなに違うんだろうかということ、この中で学生たちは気づくわけです。理学部の古生物学を勉強したい学生と、法科大学院志望の1年生の学生たちが会おう。あるいは教師志望で教育学部に入った学生と、教師志望だけけど、だからこそ人文学部の法学科にきました。人文学部の経済にきましたという学生たちが会おうわけです。そうすると、その中で、「ええ、教師志望で何で教育学部違うん。何で」って、みんなが話し始める。「古生物学なんか勉強して何になんの。何のためになるの、世の中に」ということを言うと、「私は弁護士になってこんなことをしたいのよ、だから何」みたいなことを話し合うわけですね。ですから、そういう意味でいうと、すごくやりたいことが明確な学生と、やりたいことはない、だけど勉強したいものはあるという学生と、勉強したいこともない、何だかわけかわかんない、とりあえず大学に来たのという学生たちが、いろんなことで出会っていき、その仕組みをいろいろ手をかえ品をかえ、もちろん杉原さんが言ったように、様々な失敗も重ねながら、こういうことを行っているということです。

ピアで変化する学生ということで、これは作文なんですけれども、作文をピア・レビューしたとき、ものすごく嫌がられました。もうこんな授業絶対嫌だとか、来週は欠席しますとか、来週は絶対出ませんというのもある、こんなことをする佐藤龍子は許せないとかいうのも、前の日の感想文に書かれたんですが、でも、来たら違ってたんですね。

私と違うとはどここと思いながら、他学部の子の作文を読ませてもらいました。内容が違うのはもちろん、文の構成や言葉遣いが全く私の作文とは異なっていました。表向きでは点数をつけて、だれがいいと優劣をついてしまうけれど、本当に優劣がつくのは、この体験を通じてどれだけ人のよいところを吸収でき、これからに生かせるのか。つまり、今までの授業内容を何度も頭に刻み込んでいるかなんだろうかと、私にも段々強く響いてきました。いつも下を向いて話を聞いていたので、今日は顔を上げて先生の目を見ていたら、顔は笑っていても目はかなり真剣な先生に対して、また印象が変わりました。私も頑張ります。農学部の森林の学生。

ピア・レビューで私のレポートを採点してくれた女の子の意見がすばらしく、とても感動したのですが、それよりも何よりも、今日一番感動したのは先生のタイミングについてでした。それは、私たちが相手のレポートに点数をつけようというそのときに、先生が「添削する人の実力も問われるわけですよ」と言ったところです。私は思わず心の中で上手いと叫んでしまいました。先生のあの発言で、みんなの添削に対する邪念が吹き飛んだように思います。何だか勉強になりました。教育の芸術専攻の学生です。

他の人のレポートを読むことで、自分の文章までも客観的に見ることができるようになってきたと感じた。各人が独自の大学観を持っていて、それを発表し合うというのは、非常に知性を刺激されるよい経験だった。この授業自体が大学の性質を凝縮したものに感じた。ということで、今回は持ってこなかったんですが、めっちゃめっちゃ嫌だったけど、やったら快感になったとかいうのもあります。

これもそれに近いですが、正直なところ、2週間前から、このピア・レビューなるものを恐れていた。私は作文に非常に苦手意識を持っていて、自分の言いたいことを半分も伝えることができない

いい作文を、ましてや他人に見てもらうために書くなると絶望していた。だが、今日、実際にやってみたらどうだろう。今までにありえないくらい面白かったのである。この2週間、悩んで悩んで書いた真剣な作文に、真剣な意見が返ってくるのが、また、相手も悩んで書ききたためたであろう作文を読めることが面白くて仕方がないのだ。今この瞬間、私は伝えたいことの3分の1も伝えられない。もっと言いたいことを的確な言葉で面白い表現で言ってみよう。いつかこの思いを遂げるためにも作文を書き続けよう。みたいなことが書かれています。

チームワークについてですけれども、これも何段階かに分けまます。最初からすぐチームをといっても割とうちの大学はできる子が多いんですけど、といっても何段階かに分けまます。専門分野は違くと発想が違うということ、発言しなないとまずいなという、こういう雰囲気になるような幾つか仕掛けをします。お客さんは嫌われる、フリーライダーにさせないブレンストミングの手法なども教えます。それから、発言しやすい雰囲気づくりのために、コミュニケーション力や聞く力の大切さというのを事前に必ず話をします。それから、役割やリーダーシップというのはどのようにつくったらいいのか、場のつくりかたです、協働の作業の仕方、お客さんをつくらない仕組みというのを事前に用意をします。

これは同じような話ですけれども、たった14回しか受けていませんが、講義の内容は他に比べものにならないほど濃くて充実したものでした。普段なら知り合うこともない人たちと話し合ったり、他人の意見を聞くことで、様々な発見や驚きをした。自分の世界が広がった。というようなことがあります。意志ある選択をしていこうというような話です。

同じような話ですね。他学部の人と出会えることが、この授業では、割と学生たちが非常に多い。意外と自分の学部、学科だけで閉じている学生が、総合大学でも非常に多いです。ですから、私の一つのミスは、やっぱり他学部他学科の人と、違う専門分野の人とこの授業を通して知り合うというのが一つの仕掛けです。

最後のほうになりますが、お互いに学び合う学生ということで、キャリアデザインの裏メニューということでしょう、これはもう学生同士の気づきとか相互作用です。これは意欲もあるんですけど、へこみもあります。へこむ学生もいっぱいいます。15回で一度も私は「広場」に載らなかつたし、お客さんが多かったのでむっちゃへこみました。このへこみを立ち直るには、私はこんなことをしますとか、このへこみを何とかしたいという学生もいます。ですから、意欲だけ喚起してるかというと、実は私自身はへこみもつくっているんだなというふうに思います。ただ、へこみをどうフォローするのかが、ある意味教員に課せられた課題でもあるし、へこんだままにしない、あるいはへこんだのをどうしたらいいのかということが、私の今、大きな課題です。

ですから、へこむこともこれは意欲を喚起するだけではないんですね。へこましてしまっているかもしれない、学生同士の中でというふうに、これはもう私も感じているとこなんです。刺激あり過ぎたかなというときもあります。ですから、強過ぎるといけないのかなと思うこともあります。

まとめです。教師の役割とすると、どちらかというと一方的に教えるのではないですよと、今、言われていますが、といっても、やはり

教えなければいけないことも、ですから、お膳立てはかなりやっぱりしないといけないんですね。そのときに、もちろん杉原さんがおっしゃったように、すごく戸惑いもあるし、迷いもあるし、へこませ過ぎて毒は効きすぎたなと、薬と毒は水でも死ぬっていいですよ。医学部とか薬学部に行くと、水で死ぬ例というのがあって、水を飲みすぎて死んだ人っていっぱいいるんですけども、そういう意味でいうと、水でも毒にも薬にもなるわけですから、これは難しいとこなんです、やはり戦略や戦術を練ったり考える時間、そして、先ほど言った、それを実行したりチェックバックしたりフィードバックするという、今はやりの言葉だとPDCAというふうになってしまうんですけども、これは1個ずつの授業や、それから様々な中で実行する。先ほど鈴木先生が途中から変えたというのがあったんですけども、私も途中から変えたものがあります。毒が効きすぎてしまったりとか、反応がなさ過ぎてしまったりというのがあって、PDCAを回しながら、これはだめだとか、やり過ぎたとか、もういっぱいあります。ですから、毎回、チェックバックや振り返りやフィードバックは重要なことというふうに思います。

ただし、一方的に注入型というのを全部するという事は、中々自身はしないようにしています。私は、役割としては触媒にできればいい、あるいはストラジストとかコーディネーターとかにできればいい。その中で学生たちが自分で学んで、自分で獲得した、自分で何かを選び取ったという形をできるだけしたい。そして、それも学生たち同士が触媒になり合って、違うものに触れて、なりたいたいというふうに、これは私自身の思いです。全然、強制もしていませんし、教育学的に正しいのかわかりません。これだけで授業が成り立つわけはいいかわかりませんが、私自身はできるだけこういう役割に徹していければいいなと、大学の授業はそうでありたいなという思いで書いたという言葉です。

ですから、学生たちには、実は私が答えなくてもこの300人のクラスの中の、もう答えている人いますよねということが何度もあります。ですから、答えはみんな私じゃなくて、あなたたちの中に答えを持っている人がもう既にいますよということを学生たちに言うことがあります。ですから、学生たちが気づき合って、学生たちの中でできるだけ答えが発見できるような触媒になりたいなと思って授業しているという実践のお話でした。ありがとうございました。

取組発表(4)

「学生の潜在的主体性の引き出し方-自然体の学びの実現-」
岡山大学 橋本 勝 教授



橋本 失礼いたします。岡山大学の橋本でございます。

佐藤先生が、超お話が上手いとおっしゃると、私は何を話したらいいのかが戸惑うばかりですが、先ほどの小田先生が四つの事例報告が15分程度でいくと、足ががくがくの杉原先生が20分おっしゃってくれた。心臓ばくばくの鈴木先生は22分おっしゃってたんです。元気いっぱい佐藤先生は24分しゃべられていました。私は何とか20分で抑えたいと、そうすると最初のスケジュールに戻るなどという、そういう感じでございます。

今、時間のことを気にしておりますが、時間もありませんので、本当は私はこう言うと、前置きは置かないんです。先ほどののは既に前置きではないかというんですが、今日は前置きを省略します。レジュメを御参照ください。かわりに余談から入ります。前置きと余談はどう違うのかという、そういうところはちょっとひっかかるかもしれませんが、雑談ではないと、実際の話です。

先週、こんなことがございました。関西地区の某大学で、内容的にはアクティブ・ラーニング、こういうお話です。会が進んで、フロアからこういう質問が出ました。今、3人の事例報告の中にも多少これが見え隠れしていますが、学生の中にはやる気のない者もいますと、その人たちの学習意欲を高めるには、一体どうい授業方法が効果的でしょうかと、こういう質問がフロアから出ました。専門家たちはこういうふうに回答しました。

まず、これは鈴木先生のなめまわしという話に近いんですが、その学生をきめ細かに観察して良いところを褒めることで。どうしても最近の学生というのは、自分のことを少し低く見ますから、そういうネガティブな自己診断をしているから教員が勇気づける、そういうことによって、うまくやる気は少し出てくる。これはこれで一つの正解だろうと思います。

もう一方は、少し時間を置いて、これはかなり時間を置いたんですが、それは無理ですということなんです。学習意欲というのは他の原因でいろいろ低下してるんだから、授業だけで引き上げるのは難しだろうと、これも正論なんです。それは、恋愛で失恋したばかりというのと、それを授業でどうやって引き上げるのか、中々難しいです。ですから、それを求めるほうが難しいです。

司会者は、念のためという、この言葉が大事なんですが、念のため橋本先生にも振ってみましょと。私は即答しました。先ほどの専門家は私の発言の内容に理解不能と、こういうコメントを後でされるんですが、ただシンポジウムの後で、質問者は大いに納得したと、つまり橋本の答えに一番納得した。さあ、私は一体何と答えたのかな。

私の答は...

「難しくありません。
やる気のある学生とやる気のない学生をただ混ぜればいいのです。」

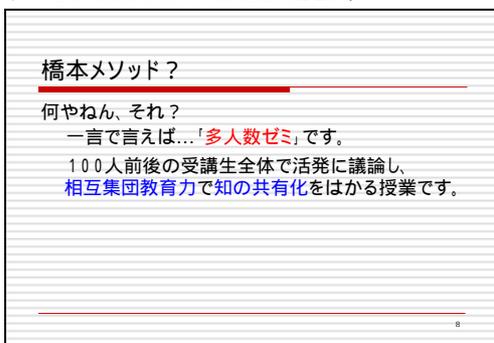
次のような補足説明もしました。
「学習意欲の低い学生が一番刺激を受けるのは、自分と同じ程度の意欲だと思っていた学生が妙に頑張る姿です。アイツがやるんなら俺も、という心理にさえなれば学習意欲は自然にアップします。」

さあ、私の答えは、そんなに難しくありませんと、即答でこういうふうに言って、やる気のある学生とない学生を、ただ混ぜればいいん

です。混ぜるとどうなるか、ちょっと補足説明をしました。学習意欲の低い学生が一番感化されやすいのは、やる気が同じようがない学生。これがちょっとした変化を見せる、この瞬間なんですね。意欲の高い学生から、ちょっとだけ影響を受ける学生が必ずいますから。意欲のない学生というのは、その学生の変化に一番敏感なんです。全員が、例えば80人のうち50人が意欲がないと、こういう状況の中でも、その50人の中に1人、2人、必ず何かやり始める学生がいます。そうすると、残りの49人がちょっと影響を受けるんです。

さあ、それで、何故私はそういうふうな即答したのかというのが、今日の私のメインなんです。それが私がやってる授業の形態で、いわばデータはないんですけど、私はデータに余り頼らないたちなので、ただ実感として、橋本メソッドという授業を10年前からやり始めました。最初から橋本メソッドと呼んでいたわけではないですが、今、橋本メソッドという言葉で定着してます。それが、つまりやる気のある人間とやる気のない人間を混ぜるといって授業をやっているということです。

このあたりまでは、今日お配りしたレジュメのほうには殆ど書いてありません。ただ、ここからの話はレジュメのほうにはかなり詳しいですが、一応このままスライドをご覧ください。



御存じの方もあるかと思うんですが、橋本メソッドというのは、簡単に言うと多人数でやるゼミであると、100人を少々超えるぐらいがちょうどいいぐらいの人数です。先ほどの佐藤先生の300人となるとちょっと厄介なので、そのためにはもうちょっと一工夫、自分でやらなきゃいかんかなと思ってるんですが、とりあえず100人から150人ぐらいだと非常にゼミのような雰囲気です。相互集団教育力というこの言葉は、随分前に私が使い始めたんですが、今日の事例報告の中でも、他の先生の中にも、よくこれに近い話がでてきます。つまり、学生が互いに刺激を受け合って、教員が教育するというより互いに教育し合う、こういうことが100人規模でも十分できる。先ほどの佐藤先生だと、その300人でもある程度できると、こういう話です。

それで、雰囲気というのはどういうものか、非常に簡単にいうとこういうものです。小学校、しかも低学年、その授業と、いわゆる学会でのシンポジウム、これを足して2で割ったようなものだ。わかったようなわからないような説明なんです。小学校低学年の授業とはどういうことか、みんな競って手を挙げるんですね。わかんない子までもみんな手を挙げてるもんだから、「はいはい」と手を挙げて、先生が当てると「はい、わかりません」とかこう言うわけ。ただ何にせよ、大学の授業で学生が競って手を挙げるという雰囲気は中々ないと思います。その一方、学会のシンポジウムの要素というのは、実際に発言する者の多くは非常に的確な表現。只今の発言に対してこういうふうな思いますがというふうな非常に的確な表現を使って、

レベル的にもかなり高いことを言います。そのときに学ぼうとしている内容に、かなり本質的に踏み込んでいると。多少オーバーではないかというよりは、むしろそんな馬鹿なという話になるんですが、実際、橋本メソッドではそれが実現できていると。

というわけで、こういうタイミングではその映像を見せるというのはいいんですけど、それをやり過ぎると、後で紹介しますが、橋本だからできるというふうな話にどうしてもなってしまうので、気になれば、先ほどの話ではないですが、授業をある程度自信のある人というのは、ほとんどの回を公開するというのが他の大学でもあります。山形大学でもありますし、私もそのスタンスです。実際ご覧に来てください。

重要なのは、むしろその私の授業を見て感じるとか、そういうことじゃなくて、私がこれから紹介する橋本メソッドのポイントをちょっとずつ頭に入れながら、そういうことなら自分の授業でもちょっと、既に入れてるとか、あるいはそれくらいなら入れられるとか、そういうことで自分の授業をイメージしてお話を聞いていただければと思います。

その点、ポイント、ポイントを押さえていきますが、90分の授業のうち大体50分は質疑応答に充てます。基本的に教員が教えるんじゃないんで、やはり先ほどの話じゃないんですけど、互いに学び合うというスタンス、これでいきます。時間の確保というのは結構重要ですね。確保したはいいいんだけども質問は出るのかという話なんです。それは出るように仕掛ければいだけの話です。実際、私の授業では、大抵50分では不足ぎみです。ずっと手を挙げ続けてたのに当たんなかったという不満のような声が時々聞こえてきます。

このとき、実は、先ほどまでの話で一つだけ欠けてる点があって、私が重視するのはこういうことなんです。やる気のない学生が刺激を受けるといったときに、まずは、一番自分に近い人のそこから影響を受けるということもあるんですが、それよりもっと手前のところで、何かやり合っていると、これ自体も実は意味のある話です。教員が非常にわかりやすく砕けた説明をする。理解しやすい、わかりやすい説明をする。それでわかった学生がいて、わからない学生がいる。この状況とは違って、私の説明よりは、むしろ学生がよく説明をしますけど、それに対して質問をしたり、あるいは回答したり、そのやりとりを見ている。その場において、その同じ空間にいて見ているという、この刺激が非常に重要なんです。教員と学生だと、その質疑の応答の時間というか、そのやりとりが中々ないんですが、そのやりとりを通じると、尋ねる、答えるという、この作業が入ることによって理解がしやすくなる。あるいは教育学の研究、私はその専門家じゃないですが、知識定着度はそのやり方のほうが高いというふうな言われています。

それから、実際には、もうちょっと後で詳しくいるんなことを言っていきますが、私の授業の中には相当な競争原理が働きます。例えば、手を挙げて当たるかどうかすら競争です。そういう中で、異常な盛り上がりが出てくるんですが、その中で自然とレベルアップがなされます。

2番目の特徴に移りますと、全部が成績に直結します。これは、こういう主体的な学びの中では、ある意味ではそこを全く無視してということも考えられるんですが、成績評価のところは全てが直結、全てが教材ということは、つまり、学生の発言一つが他の学生にとって

も教材なんです。いい発言はモデルになるし、悪い発言というのは、これは反面教師になります。

出席自体は成績に結びつきますけど、発表とか質問とか、後で少し触れますが感想書き、先ほどの「広場」という話に近いんですけど、そういうところで一つ一つが、すべて1回1点とか、1個1点とかいって、そういう細々とした点数で、これ、もう最初に宣言してしまいます。出席しても出席点が2点だったり3点だったりします。この辺にちょっとしたゲーム性なんかを持たせてるんですが、しかも重要なのは、私はフリーライダーにも点を与えます。もう全然やる気のない学生も、あえて点はチーム点として与える。もっとも大半という書き方は多少不正確で、実際のイメージはそういう感じなんですが、学生一人一人にしてみれば、半分は個人点になります。半分がチーム点で、こういうイメージです。最終試験なんかもやりますので、このシャトルカードという話は、後でちょっと触れます。チーム点と個人点からでき上がっていると、とにかく全部が、全てのことが成績に直結していると、ただし、そのことによって余りすぎずした感じは出さない。どちらかといえばゲーム感覚を重視するという感じで流れます。

最初の余談に近い話ですが、私の授業というのは、基本的にやる気のある学生ばかりを集めて教育してどうなるんだというスタンスが私にはありますから、むしろ意欲の低い学生が上手くそこに入り込んでくる、そのことを私としても一番重視します。ですから、最低限の努力でも単位は取れるという、この安心感を与えてしまうということは非常に大事なんですね。あの授業は余りやる気なくても、ちゃんと受けててもいいんだと。物すごい課題が出て大変だという、そういうイメージではなくて、気楽に参加できるというこの雰囲気の中で影響を与える、影響を与え合うということが大事なんです。

橋本メソッドの特徴(3)

- 3) 意欲の低い学生でも対応できる**自由度の大きさ**
最低限の努力でも**単位は取れる**という安心感
フリーライダーに微かな後ろめたさをもたせると...
ちょっとは協力しようという連帯感
そんなつもりはなかったのに...
アイツにやれるんなら俺だって、という対抗心の芽生えや潜在的な知的成長本能の喚起

フリーライダーというのは、実は皆さん方が考えておられるほど余り無責任なもんじゃなくて、フリーライダーでも点は与えるぞというふうに言った瞬間に、ある程度後ろめたさみたいなのはちょっと出てきます。実際に点数が入ってくると、ああ、自分、欠席したのに点が入ってくると、多少の後ろめたさというのは必ず感じるんですね。そうすると、ちょっとは協力しようという連帯感。このちょっととはというのは、本当にその学生のできる程度でよい。グループワークの中で、私は5分と3分のグループワークしかやりませんが、その中でずっと黙ってたけどちょっと発言してみるとか、そんな程度でまずはいいんです。それから、中にはそんなつもりはなかったのに、本当にあいつにやれるんだったらおれだってという対抗心が自然と芽生えてくる。潜在的には、知的な成長本能というのは必ずありますから、現在の学生でも、杉原先生の言うその意欲スイッチのようなものが、それを押さなくても自分でそのスイッチを入れるようになります。

ます。

私の授業、先ほど50分ぐらいの質疑応答だと言いましたが、この質疑応答の時間というのは相当な緊張感を伴います。5分、3分というのがグループワークで、いわば話し合うわけですが、非常に単純な方法の一つに質問出ないんじゃないですかということを心配される方のために言いますが、質問を出させるにはいろんな工夫がありますが、非常に簡単な工夫の一つが、質問の前にまずグループワークをさせて、質問を考えるためのグループワーク、私はそれをやります。そのことによって実は、その発言自体も点数化されてるということもあって、自然と手が挙がるんです。自分1人だと100人ぐらい集まった中で、さっと手を挙げるのは難しいんですが、せっかくなので5分話し合っただけ、さっきああいうこと言ったじゃないかという話になると、自分が言わなくても、チームメイトに、おまえに言えというふうな感じで手が挙がるようになります。

それから、教師は可能な限り教壇に立たないと。ただし、私は、例えば教室の後ろにいることもよくあるんですが、マイク運びとして教室にいますから、そのマイクを運ぶ間に私が途中で割り込みます。例えば、説明がおかしかったときにそれを修正するとか、あるいは質疑応答がうまく成り立っていないときに、今の質問の趣旨はこういうことですねみたいな形で、いわば翻訳の立場です。それをやったりします。

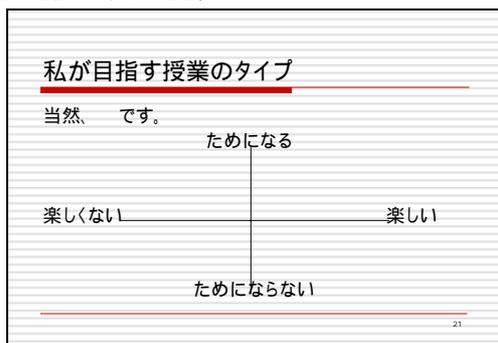
さあ、それでご存じの方はよくご存じなので、余り説明する必要はないんですが、先ほどの「広場」に近いミニッツペーパーという話、これは、講演会なんかだと、これのカラーコピーを配るんですが、要するにこんなもん、遠くの方は見えなくて結構です。雰囲気だけは伝わる。学生が数行何か書いたことに対して、赤が私のコメントです。これを300枚やります。その意味では絹川先生に言わせると、これをやるのは本当に修行僧だと、こう言うんですが、相当な労苦は伴います。半ば冗談でよく言うんですが、昨日何時に出勤しましたかという、ああ、2時ですとか、1時ですとか、そのくらい出勤しないとシャトルカードを返すのに間に合わないの、そのくらいのことよくあります。何を書いても自由なんで、20から40時間かかります。本当に何でもあるんですよ。ただし、90%以上は授業にかかわることが出てきます。何書いても答えてくれる、全員の分に対して答えてくれる。この辺で主体的な学びは自然と誘発されるなという感じが出てくると思います。

さて、残った時間にさっと簡単な疑問を幾つか挙げていきます。私の言ってるような授業というのは、自由度が大きい授業でできない、こういう疑問が出てきてもおかしくないんですが、だったら一部に取り入れてください。別に全部それでやったら教えるべきことが教えきれないと、そういう人は一部に取り入れるだけで効果はあると思います。教えたつもりじゃなくて、本当に学習者が身につけるにはどうするかということの根本に返ってください。

学生のレベルが問題ではないかという話がありますが、一番下、まだ私そこへ行ってないんですが、ある大学から来年ぜひ大学として導入したいと、こういう話で、既にほかの場所で私の講演を1回聞いたことがあって、来年からちょっと本格的に大学として導入したいので、もう一度講演に来てくれというのが今1件入ってます。

メソッド、オーバーじゃないかという話なんですが、これは大したことはないですね。自分から言い始めたというより、他の人が言い

始めたので、今こうなってる。



橋本だからできるんじゃないかと言んですが、私のやってる授業というのは、ある種、名人芸的なところがひょっとしたらあるかもしれませんが、その精神の部分は勇気とか大胆さとか、あるいは一番重要なのは授業観の転換でしょうか。でもこの辺は、私が言わなくてもこの場におられる方というのは、かなり意識されてると思います。いわゆるティーチングからラーニングの転換という、そういう話を意識されたら十分出てくるとは思いますし、私が目指す授業というのは、基本的に縦軸横軸は楽しいか楽しくないか、ためになるかためにならないかというところで、楽しくためになる授業。単に楽しいだけではない、単にためになるだけでもない、必ず楽しいという要素が入らないといけないということです。

さて、四つのメッセージを結びのところに書いていきます。まず一つ目は、授業中の居眠り、遅刻、脱出。意欲のない学生は、当然やります。それを注意して何とか直そう、授業として成り立たせようというようなことを普通は考えるんですが、私はこれまで居眠り、遅刻、脱出、途中で抜け出しということですが、それを一度も注意したことはありません。堂々と途中で抜け出していく学生もいないわけではない。今のこのやり方にしてもしないことはない。私語だけは厳しいですね。さっきのめり張りのようなところ、緊張感とリラクスタムの上手く組み合わせるところで、私語は相当厳しいんですが、この三つは一切注意しません。

自分が学生だったら、何か用事があって抜け出したいなと思ったりもしますから。あるいは、昨日のことで疲れて、どうしても寝てしまうというのは、自分が学生だったら十分あり得るだろうと、そういうこともありますし、ましてや面白くない授業だったら多分寝るだろうと、こういうふうに考えますから、自分が学生だったら受けたいような授業を展開すると、自然と上のことはなくなっていく。そのためには実は、それこそ何か他の先生の授業実践をそのまま利用する、模倣するというよりは、自分に合った授業のやり方、それをやると一番いいんだと思います。

それを、ちょっと言葉を言いかえると、学生は必ず潜在的な学習意欲を持ってると、まずこう信じてください。信じたら、それが引き出せたときに、やっぱりそうかということ必ず実感しますから、科目の性格で絶対無理だというふうに思ってしまうと、その時点でそれが難しくなります。

私は昔から、授業はノルマではなくて権利だという言い方をよくします。この赤い部分は抵抗がある方もいると思うんですが、私はあえてこの言葉をいるんなどこで使っています。学びというのは本来遊びの一種であると。ただ、これ、誤解してもらおうと困るんですけど、いわゆる遊びだから中途半端でいいという、そういう話にイメー

ジしているというちょっと全然違うんですね。どういうことかという、遊びの中でもその遊びが非常に夢中になってるような、そういう遊びであれば、人間というのはどんどん自分からやるものです。ほう、面白いなという感じで遊び感覚の中でやり始めると、本当に主体性というのが自然とそこから見えてきます。遊んでるうちに学びが出てくるというのは、多分、主体的な学びということでは重要なんでしょう。23分かかってしまいました。以上です。

パネルディスカッション

「学生の主体性を引き出す授業」



小田 時間になりましたので、これからパネルディスカッションに入りたいと思います。今さっきの個々の発表が私も聞いててすごく楽しかったんですけども。

これから、1人ずつ質問について答えていただきたいと思いますが、最後の橋本先生まで行き着くかどうかは僕は不安に思うんですけども、最後、橋本先生のところに時間内に行き着きたいと思っております。

ここのすごく魅力的な、聞いててすごく面白いなと思いましたが、皆さんすごくしゃべってて、学生主体型授業の最中に黙られるだろうかと私も心配になりましたけども、私もそのようなメンバーの一員でございます。

では、早速、私に來ました質問、私に個人的に投げた質問について幾つか答えさせていただきます。

成績評価について幾つか質問をもらいましたが、どうやってつけてるんだという形ですね。学生の意欲、本人の授業に出ればよいという教育の出る場合だと。これは、きちんとプレゼンで何点やってやっております。この授業が1年生のときからですけども、今やっている2年生の例えば授業ですと、その場で点数を言います。あなたたち85点、良いところはこれ、悪いところはこれ、85点。来週の人、同じ発表したのに75点ということに初めから言っております。ここで点数をはっきりと言っております、どこが良いか悪いか。そういう形でやっておりますので、円滑にということにはちょっとありません。私はやらない人はいい、私の授業ではあり得ないということですね。

授業への貢献度という場合、どういうふうにやってるかといいますが、橋本先生と同じなだけで、質問は1人1点です。もう点数をやっている。それで質問します。彼らは必死で、そして必死で答えています。

次、これは私の授業は1年生の教養科目ということで、全学生の

「生きる力」アップを目指す場合、必修にするというお考えはありますかといったときに、このような授業全部をある質を保ってやるのは結構難しいと思っております。それは、いろんな講義とか全体を通して、4年間で身につくことだろうと。その中に我々のこの学生主体型授業のいろんな取組というものをモジュールでいけたり、いろんな行動ができていけばいいんだらうと思っております。しかしながら、中には大学さんのサイズによったりいろんな事情で、一種化した方が効率がいい大学さんもおありだらうと思っております、私は。

後は、学生グループワークにおけるテーマの選定方法や留意点についてご教授いただきたいという形ですけども、グループワークは、幾つかその前に彼らが出したテーマの中から話しやすいようなテーマを入れております。そういう形で、共通に話しやすいというテーマを選んだという形です、私は。

次は、山形大学では2001年から新しい授業形態に取り組まれているとのことですが、この取組により学生の出口問題、例えば就職率の向上や就職先の変化などの変化が認められたのでしょうか、ご教授をよろしくお願いたします。これは一言で言ったら捉えていません。捉えていませんし、恐らくそれほどの影響はないんだらうと思います。2単位科目で、それがあつたらおかしなことで、しかしながら6学部、それに6学部、お医者さんになる人もいたり、いろんな形がありますので、これがダイレクトに響くことはないんだらうと思っております。しかしながら、就職率の向上とか出口がいいところに行けばいいんだらうということは、それは大学それぞれデータを持っております。

次に、「未来学へのアプローチ」は、1年生対象及び専門知識がない学生たちもいますが、テーマに対する知識・情報の提供はどの程度行いますか、建築・都市の例で、これは発表の一番初めに、先生が1回目は大体レクチャーされています。そういうことです。しかしながら、やっぱり大きなところは、例えば別に未来学へのアプローチという授業をとって、建築学の専門家になると思う学生はいなくて、それはやっぱり教材の一つとして、彼らの能力のジェネラルな、ジェネリックスキルとして能力開発の点に使われてるところが、この授業の大きなところというふうに考えています。

大体以上のような形です。



杉原 杉原です。ありがとうございました、御質問、私個人に2点ありましたので、まずここから申し上げたいと思います。

1つ目は、質問というより、私が困っていたので手を差し伸べていただいて、アドバイスのコメントをいただきましたので、それに対する御礼を申し上げる意味で述べさせていただきます。

つまずきの解消法ということで、北海道大学の鈴木先生の蛙学の

授業のように、先生がある程度ルールを引き、学生たちを主役に“Show me how high you can fly”、それを競わせる授業に対して、私の授業「なせば成る」の授業は、到達点がオープンエンドになっているからでしょうか。元気プロジェクトの入賞プロジェクトを一つや三つほど選んで受講生に徹底したり、前年度を受講生を授業に活用することで、オープンエンドでもつまずきを減らしてクオリティをコントロールすることは可能なのでしょうかということで、ありがとうございます。ちょっと頑張ってみます。

前年度の学生を活用するというのもやってみたくはありますが、上手くいく場合といかない場合もあって、学生にばらつきがありますので、今年からやめました。それだけでなくできる方法というのは、今、模索中です。オープンエンドに関してはそのとおりです。オープンエンド、テーマが自由ですので、ある特定の学問領域の授業ではないという形をとっていますので、そういう意味ではオープンエンドになっているから、よりまた違ったつまずきが出てくるということになると思います。

あともう一つ、その私の授業では、ある意味、鈴木先生がルールを敷いているかどうかは別として、このルールを敷くということに関して、私たちが小・中・高・大でやってきた教育方法というのは、ある程度世の中の社会構造、自然現象を構造化したものを選定にするわけですね。それ自体、構造を構造化するところ、どろどろしたところに、学生に生で本当に体験してもらって大変だらうと。それを、じゃああなたはどう料理するの、どう構造化するのというところをじっくり育てたいと思っている授業なので、あえてつまずきにほうり込んでいる。その力がきつと違う授業なんかでも生きてくるんだらうと思います。私の授業だけで意欲が上がったとか、うまく克服できたって言っているんだと、私には教養教育の担当しかできないという限界がありますので、学生さんにもう少し先のところまで届く力を育ててあげたいと思って模索しているという段階です。

2つ目の質問ですけども、教育の心理学化についてもう少し詳しくご説明いただきたいということで、申しわけありませんでした。簡単にいいますと、教育には伝達可能性という考え方がありまして、教育の内容に対して、この部分は教員に伝達できるよと、教育可能であるか、あるいは伝達できないか不可能であるかという、そういうコードといいますかイエス・ノー、×か、仮にあるとしまして、心理学化というのは学生の能力とか意欲というところに全部学習成果を持って行くことのために、その教育の伝達可能性を問わなくなるということなんです。

ですから、本来これは教えられないことである、あるいは意欲なんていうのは、例えば本来操作できないものなのかもしれない。しかし、私たちはその議論をすつとばしてしまって、学生が意欲を持っていないのは、やっぱり学生の能力が低いとか、教育成果としては不良品だとか、そういうレッテルを張ってしまっているのではないかとということに対する警鐘です。それが心理学化でもつなげていただければいいと思います。

あと最後に、小田先生と私に対する質問を、私がちょっと代表して述べさせていただきますが、成績評価についてです。学生の気づき、意欲の喚起が主な目的であるために、成績評価が難しいと考えます。内部的評価基準をどのように設定されているのでしょうか。GPA上の成績部分を含めてということで、これは非常に重要な問

題だと私も思っています。これは、おそらく小田先生と私でも違うでしょうし、今、隣に座っていただいている先生方、皆さん違うと思います。

これは私の私的な、個人的な意見ですが、私自身は、この気づきだとか意欲の喚起は成績評価には対象にしてません。よく今でしたら、知識技能、知識の領域、態度、意欲の領域、あるいは技能の領域ということで、その中で三つの領域からそれぞれ考えて成績評価をというようなシラバス作成のマニュアルなんかもあります。私は意欲の評価というのは、いわゆる形成評価です。学生が自分の学習を振り返り、あるいは教員が自分の教育を振り返って、次に改善するために行う評価には反映させていますが、それを学生の成績の設定には入れていません。小・中・高でいう内申書みたいなのところでしょうか。

意欲・態度といったものは、自己評価になるのかもしれませんが、あるいは私たちの鑑識眼といいますけども、見た目でこの子は意欲持ってるなとか、気づきがあったなとか、レポート書いたらわかるかもしれませんが、それはひょっとしたら間違ってるかもしれません。非常にその主観に左右されている領域であり、かつ意欲を持っていないかどうかというのは、その子の原因じゃないかもしれない。ひょっとしたら私が原因かもしれないです。なのに、それをもって、意欲ないから成績低いと言ってしまふまで、僕は今まで踏み込めていないので、私は成績評価の対象にはアウトブツです。いわゆる皆さんもこれまでされてたようなレポートの採点、個人のワークシートの質、そこだけにとどめております。



鈴木 本日はありがとうございました。質問紙が来てるのでお答えしたいと思います。早口で大変聞き苦しかったんじゃないかと反省しています。

私の質問なんですが、解剖などであると本当にこの授業を受けてほしい学生が受講しないのではないかと心配ですというお話です。私がやろうとしているのは両生類の総合学習が一応表看板です。科学の大事なところといったら形態学とか生態学で、そういうものをきっちりやっぱり教えたいわけです。それにはどうしても解剖というのは、あるいは外部形態の観察は避けて通れないわけですね。今の高校生、大学1年生は、例えば普通のカエルの全肢が基本的に4本、痕跡ありますけど、レントゲン撮れば痕跡あるんです、よう見たらとかですね。全ての指に吸盤がついてると思い込んでる学生がたくさんいるんですね。そこから払拭していかなくちゃいけない。それにはやっぱり形態学が必要。内部形態は解剖をやるだろうと思う。したがって、解剖学というのは非常に重要なキーワードになってくると思います。そういうものをさわる、体験するという意味で、した

がって、私のシラバス作戦というのは、はっきりと解剖することということを書いてありますし、最初のオリエンテーションのときに、私の授業は単位を取るための授業じゃないんだらうと、皆さんのこういう力を少しでも刺激したいんだよということをはっきり申し上げて、他にもっと取りやすい科目あるかもしれないから、そちらを受けたらどうかということは話をします。ただ幸いなことに、10年やってますと口コミが、あるいは先輩からのお話とかずっと伝わっていて、履修定員よりもはるかに多い履修希望者の数が来ていますので、それは上手くいってるかなと思っています。

2つ目に参ります。私も橋本先生とやり方が多分似てると思うんですけども、カードを毎回渡して、毎回自由に書かせて、それを必ず赤で書いて、翌週にカードを渡すということをしています。授業のことでなく、何でも有効。そこで激しいバトルも時には行われるわけです。何をやってるかという、チャンネルをつくりたいんですね。通常、授業から授業ですから、学生も構えてきますし、私も当然構えるんですけど、それ以外で何とかチャンネルをつかっていきたい。学生の様子、今年の様子を知りたい。あるいは、そのチャンネルから私が言いたいことを伝えたい。授業外で何ができるかというのは問題かもしれませんが、教育の。

これは私、学校が荒れた、校内暴力で荒れた中学校で取り入れた方法なんですけど、そこで私が学んだことは物すごく大きかったです。それはずっと私が教育現場にいる十何年間、それから大学でも続けていることです。赤ペン、確かに時間かかるんですけども、そこから見えてくるというのは素晴らしいものがあって、実は先ほどの解剖を例にとりますと、女の子で解剖が嫌だという子がやはり出てまいりました。それはそのカードからわかったことです。それをもとにしながら本人と面談しながら、解剖やりたくなかったらやらなくていいよ、私の助手になってやるのはどうと。当日になったら助手やめたって、彼女はそれで解剖やったんですけども。非常にお互い理解することができたと、そういういろんなベースがある。大変ですけども、私は今の学生に必要なだと思います。ただし、妙な過干渉とか手を差し伸べることは一切していませんで、厳しいときは、かなり辛らつなことを私はカードに書き込みます。でも、彼女とか彼氏のこととか書いてくる子中にはいます。

それから、教員の役割として、学生主体型授業の教員の役割というのは、やっぱり授業者になる、私は自由に学生をやって、そうやってできる部分は最後の部分だけ思う、最後の学生授業だけで、前半はやはり学問ベースといえますか、で進めるわけですけども、ある意味で身近な他者である。

もう1面考えるとすれば、演出家でなければならぬであろうと思います。それは言語的支援というのはとても大事でして、僕たちが褒めると結構喜ぶんですね。それは、男子生徒1人を後ろから羽交い締めにしたたり、羽交い締めにされたりするんですけど、そういうような、私はその気はありませんけど、いわゆるスキンシップといえますか、大事なことだと私は考えてます。

それから、小・中・高との関連ってことで、大学教育が突然存在するわけではないと、小・中・高からの伝導だと思う、そのとおりですね。これは、実は私は科研のテーマでもあるんですけども、どこで何を植えつけるか、よく我々はこれから考えていかなくちゃいけない。小・中・高での授業時数は減り、子供たちの生活体験や社会体験は

減ってるという状態で、状況の段階で頭の中に入ってくる、そういうことがありますよね。フィンランドだけは違うんですけども、その辺の何が欠落してくるのか、それを意識した大学初年次教育の授業デザインというのは今、私は絶対必要だろうと思っています。

例えば今日お話ししたように、正確性とかこだわりの力、おそらく解剖で、筋肉とか縫工筋とかいろいろあるんですけど、それを正確に見ようとするのを学んだ文系の学生は、いろんな社会でのデータ、正しか間違いか、新聞見るとき、それを判断する一つの軸につながってるような気がします。そういう意味を小・中・高の教育をしっかり見て設定することが大事だと思っています。

評価は、意欲の評価に対しては全く杉原先生と私は同感でして、表裏に対して意欲を添削するのはもってのほかです。意欲を高めるとして「さぶろく、じゅうはち」と教えるというアカデミーになってます。そこに意欲の測定の醍醐味があるんですね。それを我々は考えなければいけないなと思っています。全員Aということをも考えたこともあるんですけど、実際私は成績を見て、時には、「おまえの授業でたいして答えなのに、何でおれは良なんだよ」とか、ぶうぶう言ってる生徒の顔は笑っています。なぜ彼らが笑っているのか、基本的に私は評価の判定を全部公開します。細かいのがエクセル上にあるんですけど、最後にぼんとコンピューターで、これ成績だよ、見ていいよ、みんなオープンにしていますし、本当におまえら能力の位置を示したいんだと、点数が目安だと、重要視してる授業じゃないんだという話はしてますので、彼は彼なりに納得して、はっきり言います。そこが評価だと私は考えます。

佐藤 いろんな多岐にわたる質問をいただいたんで、最初に評価の面でいうと、私も意欲は全く評価の指標には入れていませんので、いわゆるアウトカムというか、アウトプットされたものです。レポートをかなり頻繁に書かせていますし、その間には作文の書き方、レポートの違い、例えばエントリーシートや、そういう様々なマネージや書き方を教えて、そしてそれに類する参考図書、文献を幾つか、学生たちが1年生が読んでわかりやすい本をかなり挙げていますので、それを授業の間に読んでいる学生、そして読んで変わったかどうかというのがありますので、私もいわゆる意欲的なものでは一切入れていません。そして指標は全部私も同じように挙げています。ですから、1回何点というようなことと、それから課題のレポートは何点、その視点はどれだというようなことを挙げていますので、私は結構厳しいので、なぜかという、最後まで言われた本を読んでいないことが明確な人というのは、やっぱり結構参加していても私は結構平気でCはつけるので、甘くはないとは言われています。ですから、そこは先ほどの成績意欲とはちょっと違います。私も同じようにつけてます。

幾つか質問があったので、ちょっと私に固有な部分をもう一つ、結構大きくあるんですけども、多分、橋本先生もお答えになるかもしれないんですが、カード形式は古いのでICT利用がいいんじゃないかということで、ICTも私は利用してみました。利用したけど、また戻ってしまいました。わかりません。私、今、もう1人やっている若い先生は、今度Macを入れてiPadでグループ学習をやるといっているのをやっています。クリッカーもやっています。私もクリッカーをたまに使うんですけども、パワポは余り使わないんですけども、使うん

ですが、いろんな手法をやってみてどうかなというのがあると思います。私は今は割とその古いタイプのにもまた戻ってしまって、若い先生が、今、もっとブラッシュアップしたものをやっているの、それと比べてまた利用して、また、もしかしたら戻ったり、相互作用するかもしれないですけどもということです。

それから、余り優等生的な答えができてなくて申しわけないんですが、赤ペンは時間すごかかります。私、実をいうと、この4月から学長補佐というのになって、物すごく大変な学長のお守りというか、学長がやりたいことを全部いろいろ、私は網の目のような役割なので、国際担当の学長補佐とか、労務担当とかじゃないので、私はその他何でも係なので、そういう意味でいうと莫大なやっぱり時間を全学役職でとられていて、やはり優等生的な答えはできないのは、実を言うと手抜きはしています、しました。

というのは、昨年あたりから300人という授業をやったときに、この赤ペンの回数であるとか、それからミニッツペーパーの大きさであるとか、これは実は小さくしたりしました。それをマスターに行ってる学生が見て、「先生、僕らのカードかえたん」と言われてしまいました、もうばれてしまいました、「ごめん、300人になったから」とかと、ごめんと言いわけを言って、「ああ、わかったよ、先生何か学長補佐だから。ああ、そうなの」と言って、実は優等生的な答えはできません。ですから、そうやって手抜きをしなきゃいけないこともあります。それはもしかしたらどっかではね返りが、しっぺ返しがあるのではないかなというふうにも思います。ただ、1人の能力は限られているので、やむを得ないかなと思います。

ただ、できる範囲のことで赤ペンをしたり、それから労力はできるだけかけたいと思うんですが、物理的にやたら会議が多くなってしまったので、正直言って無理なときもあります。その場合は、ミニッツペーパーを小さくしたり、あとフィードバックを、私は実は返すのを少なくしています。ごめんなさいです。

それから、学生相互のピア・レビューの方法を少し具体的に教えてくださいということで、これは個別的なんですけども、ご興味のある方もいると思うのでお話をしたいと思います。

まず、私がやった学生のピア・レビューは作文です。まず作文とレポート、論文の書き方の違いというレクチャーを必ずします。私が求めている作文というのは、いわゆる最後にエントリーシートの形で、もしあなたが企業に出たときはどうなのかという視点、ですから、反論や先行研究などがあるレポート、あるいは実践があるレポートとはこのように違うということ、それから、例えば基本的な状態と形態の違い、作文の基本的な書き方の指導というのをやります。



そして、その際に評価するポイント、それから進める本、2週間以内に読めるような本というのを、学生たちに推薦をします。そしてそ

の上で、学生たちにピア・レビューをさせて、その場でピア・レビューをしたものを今度は私が、その学生がつけて、10点単位ぐらいでつけさせます。一応、50以下はなしよというふうにするんです。なぜかという、書いて持ってきたというところで既に60点はつけてあげましょうということで、60、70、80、90で、一応ごめんね、100は、パーフェクトというのは難しいので、作文では、なしで、60、70、80、90、4つぐらいの分類でつけましょう。どうしても90は出せないけど88だという人は、その旨を書けというふうにピア・レビューをさせます。それは2人から3人させます。前の人の評価ができるだけわからないように付箋とかを張らせたりします。それを2人から3人でグループでさせて、そして最後に私が、300人だったら300人、赤ペンをするわけですね。そして学生たちが85つけたものになぜ私が70をつけたのかというのを1個ずつ書かなきゃいけないので、一人一人に赤ペンやるよりは、遥かなる時間的労力は倍以上かかってしまいます。ですから、これは毎回はともできませんので、やらない回もやらないクラスというか、もあります。そういうようなことで、こういう学生のピア・レビューをしています。

一応、私は、今、組織的な展開ということで、全学的に役割にもついているので、そこから少しだけお話をすると、山形大学と違っていて、静岡大学は様々な点で遅れていますので、愛媛大学とか山形大学はFDが非常に進んでいます、静岡大学は非常に部局の壁がまだに高く、遅れている大学だと、国立大学の中でも決して進んではないと思います。

ただし、組織的な取組というのはうちの大学は非常に弱いですが、各部局ごとでは様々なことをやっています。かなりいろんなユニークな取組をしています。私もそうなんですけれども、それはやはりWebや共有化する取組をFDの中で私たちの授業改善の取組というので、年に1回必ずやっています。これには学生たちも参加をして意見を言ってくれています。こういうことをしながら、ああ、そうなんだ、うちの部局でもこれができるのだというようなことで、お互い盗み合ったり、盗み合うとはおかしいですね、良いものを共有化するということができるようになります。

そういう中で情報学部のGPであるとか、それから工学部のGP、大学院のGP、様々なものの取組のGPの発表会というのをやるんですね。Good Practiceを学内でまず共有化しましょうということで、GPの発表会、学内の教職員だけにやってるんですけども、そういうことをすると、それで、じゃあ次、うちもこういう面があるからGP出してみようかな、ああ、そうなんだ、こんな考え方もあるんだ、じゃあキャリア形成のGPの情報学部でとったのを、今度の就業力で、大学教育センターでとれないだろうかということで、それを少しもっとブッシュアップしてとろうというような、こういう割とどっちかという芋づる式でいるんなことがうちの大学は始まるタイプなので、一括でみんな組織ややり方も変えますというのは、ちょっと非常になじまない大学なので、FD委員会もすごく苦労をするわけですけども、ただそうやって心ある先生や、やりたい意欲のある先生方は、芋づる式でいるんなことが展開できているというようなことがあります。

橋本 私の方にちゃんと時間が確保できました。最初的小田先生のお話からすると、残り時間は、私、全部使ってよろしいでしょうか。

まあ、そういうわけにもいきませんでしょうか、良識の範囲内で幾つかお答えしたいと思います。



鈴木先生及び佐藤先生からお話ありましたが、私としてはまずそこをお答えしたいと思います。もうこれはどなたが書いたかというのはわかってるんで、あえてちょっと読みますが、カード形式はもう古いと、もうちゃんと質問じゃなくてアドバイスなんです、ICTを利用したほうがいいと。理由は三つあって、教員の負担軽減、それから学生全員が共有できる、成績にも反映しやすい。

私は赤ペンにこだわっています。それは自分が古いタイプの人間だからというよりは、先ほどのお二人の話の中にもちょっと見え隠れしてるんですが、逆に共有したくないんです、1対1の関係を築きたい。相手が300人であろうが、自分で一番多かったのは400人ぐらいなんですけど、それは、やはりそうであるからこそ教員と1対1の信頼関係を築きたいというのがあって、実際、私ほどコメント返さない教員もいますが、やはり赤い肉筆で返ってくると、学生の受け止め方は確実に違います。

それで、シャトルカードというツールは別に私が開発したのではなくて、岡山大学が大学として採用しているものです。それが採用されたときに、私は実はあんなもの使ってもしょうがないなというふうに思っていました。ですから、実際私は最初のころ、今の授業のやり方に変えたときに、シャトルカードを使おうなどということは全く思わなかったんですが、たまたまちょっと全学にシャトルカードを推進しなければならぬという立場になったもんですから、自分が使わなきゃまずいかなと思って使い始めてみました。すると、ちょっとやはり言葉では説明しにくいんですが、確実に効果があります。それから、私自身はそれまで、いわゆる肉筆でのやりとりというのは別の形態でとっていましたけど、1枚のカードでやりとりすることになりかなり意味があります。学生が自分自身の成長を気づくこともありますし、私自身も前のコメントを見ながら、前はこういうことを書いていたけれどもというような話で、私自身もコメントのたびにみたくところは避けられます。成績も1枚のカードになっただけで、さほど厄介ではありません。

そういうところからすると、古いやり方なんですけど、一応私には性に合っている。今日、レジュメで、私、4ページの下のほうに書いたんですが、私の授業紹介だと、どうしてもその橋本メソッドの話が目立ってしまうので、今日もできるだけそこは避けたんですが、それでも印象は残ってしまうかもしれません。

ただそこに、4ページのはっきり書きました、スライドにはそのような文言は入れませんでしたけど、シャトルカードというのは私の授業方法で、本質的な要素ではありません。なければならぬ、つまり私のような授業形態をとるときに、シャトルカードというのは絶対条件

かというそうではなくて、ウェブクラスなんかも使ってそれを補うとかいう形も当然あり得ます。その場合、私の言ってる1対1みたいなところが、せっかく共有ができるのに徹しないというのは何かおかしな話になってしまうんですけど、それはそれでメリット・デメリットありますから、その先生その先生のお考えで、何をするかというのはいろいろあり得ると思います。橋本は性に合ってるという、そういうふうにお考えください。

ちょっと余分なことに脱線しますが、何で橋本はこれが性に合ってるのかという話がこの中に出てきます。小田先生の紹介の中にあつたこの本ですけども、あるいは、きょうのイベントそのものがタイトル名になってる本ですが、余分なことというのは、この本を小田先生がつくりましょつていうふうに私に電話があつたときに、エッセイ集つくりましょつていうふうに彼は言ったんです。それで私はエッセイ書きました。スター・ウォーズのエピソード、エピソードみたいなイメージで、それで橋本メソッドエピソード、エピソードという、エピソードまでありますけど、そういう話をエッセイとして書きました。ですから、そういう意味でちょっと私の章、私の書いた部分だけが浮いてるんですけども、ある意味そのエッセイであるために、何で橋本は赤ペンにこだわっているのか、あるいは赤ペンを続けているのか、あるいはやれるのか、そういうことの裏話がここに出てきます。

それで、ちょっと別のこともお答えします。それは1回目の授業でどういふふうに何を心がけたいですか、1回目の授業で何が大事ですかという、そういう話なんですけど、基本的には場づくりですね。これは、今、日本教育大学院大学におられる林 義樹さんがよく使われる言葉ですけど、場づくりという言葉をよく使われるんですけど、場さえつくつてしまえば学生は主体的に動きます。

それで、具体的に私の場合は何をやってるかという、1回目の授業、オリエンテーションもしますが、むしろやはり場づくりという点で、何に自分たちは取り組むかということの選択の中にゲーム性を持たせます。興味・関心だけではありません。これを使つたら優位かな不利かなというゲーム感覚、それから、途中で駆け引きのような要素も1回入れます。選んだものが余りに競争が激しいと、ちょっと別なものに変えるチャンス。しかし、みんながかえてしまうと、逆に競争率はそつちへ移つてしまふ。そういうような時間を用意したり、レジュメで申しますと、幾つかの表が出てると思うんですが、3ページのところに表2というのがありまして、2の全てがこのような内容ではないんですけども、今年使つたものをちょっとそこにそのまま書いてあります。

ここで見ていただきたいのは、競合数という数です。かなりのばらつきがあります。最初はもつとばらついています。この中から二つだけが選ばれるというのが条件なんですけど、その意味からいいますと当然倍率の小さいほうが、競合数の少ないほうが選ばれる可能性が高い。選ばれば選ばれただけ点数が上がりますから、そういう意味ではそのゲーム感覚の中でどれをやつたらいいか、何回目ぐらいがいいかということをいろいろ相談し合つてます。そうすると、ほとんど初対面だつた学生が、それで結構グループ内で話をするようになりますし、それからできる限りユニークなチームの名前、グループの名前、そういうものも考えさせたりします。この二つの要素を入れるだけで結構場はできるというか、少なくともグループとし

て、私の授業の場合はグループワークは基本的にずっとその固定メンバーでいきます。フリーライダーが出ようが出まいが、そういうのは固定メンバーで行きますから、最初のグループでどういふチームワークが、最初、初回ででき上がるか、そういうことをちょっと私の場合は心がけています。

それからもう1点だけ、このタイミングではお答えさせていただきますが、あえて、これも変なんですけど、佐藤先生にチェックしてあるのに私が答えるということ、ちょっとあえて許してください。つまり、ピア・レビューの方法で、先ほど説明された佐藤先生とは違うピア・レビューというのを、私がサポートしてる授業で取り入れてる例をちょっと紹介します。私がサポートしてるということの意味は、岡山大学にはご存じの方もあるかもしれませんが、学生がプランニングをして、それが正式な授業になっているというのが幾つかあります。その中の一つを私はサポートしているんですけども、その授業の最終ゴールは新聞投稿です。ですから、佐藤先生の作文というような話はかなり重なるんですけども、その新聞投稿で、最終的に実際に新聞に載ると評価高いんですけど、その一歩手前が新聞社に持ち込むという、そういう段階があるんです。その新聞社に持ち込むものを、みんなが勝手に持ち込むんじゃなくてクラス内で予選をします。その予選がいわばピア・レビューなんですけど、20作品ぐらいを3回ぐらいに分けて、それぞれが読み、読み比べて票を入れます。投票する。教員は一切タッチしない。したがって、票数の多い者から順に絞られていく。そういう形でもってピア・レビューをし、それから、そこで外れた学生たちはどうなるのか、予選に落ちた人たちは、実は今度はサポート役に回る。サポートをして、それで最終的には新聞社に持ち込んだ者が全部載るといふわけではありませんで、新聞に載つた場合には、サポートした側にアシスト点が入る。このことによって、もつと良い文章にしようとか、もつと正確な表現にしようとか、あるいはもつとしっかりした主張にしようとかという、そういう気持ちが学生のほうに自然に働くようです。こちらの構造を考えたのが実は学生なんで、私はその推進役をやってるに過ぎないんですけど、そういう意味からいふと、そういうピア・レビューのやり方もあるということをちょっと紹介しておきます。

一旦戻したほうが、例えば全員に対する質問みたいなところは、小田先生のこれからの司会でまたマイクを握る時間もあるかもしれませんが、一旦ここで切ります。

小田 戻していただいて、どうもありがとうございます。

後は、最終的には1人2分ずつぐらいで、今までの全部受けたコメントを、パネラーさんにやっていただきたいと思つても、その前に、皆さんからせっかくですから、ここで今までの話を全部受けて、質問とか意見がありましたら、1、2、フロアから受けたいと思つても、どなたかいらつしゃいますでしょうか。

よろしければ、こちらからちょっと順番に2分程度ずつ話をして、最後にまとめていきたいと思つてます。まとめることはできないでしょうけども、

ここで、できたかどうかというのはありますけども、私が今回のシンポジウムのタイトルをつけました「学生主体型授業の冒険」ということで、この冒険とは何なのかといふと、冒険に歩むのはやっぱり1人の力であり、チームの力であり、人間のそれぞれの個性や

能力をやったものです。まさにそれは、我々教員が歩む道なんです。私の思いとしては、大学教育に対する思いとしては、決して教員がティーチングマシンにならないとか、パターン化された授業法がこの学生主体型の授業になるならば、非常勤講師を雇った方が安いんですね。そうではないんだと、我々教員はいろんな困りながら、いろんなことをやりながら歩いていく道、まずそれが研究と同じように教育も、我々は未知の荒野でやる冒険なんだと思ってます。それが学生に対する、すごいいろんなものを感じ取り、彼らは前に進もうとしていくことなのだろうと私は捉えています。



そうしたときに、我々は決して、私はアナログ人間ですけども、ITを使ったほうが良いという意見がありますけども、我々は決して食わず嫌いではなくて、いろいろと先ほど佐藤龍子先生が言ったように、試して自分のものとしてやりやすいものを選びます。上から組織にこれだけを使いなさい、それはないだろうと思ってます。そのときに、教育大綱化といいますか、教育効果というもの非常に発揮される、我々の力として、そのように私自身考えております。それは、教育方法についてもわかりであって、我々、今日、いろんなことを具体例を学ばせてもらった。それを全く同じことにするわけではなくて、それぞれの専門性とか、私は人間のキャラクターというものを大事にしたいので、そういうものを生かしながら、自分を大事にどうしていくかということがあると思います。

しかしそれは、また同時に、各個人の領域ではなくて組織としても考えなくてはいけません。置かれてる状況は非常にいろんな立場があります。教育的に苦しい大学さんやら、それを組織的に上からさっさとやらないと、時間的にもかなわないところがあると思います。そういうふうなダイナミズムを、我々は大学として、まさに知恵を使ってこの難局を乗り越えていくことなど、まさに我々が託されてることは学生主体型授業なんかではなく、大学そのものが冒険の状況にあるだろうということで、私は2分間のコメントを終わらせていただきます。

杉原 最後、コメントということで、まだ触れられていない組織的な展開というご質問を受けてましたので、そこに応答する形で、コメントしようと思います。

その質問自体は先生方の取組をどのように組織的学部だとか大学として、具体的に展開していますかという問いです。これに具体的にちょっと述べている時間はありませんので、私が今日発表しました、そのつまづきというところから考えているところを申し上げます。実は私、幼児教育を学部のときに学んでいまして、幼稚園の教員を3年ほどしておりました。幼児教育に一番重要なのは子供理解なんです。子供が何かできない、あるいは何かできたというときに、

その子供の中に一体何が起きてるのか、なぜできて、なぜできないのかとか、そういうことを子供の心の窓口から入って行って、子供を取り巻く環境を考えていくという、そういうスタイルで実践を身につけてきたものですから、大学で今日のように、学生が何につまづいて、何をどういう形でそれを克服しているのか、一体つまづきにはどういう環境的要因があるのか、そして克服したときに、彼らがどういふところに喜びを感じるのかという、そういうところに迫りたいという思いがあって、そのことを大事にしています。同時に、教員のつまづきもありまして、では教員は一体こういう今までやったことのないスタイルの授業で、どういふふうにつまづくんであるのか、一体そこには何が原因で何が起きているんだろうか、その環境は一体何だろうかというところを実感した上でないと、私のようなFDを、私はFDを担当しておりますので、FDを担当している者としては、その大学教員心といいますが、大学教員理解といいますが、それなしには進めていけないであろうという中で、こういう教員のつまづきということにアプローチしていきたいと思っているので、そういう中でそのノウハウを、あるいは教員理解ということを自分の中に耕して、それを明文化していくことで、組織的に何かしようといったときに支援の手が差し伸べられるのであろうと。それはトップダウン的ではなくて、地道な作業でスピードは遅いと思いますが、一番大切にしたいなと思っているところはそういうところです。

鈴木 2分間ということで脈絡のない話をいたします。振り返ると、自分が中・高の教育困難校でやっていた経験がすごく大きいと思っています。買ってくれというわけではないんですけど、「理科の教育」という雑誌がございます。来年の3月号に、その辺のところを文面で、私は実は未来の教師を目指す皆さんのためにというので文章を出したんですけど、それをまとめながら、やはり今でこそきれいな言葉でしゃべっていますが、私が教員1年目までは大変でした、挫折の連続で。4階、校舎内をバイクが走ったり、授業中、爆竹が投げられたり、バイクが入ってくるわ、目の前で学年主任が殴られてるのを抑えたり、そういうところで生徒指導をやっていたものですから、非常につらい、クラスの子供が中々自分の方に向いてくれないと。

ただ、そういうところを通して自分の弱さ、悪さを、まずいとこをたくさん見えてきました。あの経験がなければ、あそこで学んだモニタリングの大切さというのがなければ、今日の蛙学はなかったらと本当に思っていますし、今現在、実は北大生から、結構みんなからストレートに言ってくれますので得ることが多いです。

先々週も、来年のTAと称するボランティアの学生がうちへ来て、夜中まで来年の蛙学の作戦会議をしました。そんなところにもやっぱりいろんなアドバイスが生まれたりして、私も非常に救われてるなって思います。教員は学生を見てやると、近づいて見てよといわずに遠くから見るのが大事でして、あるいは人を介して見て、自分を仲間に見てもらおう。例えば色々あります。そういうチャンネルを色々持つことが、これからとても大事なんだろうなと思います。

佐藤 FDは、私も主担当という形でいましてので思うんですけども、全ての学生にとって有効な教育手法はないと思います。言ってしまうといいかもしれません。ですから、全ての大学にとっても

全ての教員にとっても有効な教育手法、これをやると全部素晴らしいというのは実は私はやっぱりないと思うんです。ですから、それは手探りであったり組み合わせだったり、マトリクスだったりマトリクスから外れたところだったり、試行錯誤する中でしかやっぱり見えないものもあると思います。ですから、使えそうなものは使っていて、そしてだめなものは捨てたり、あるいは改良したりすることが、試行錯誤の段階自体が、私は科研費でとっているのは大学教師のキャリアなんですけれども、大学教師のキャリアにとっても必要なもの、大学教師もキャリアを形成していく過程の中で必要なことではないかなというふうに思います。その中で教育実践、そしてFDなのだ。

ですから、今日、今回、話が出なかったんですが、私たち自身もキャリアをつくっていくのが、キャリアデザインの授業をやっている、良い点と悪い点が一つずつあります。一つは、合わせ鏡として自分のキャリアの形成や自分のあり方や生き方や授業や、それから研究や情勢について、同じようにキャリアを私もつくっていったらどうかということ、やはり絶えず自問しなければいけない。これは合わせ鏡として嫌な点でもあります。ただ、良い点でもあります。

そして最後に、私がこの5年間、キャリアの授業をやっている、学生主体型をできるだけ考えながらやっていく中で、1個だけ、1個だけとか、いっぱいいい言葉があったんですが、やっぱりすごく、今回、ナカニシヤさんのにもちょっと書いたんですが、学生が授業を受けた後に、「幸せは歩いてこない、だから歩いていくなだね」と歌いたいところなんですが、その言葉をフレーズを、先生の授業を聞いて頭に中を駆けめぐりましたという、そのフレーズが出てきたんですけれども、自分でも歩いていく、大学の教師もキャリアをつくるという、そして学生主体型授業や、それからFDについてもそんなのだということと終わりたいと思います。

橋本 全員に対する質問というところから、2つほど取り上げて最後に伝えたいと思いますが、そのうちの1つは、既に杉原先生、佐藤先生がお答えになっている組織的な展開という点です。

私は10年間、岡山大学のFDを引っ張ってきました。それ以前は、FDが一番似つかわしくなかった教員かもしれませんが、とにかく10年間引っ張ってきました。それで、今年の9月のことなんですが、同志社大学の圓月先生が岡山大学にいられて講演をしたときに、一つだけ岡山大学のまずい点があると。それは橋本先生が橋本メソッドという言葉を使っていることだと、岡山メソッドとか岡大メソッドというふうにならないのかと、こういう話を発言されました。

それを受けてということではないんですが、私は、個人的な話になりますけど、岡山大学を去ります。そのことによって、それがどう引き継がれていくか、引き継がれるような土壌はしっかり固めたつもりです。その意味合いから言うと、新しい人の新しいメソッドが大学の中で芽生えて、あるいはそれがある程度の橋本メソッドを継承してくるところに発展していければいいというふうに私は思っていますし、多分そうなんだろうというふうに期待しています。これを組織的にそのように進めてきたという自負がありますので、私が抜ければ抜けただけ、私が築いてきたものは組織的に展開され続けるだろうと、こういうことを大学の上では考えていくべきかなと思います。

それからもう1点、これは短く答えますが、学生主体型の授業に

おける教員の役割ということ全員に対して質問されている方がおられるんですけども、よく小・中の現場で言われるように、学習の支援者になるべきであるということは、これはそこで終わってしまってもいい話ですけど、単なる支援者になってはだめだと思いますね。3つの部分を大事にして、そういう支援者になってほしいというつもりでいく動きがあるんですけど、1つはまず安心感、その教員がいることによる安心感、勝手に学生が何をやっているかわからないという、そういう学習にならないような、そういう意味での教員がいることによってしっかりした学びができるという安心感。それから、それとも言葉は違いますが似たようなところで存在感というポイント。その教員がいるということが非常に重要である、その授業にとっては重要である。学生の主体的な授業でありながら、なおかつ、私なんかよく口を挟むわけですが、その存在というところを示す。さらには、そういうものを通じて信頼感、安心感、存在感、信頼感と、こういうものを兼ね備えた学習支援者になるべきであると。そうすると、学生主体型の授業というのが意味のあるものになっていくのではないかなというふうに思います。

小田 ありがとうございます。

これで大体終わりなんですけれども、最後に、我々のこの話をまとめたものが載ってます、これは教育GPのプログラムです、3年間の。「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」というものですが、このプロジェクトでは外部からのご意見をいただくために、諮問委員会を毎年開催しております。諮問委員になって3年間、我々の支援をしていただいたのが、日本教育大学院大学の林先生、そして島根大学の山田先生、立命館大学の木野先生、そして壇上にいらっしゃいます岡山大学の橋本先生、そして新潟大学の絹川先生です。そこで、絹川先生に最後に感想を伺いたいと思います。



絹川 本日は、大変個性的かつ刺激的なお話を伺うことができました。会場の皆さんともども大変励ましというか、ある意味では大変圧迫感を感じたと言えるかもしれませんが、今後の私どものために大変参考になりました。ありがとうございました。

今、小田先生からご紹介ありましたように、この山形大学の「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」、大変長いタイトルですが、これは文部科学省の質の高い大学教育推進プログラム、俗称、大学教育GPですね。そのGPに採択されたプログラムで、今年度で最後ということになりまして、こういう催しがされたわけですが、「学生主体型授業の冒険」という、先ほど小田先生がおっしゃってましたが、冒険という言葉がついてるところに意味合いがあるんだろうと思うんですね。

先ほどの諮問委員会でも私は申し上げたんですが、学生主体型授業というのは、本来当たり前のことなんだ。当然のことが当然じゃないから冒険になる。やはりこの冒険を通して当たり前にならなきゃいけないわけですね。そこが非常に大変なところだと思うわけですが、一つだけ引用させていただきますが、小田先生のレジュメの中に、山形大学のFDは既存の授業改善を目指していると、それが今後続くんだとおっしゃってますね。要するに、大学の一般の本質は変わってないわけですね。そのような本質は変わってはいらない、変わってない。そこへ全部回避しなきゃいけないということだろうと思うんです。

その言葉を私の経験の中で申しますと、このGPのはりりでありました特色GP。特色がある大学教育支援プログラム、その実施委員長として私どもが考えたことの一部に同じような考え方がるわけですね。教育というのは、特色ある教育ということは独特な教育ということではないんだと、独特ではないんだって、当たり前のことですね、当たり前のことがきちんとできるといことが特色であるという、逆説的な表現を使いまして、審査の委員の間でそういう考え方を徹底するというを私ども行ってきたわけですが、そういう意味で、この山形大学の試みが今後の大学教育にとって、いろいろな意味でよい影響を与えていくのだろうと思います。

私の個人の経験であります。顧みますと、山形大学がFDを始めようとしたころ、4年ほど前のことですが、そのときに、山形大学の医学部に私、招かれまして、啓蒙的なお話をさせていただいたことがあります。そのとき、その時代には、山形大学のFDというのは、要するに混沌としてカオスの中にあっただけですね。それが、カオスの中に私が行きまして、啓蒙的なお話をさせていただきましたが、10年間であっという間に、山形大学は日本の大学のFDの拠点大学になってしまっ、拠点大学の一つになってきたと。ここに至るまでの先生方のご努力といいますが、注ぎ込まれたエネルギーというのは大変なものだろうと思います。いろいろな印刷物を見ましても、これだけのものをつくるということは大変だろうと思いますが、そういうこの大変な努力が今後継続されるかどうかと。

GPは前回の仕分けにおいて廃止になりました。昨日、読売新聞に松本さんが小さな記事を書いてございまして、GPを取り上げてくださいました。そのGPの記事の最後に、絹川は怒っているというのですね。このままGP終わっていいんだろうかというのは、GPを始めたその責任者の1人として、つくづく思うわけですが、今後、山形大学はGPの支援がなくて、この事業を継続していく、そういうのが社会的なご責任があるだろうと思うんですね。ますますこの山形大学のFDプログラムが発展し、そして、私どもと御一緒に日本大学教育の質の向上に向かってご尽力いただければありがたいと思います。これまでの山形大学のこの行いに対して、心から敬意を表させて私の挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

小田 絹川先生、どうもありがとうございました。

今日は長い時間、4時間ありがとうございました。すごく濃密な話ができただろうと私は思います。おそらくGP、絹川先生の始められたグッド・プラクティスというのが、各々の大学に持ち帰って、発展させていくことだろうと思います。ぜひとも自分の大学に持ち帰

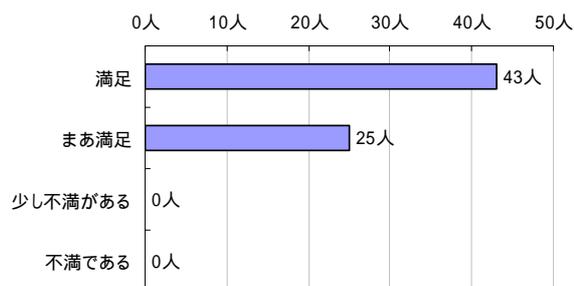
て、今日のシンポジウムを活かしていただければ、主催者側としては喜びでございます。

本日はどうもありがとうございました。

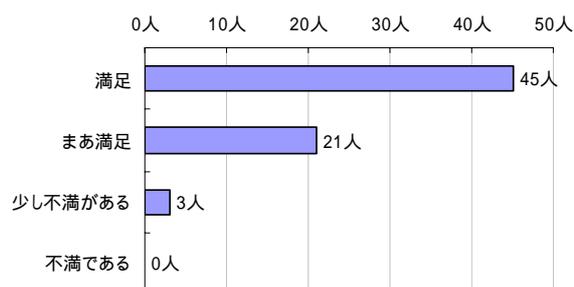


山形大学FDシンポジウムに関するアンケート調査

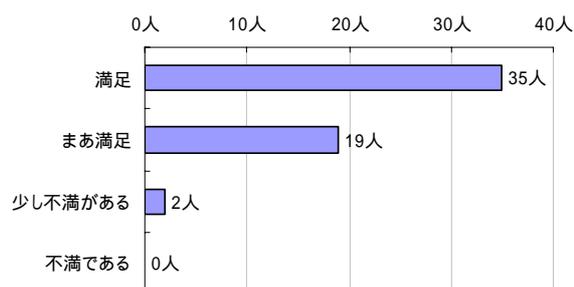
(1) 今回のシンポジウムに参加して満足されましたか(n=68)



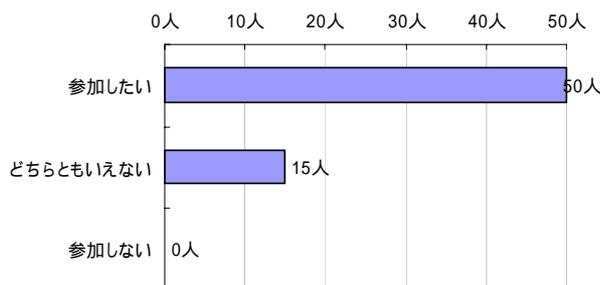
(2) 基調講演に参加していかがでしたか(n=69)



(3) パネルディスカッションに参加していかがでしたか(n=56)



(4) 次回も山形大学FDシンポジウムに参加しますか(n=65)



(5) 良かったと思う点・印象に残った点

- ・多くの優れた取組を拝聴でき、全体としては刺激的で面白かったです。
- ・橋本メソッド等の工夫を知り得たこと。
- ・小田先生の授業例の発表で、応急的な授業ではなく“人間の骨格を形成する授業”(生きる力・生きるために考える力)をおこなっていることに感銘しました。それによって、プレゼンテーション力やコミュニケーション力・リーダーシップ力も同時に身につけていけることが、とても良いとおもいました。
- ・「近年の大学は、学生の人間力の向上という、よく分からぬお題目を達成するために、様々な講義を開設しており、担当教員たちは何をどうしたらよいかわからずにとどまっている」という小田先生の指摘はドキッとした。本当にその通りである。そうした各教員の悩みは、学長や理事には理解されないことが多い。山形大学のように全学あげて3年という長期計画で初年次教育を創り上げようという取組は、大変参考になるとともにとてもうらやましかった。
- ・様々なGPが分かり役に立った。
- ・それぞれの教員が問題意識をもって授業改善・工夫に取り組んでいることが理解できた。
- ・自分が学生だった時の事を思い出し、今回お話を聞かせてくださった先生方の授業が当時あったら良かったなと感じました。
- ・自分自身の授業は専門性が高いので、すぐには応用できないものの、教養教育全体の改善を目指すためには大いに参考になった。
- ・パワフルなお話から元気もらった。各々の講師が実践に基づいていて、1分1秒が貴重に感じた。
- ・それぞれの現場での取組に、現在の教育が共通に抱える問題が見えて興味深い。
- ・教員の存在の意味は、「そこに居ること」「触媒」というキーワードが印象に残った。
- ・学生の意欲をひきだし、主体的な学びを引き出すために必要なものは、道具(機器等設備)ではなく、教員の地道な努力であると感じました。(コメントシートを利用した学生一人一人とのコミュニケーションなど)教員のやる気(意欲)を高める効果的方法があれば・・・(学生が好きで教育が好きでたまらないという人しか無理ですかね。)
- ・学生を講義の主役にしたいと思いつつ、失敗をくり返していました。様々な成功例を見ることができ参考になった。できれば、過去の失敗例と解決のためのbreakthroughの話があると更に参考になります。
- ・学生主体型授業に関して貴重な体験を聞くことができた。特に杉原先生の実際の体験を通じた話は大変参考になりました。

- ・教員と学生との関係作りの重要性
- ・ピアレビューの参考書
- ・学生主体型授業における教員の役割
- ・学生主体に対する成果の着地点が様々であることが理解できた。
- ・バックアップという流れが大切であることを考える必要を感じた。
- ・初年次教育の体系策定に大いに参考になった。
- ・留学生との混合教育等にも活用できるのではないか。
- ・「学生主体型授業の冒険」の執筆者の生のプレゼンテーションが聞けた。
- ・学生のやる気を引き出す、理解を深める、自立成長力を高めるための弛みない努力、先生方の努力が学生に伝わっているのだと思いました。
- ・学生の潜在的な力を信じつつ、伸ばすという共通の理念を感じました。
- ・大きく、大胆に構える教員の許容の広さ、専門性の確率、知識、知的能力の必要性を感じさせてもらいました。
- ・学生へのフィードバックが半端ではなく、パワーを感じました。
- ・「学生主体型」とは・・・が理解できたように思いました。最後の橋本先生の3つのメッセージは、いつも心がけている言葉で確信致しました。「安心感」「存在感」「信頼感」
- ・教育には教師側の哲学があり、ある種、その考えが異なる上司とはやりにくさを感じている。奇しくも橋本先生は各自には潜在的な意識があるとおっしゃった。それを応用して、教員には潜在的に良い教育をしたいという意欲があるのだと信じていきたい。めざすゴールは一緒だがその手段が異なるのであり、私は私で効果を上げていきたいと思った。人こそ財産であり、教育の役割、可能性を自問自答していきたい。
- ・質問を回収 回答する機会がシンポジウム内にあった事。
- ・意欲・主体性が本学でも課題です。勇気をいただきました。
- ・普段の講義・演習を組んでいく中でのモヤモヤした部分が、とてもすっきりとしました。今の私のやり方が、決して全く方向性の違うことでもないこともわかり、勇気づけられた部分もありました。このようなシンポジウムに今回初めて出席しましたが、またの機会にも是非参加したいと思います。
- ・「蛙学への招待」「橋本メソッド」「シャトルカード」を実践、応用していきたいと思います。ありがとうございました。
- ・現在取り組んでいる授業改善に多くの良い示唆をいただきました。少しずつでも取り入れて授業改善に活かしていきたいと思います。今後ともご案内お願いいたします。「学生をほめて自信をつけさせる」が一番印象に残りました。
- ・丁度、主体型授業を実践しているところで、迷いや戸惑いや、介入の是非など、いつも思い悩んで進めている。そのこと自体が、杉原先生の話からも共有できた。又、様々な方の取組を聞くことができ、主体型授業への改善に意欲を持って進めたいと考えることができた。
- ・学習のパラダイム変化に対応する新しい方向性の情報を多く得られたこと。
- ・各大学事例共通して学生の主体性をどうとらえていこうかをうまく考えていた。

・短期大学の教員なので、初年次教育についての内容だったのでたいへん参考になりました。

・キャリアデザインを目指して就業力育成事業を始めたところでしたので、新設した様々な科目の授業に、戦力として取り入れたいと思います。特に杉原先生の発表が参考になり、本学でも何か「元氣プロジェクト」のようなコンペをしたいと思いました。

・各先生方の実践について具体的に学べた点、所属大学に持ち帰りぜひ活用させていただきます。貴重なお時間を頂戴したと思います。ありがとうございました。

・先端学習ラボについて：新規事業を進めるにあたって、ハード面をどうするか、課題となるところだと思いますが、教員・職員が一丸となって取り組むことで先端学習ラボを確保した点を見習いたいと思った。この度は大変貴重な講演をどうもありがとうございました。

・Practicalだった。

・学生主体型授業の実践例が知れて良かったです。

・教育というのは、積み重ねなんだと改めて実感しました。自分にできるところから、FDに取り組んで行かなくてはと思いました。

・とても参考になる内容であったが、それぞれもう少しじっくり深く聞きたかった。みなさんが学生にとって良い授業になる為の努力されていることに感心した。

・授業の実際を紹介しただけだったので、大変参考になりました。

・学生の質の変化を指摘されていて、それに伴う教授達の変更(改善)努力が共通しているのかな、と受け取った。つまり学生の主体性を引き出す新たなポイントは何かだったのか、むしろ、総括的にまとめるべきか？(多様なでしょう)「冒険」「自由」の言葉に込められた小田先生のメッセージに同感しました。

・「生命を考える」の授業風景DVDを拝見し、イメージがつかめました。

・学生主体型授業で得られるものは、特定の授業だけではなく、大学での学び全体に必要な「学び力」のように思われました。

・杉原先生の「教員がどこまで、どう介入するか」を悩みながら授業をされているとお話が印象に残りました。

・テーマの選択

・専門性の高い授業への応用は可能か？

・ピアサポートに大きな時間をさかれている点

・教育の可能性が大きくひろがった点

・10年のFDの歩みを知ることができた。

・学生主体型授業は、大学教育“あたり前のことができていることが特色であること”を再確認しつつ、FD活動に取り組みたい。

・取組発表を聞いて良かった。自分が実践していることを、より充実整理していく上で、諸先生方の内容は参考になった。歴史を教えている教員として、具体的な事例はなかったものの、学生主体型授業をどのように取り入れることができるか考える機会を与えてもらったし、来年度の実践についても少しアイデアが出てきたので収穫だった。パネルディスカッションで質問に答える形をとったことでかなり補足ができた点は良かったと思う。

・主体型授業の技術的方法論が聞けたのはよかった。

・パネルディスカッションにおける各先生方の本質的な発言がとても心に響きました。

・赤ペンについての意見が聞けた事。

・質問シートを提出した点。

・学生主体型授業に特化した点。

・4時間があっという間でした。内容がそれぞれ充実していました。

・確認納得出来たことが多かった。

・本学の教員に聞かせたい授業改善のヒントがたくさんあった。授業を通じて健全な市民生活を送らせるのも大学の使命であると建学の理念にうたっているながらそれを実践していないことを反省した。

・私立の地方大学はまた少し違う状況がありますが、大変参考になりました。ありがとうございました。

・モヤモヤとしたイメージであったものが、具体的な案として浮かび上がったことに喜びを感じました。すごく基本的な取組がやはり効果的なのだと思い知らされました。

・大変刺激的なお話が多く、ためになりました。また今後とも有益な企画を期待しております。ありがとうございました。

・今の私達学生に何が不足しているのか、また教員は何を必要・要求しているのかを学ぶことができました。

・教員の気持ちを学生として読み取り、積極的に授業に参加できる学校作りをしたいと思います。

・前回、先輩が参加し、私たちの大学の授業形式が、学生自ら進んで学習するようになり、このシンポジウムの成果が反映されていると思いました。また、教員の悩みを少しでも減らすことができるように、授業をよく聴き、積極的に意見を言ってみようと思いました。

・どのパネリストも個性的で、それぞれの方のキーワードを反芻し、自分自身の授業及びFDの中でどう生かされるべきか考えた。

・学生をつまずき、教員をつまずきについて参考になりました。

・私は今まで自分の授業内容について、学生が主体的になるような工夫をしてきた。今回のシンポジウムでは、それよりもむしろ、そういった新しい科目を創出するという試みがあることを知って、非常に参考になった。

・橋本先生のご講演を聞いて、このシンポジウム目的とする「学生主体型授業」の目的を得た気持ちになりました。

・アクティブラーニング＝学生主体型ではないと思っていますし、橋本先生のような教育観(いくら方法論を人から真似てもうまくいかない…つまり教育観こそが核だと思っています)こそが、まずこの学生主体型授業を成立させるものだと思います。“教える人”“教えられる人”を明確にしてしまうTeacher-centeredからLearnig-centeredを意識することが大切だと再確認しました。これからも橋本先生の本を読ませていただきます。

・授業だけに留まらない内容であった。大変参考になりました。

(6)良くなかったと思う点・次回以降改善すべきと思う点

・資格取得のための科目を担当しており(社会科学系)、決められたテキストを全て教える必要があり、自由度が少なく、かつ、意欲も学力も少ない学生相手です。(国立ではありえないことかもしれませんが)そういう中での工夫の余地を聞きたかったです。

・都内で開催していただけるのは、とても助かります。山形大学高等教育研究企画センター関係者の方々にはご足労いただくことになり、いろいろと大変でしょうが、次回以降も開催していただけると嬉しいです。

・山形大学は東北地方では超有名大学であり、やはり真面目な学生が非常に多いと感じる。そのような「良い」学生達相手のFD・学習意欲を駆り立てる手段は、これはこれで参考になったが、より「悪い」底辺大学の学生たちへの学習意欲を高めるにはどうすればいいのか、こういった底辺大学向けのFDのあり方を知りたい。鈴木先生のお話はこのあたりのヒントになりそうな気がしたが、いかんせん時間が短かった。もう少し体系的にこの問題についてのシンポジウムをみてみたい。

・教員に対して、どのように教育するかについての方法があれば教えて欲しい。

・GP例を挙げる場なのか、新たなGPを生み出す場なのか？2つがMIXされていると思うが、時代はすでにGPをあげる場はもててないかもしれない。(本などで入手できるので)

・比較的自由度の高い授業の事例が殆どで、知識授業型の授業への導入例もあつた方が応用のイメージが持ちやすいかと思った。

・FDの取組を構築していく立場なので、職員として、どういった事をやってるかという点も他大学の皆さんに伺ってみたかったです。

・「授業評価アンケート」は行っている学校は多いと思うので、その他の取組にも興味があります。(大学としての取組・職員の係わり)

・国立大学で良くやっているのは当たり前のように思われる。専門のFDがない私立での取組を知りたい。

・盛り込みすぎ感があり、テーマを絞って、ワークショップ形式も実施してほしい。

・見やすく考慮したと思われるダブルスクリーンが、逆に理解の妨げになっていたのが残念。インフォグラフィックス的視点ですと、1つにするべき。

・ラストのセッション(スピーカー全員)がもっと直接的に絡む討論になると尚良い。結局、全員に独自のメソッドがあるとは思うのだが、もっとダイレクトな意見交換に期待していたので、やや残念。

・席がせまかったことぐらいです。

・主役となる学生の生の声が聞けると嬉しいです。

・うまくいかなかった話を聞いてみたかった。

・それで達成して良いのか疑問を感じた意見もあった。

・私立大学のパネラーがいてもよいのでは

・グループディスカッションの時間が不足が残念。

・内容が濃いですし、1日分の研修としてはどうでしょう

・資料が配付しておりましたが、一部資料にないパワーポイントがありました。大変重要な情報が短時間で盛りこまれたお話でしたので、その辺が少し残念でした。

・利用しやすい会場でしたが、もう少し広い場所だと良かったかもしれません。

・(特にありません)ただ、質問を複数できなかった事が残念です。

・いくつかの講演ではあるが、話をされた内容は配付資料にしたいだけだ。今後の参考にするには、省略されると困る。シンポジウム全てをDVDにして配布して下さればありがたいです。

・理工系学部の基礎科目での実践をもっと聞きたいです。

・会場が手狭に感じた。

・会場が狭かったです。先着順100名と知り焦りました。これだけ豊かな内容をもっと多くの方々に聞いて欲しいと思いました。

・学生からの生の声を聞きたいと思った。

・私の理解度不足だったと思うが、FDといった時に、教員間の高め合いだと思ったが、中心は学生主体のことだった。他の教員をどのように巻き込んでいるかをもう少し知りたかったです。

・時間設定。(特に取組発表は時間が足りないと思う。)

・取組発表の時間をもっと長くして欲しい。

・聴衆側にもグループワークの機会を与えて下さい。

・「冒険」ということで、まだ確立した方法ではないということであったと思うが、もう少し具体的方法を網羅的に聞いてみたかった。

・取組発表の先生方は短かった。もう少し詳しい話を聞きたかった。

・参加者名簿があるとありがたいです。

・専門科目を学生主体型でやりたいと考えてますが…

・興味を引きつける内容だったので、より踏み込んだ内容を伺いたいと思いました。基本的事例を踏まえて。

・フロアからの質問の時間(確認含め)を、もう少し取っても良かったのではないのでしょうか？

・やはり、何が変わったのか、よくなったのか、定性的・定量的に説明していただくと、われわれの参考にもなると思います。

・企画のお願いとして、このような学生主体型授業を教員個人のレベルではなく、大学の組織として実践していけるような制度なり、実践している大学の事例の詳細の紹介をもっとしていただくと助かります。全国の大学の中で組織的に取り組んでいる大学例はどのくらいあるのでしょうか。

6. 諮問委員会

平成22年12月19日(土)、キャンパス・イノベーションセンター東京において、「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」の諮問委員会が開催された。

冒頭に、山形大学高等教育研究企画センター長の渡邊洋一から挨拶があった。

その後、平成22年度の活動報告について、山形大学高等教育研究企画センターの小田隆治教授より報告があった。

次いで、諮問委員による外部評価が行われた。

出席者

諮問委員

新潟大学 理事	絹川正吉
立命館大学 教育開発推進機構 教授	木野 茂
岡山大学 教育開発センター 教授	橋本 勝
島根大学 教育開発センター 准教授	山田剛史

山形大学

高等教育研究企画センター長	渡邊洋一
高等教育研究企画センター 教授	小田隆治
理学部 教授	栗山恭直
高等教育研究企画センター 准教授	杉原真晃
高等教育研究企画センター 助教	酒井俊典



記録

小田 それでは時間よりも10分早いですけれども、全員時間どおりに来ていただき、揃いましたので諮問委員会を始めたいと思います。

開会に先立ちまして、山形大学高等教育研究企画センターの渡邊洋一センター長からあいさつをお願いします。

渡邊 おはようございます。先生方には、いつも山形大学のプロジェクトに御理解と御協力を賜り、大変ありがとうございます。本日は、また年末のお忙しいところ、22年度の活動報告について私どもの方から御報告して、それに御意見を頂戴したいということで、どうぞよろしくお願ひいたします。

小田 では、活動報告を私の方からということで、まず配付資料を点検したいと思います。

配付資料としまして、資料1に委員名簿があります。毎年お世話になっている林先生ですけれども、体調を崩されているようで、本日は参加できないということです。次に資料2として、プロジェクトチームの名簿があります。次に資料3としまして、本年度の実施報告書をつけております。後ほど、この報告書に沿ってお話したいと思います。次に参考資料としまして、分厚い研究報告書があります。それから、学習手帳版冊子「Schedule Note for Learning」があります。それから、学生主体型授業開発共有化FDプロジェクトのパンフレット。それから参考資料4としまして、コンテストのパンフレット。次に参考資料5としまして、基盤教育ワークショップのチラシがあります。

それから、リパブルで行われたISSOTL2010の国際カンファレンスにおいてポスター発表いたしましたけども、そのポスターの縮小版が入っています。そして、最後になりましたけども、本日の午後から行うFDシンポジウムのチラシが入っております。

それでは早速ですが、学習手帳版冊子の説明を担当の杉原の方から、説明いたします。

杉原 この緑の冊子ですが、学生主体型の授業ということで、主体的学習を進めるためにいろんなレポートを書くコツだとか、情報収集のコツだとか、あるいは意識の持ち方とか、そういったものを編集した冊子、所謂、初年次教育のスタディスキルズのような冊子というのは学内に既にありまして、それと並行して使ってもらう。そういう冊子は学生が日常的に何処かにやっちゃう場合があるんですね。そういう冊子を配っても、何処かに行っちゃって、何処行ったのか忘れたというようなことになってしまうので、学生に携帯してもらって、そういう形のをちょっと考えた場合にこういうスケジュールノート、スケジュールの機能を搭載することで、彼らが日常的にこれに目を通して、意識を高めてくれるのではないかとということで作成した次第です。昨年2010年度版をつくりました。今年が二回目です。ちらっと見ていただきましたら、普通のスケジュール帳の下に、いろんな学習のノウハウだとか、あるいは学習意欲を高めるような名言集のようなものを書いてます。

それと、後ろの方をずっとめくっていただくと、学内の学習に役立つ施設ですね。後ろの方に学内キャンパス施設案内ということで、いろんなセンターの場所、図書館の場所、或いは山形市内、こちら側メインキャンパスの周辺の文化施設等の紹介ということも、山形市内地図ということで紹介して、QRコードでこれを見れば携帯で情報が見れるようにしております。この手帳は、学生に配付してありまして、携帯する学生も多くて非常に役立っています。学内の先生方にも配付してあります。先生方も御利用なさっていらっしゃる先生がちょくちょく見受けられまして、非常に好評を得ています。

絹川 学年暦は入っていないのですか。

杉原 そうですね。学年暦に関しましては、

絹川 これ学年暦入らないとね。基本ですから勿体ないですね。

杉原 そうですね。実は、学年暦を入れようと思っていたんですけども、印刷する時期に未だ決まってないという状況になってしまっているんです。本当ぎりぎりに毎年決まるもので、間違った日程を載せることもできないので、諦めてしまったのですが。

絹川 コメント随分大変でしたですね、これは。

小田 昨年のがですね、オレンジ色で蛍光色の強いピンク色みたいな感じなんです。それで教員も結構持っているんですね。びっくりして、教員が教授会で開いていたりして、持っていてですね。小田さん、来年は色を何とか変えてくれないかと、シックな色でという形で、今年この色にしました。絹川先生の御指摘のように学年暦、恐らく大学によってきちんと決まる場所がありますよね。カレンダーにも同窓会が発行している、つい最近行った私立の大学さんでも、カレンダーの中にごく詳しく学校の年中の行事が書かれている。それが、大学の読むものとして良いのだろうなということも思っていて、だけれども決まらないということも、うちの大学の事情としてある。

木野 だけど、そういうときは後で挟み込めるようなものをつくるのがいいんじゃないですか。

小田 そうですね。では、資料3に沿って今年度の事業を中心に御報告いたしたいと思います。

今年が最終年度で、昨年の諮問委員会はこれまで2月に開いていたんですけども、今年は随分早いと思いますけども、今回のシンポジウムにかけて、実施したいと思っていました。ですから、本日シンポジウムの結果を受けての方が一番良いとは思いますが、御容赦ください。

本事業の目的は、先生方も御存じのように、これは本学の全学共通教育である教養教育において、基盤教育という名前に今年度から変えましたが、汎用性が高い学生主体型授業を開発し、それを担当教員が共有化し、個々の教員が自身の専門性と個性に照らし合わせて改良を加えて、質の高い学生主体型授業を実施することによって、学生の社会人基礎力を育成することにあり、これらを通じて、本学の教育目的である実社会で活躍できる知的・人間的資質を備えた人材育成機能の強化を図ることです。

そうしたときに、今年度としては、初年次の全学生を対象とした学生主体型授業を広く全学的に展開し、改善を加えながら質の高い学生主体型授業を展開する。また、改善の

ために「ミニ公開授業と検討会」を実施する。加えて、困っている授業担当者や個別のニーズについては、「個別支援型FD」や各授業に高学年のSA(スチューデント・アシスタント)を配置し、支援することにしております。事業計画は、以下に書いてるとおりでございます。

また、本GPの申請書がありますけども、その裏に取組の概要というのがあります。これが元々の事業計画ですけども、概要の一番最後の2行ですけども、本取組で得られた成果は、東日本地域の35大学等間連携「FDネットワーク“つばさ”」、現在46大学、来年の4月から47大学になることになっておりますけども、全国規模のシンポジウムの開催等を通して全国に情報を発信し、共有化を図っていくという形で、本日のシンポジウムがこれに対応することになっております。

では、元に戻りまして資料3をご覧ください。3.事業報告ですけれども、前・後期に学生主体型授業の開講ということで、主な授業科目としまして、教養セミナーとしてこういう科目、私の授業を筆頭に、科目名と担当教員と学生数が書いてあります。そして、教養セミナーが21科目開講され、学際、地域学が6つ開かれております。ここに学際、地域学の下から二つ目の「フィールドワーク - 共生の森もがみ(地域学)」となっていますけども、これは134名という多人数になっており、地域に出かけまして、「エリアキャンパスもがみ」というところに出かけまして、基本的には10人単位の授業になっております。現地体験宿泊型の授業になっておりますので、一見多そうに見えますけども、少人数で行っている授業です。

また、今年から基盤教育になりまして、基盤教育全体のカリキュラムが変わりまして、この枠外に書いてあります。その他に、全学部生を対象としたスタートアップセミナー、必修になる科目が今年からできました。ところどころ違う少人数ではないところもあるんですけども、実際は、その54コマもあります。これらを合わせて、計81コマが今年開講され、後期で今現在やっている授業であります。様々な形で展開されているという形です。

2番目として、ミニ公開授業と検討会は、このようなベストティーチャーの授業が展開されております。また、ベストティーチャーではない人の授業もこの中に入っています。

3番目として、プロジェクトチームによる学生主体型授業の全学的実践の支援ということで、学生を配置しまして、授業を色々展開しております。スチューデント・アシスタント。

4番目、全国の優れた学生主体型授業の調査として、立命館大学さんを初めとして、様々な大学、学会に調査に行き研鑽を深めているということでございます。

次のページをご覧ください。先端学習ラボの充実ということで、今迄のように液晶プロジェクターとか電子黒板、クリッカー、コラボノート等を配置しましたが、今年は授業収録システムを取り入れまして、すごく簡単にパワーポイントと授業が同時記録できるようになり、いろんな形で授業改善に役立てていこうと思っております。

この先端学習ラボに関しましては、初年度に完成したばかりのときに言いましたけども、このパンフレットを開いてい

ただければ、こういうところでこういう感じですね、いろんな形で利用されております。また、全国からこの先端学習ラボの調査にこられるということもあります。本学の学生も、この写真を見ると山形大学の教室とは思えない、このようなところで授業をしたかったと言っております。

そのように、学生にもすごく魅力的で、現在、この教室のプロモーションビデオもつくっております。マニュアルの配布だけでは、まず使おうという気が起こらないので、プロモーションビデオをつくって全学にこの教室の利用を促そうとしています。実際に使われてる先生もいらっちゃって、色々と機器に苦手な方はトラブルも起こされていますけども、事務方を中心に、若手の教員と一緒に支援して、いろんな新しいことのチャレンジも行っております。



次にいきます。6番目、全学生のための冊子の作成、参考資料2、先程の手帳を配付しております。7番目、広報パンフレットの作成がこれです。すごい数が全国でいろんなところに出回って、かなり広報してきたと思っております。

次に、課題発表コンテストの開催ということで、今年の実業の中心の一つですけども、前期のコンテストでは、7月30日にいろんな授業で学生に発表してもらいました。これは、一番初めの申請書に書きましたように、最終的に学生が社会人基礎力とか、人間力を培ったかどうかというものを我々内部のものだけの判定ではなく、やっぱり企業の人とか高校の先生に見ていただき、本当に育っているのかどうかを見てもらおうじゃないかという形での、この課題発表コンテストの開催です。学生発表は、各10分行い、5分の質疑応答をしました。

審査員としましては、高校の先生お二人、また非営利団体の方とか、あと内田洋行の支店長、また県内の藤庄印刷、またエリアキャンパスの佐藤製館所さん、それから学内からはこういうメンバーが加わりました。人事課長にも入っていただきました。

コンテストは、すごく盛況のもとに、学生も非常に喜んで終わることができました。また、高校の先生、企業の方からも、学生がいろんなことを考えてることに高い評価をしていただきました。始めはと言いますか、やっぱり我々教員と違って辛らつな質問もあるんですね、学生に対して。そうしたときにでも、学生が答える姿からやっぱりすごく高い評価がされて、また高校の先生、この新庄北高校の先生からは、ちょうどこの発表会に来ていたのが自分のところの卒業生だったんですね。おお、お前立派になったじゃないかと。そ

して、私が勧めただろう、山形大学をと、私が勧めたとおりにやっぱり良かったらうと言うわけですよ。良かったですよとか言って、もう本当にできレースではないかと思うような、何か進路指導の先生にとっても良かったし、発表した学生にも良かったみたいです。中々面白い光景が展開されました。

次をご覧ください。学生による授業改善アンケートの実施については、毎年実施しておりますので、このような形になっています。基盤教育全体の総合評価が4.22、5段階評価で非常に高い評価を得ています。満足度が高いということですね。今年、基盤教育に変えて、いろんな形でカリキュラムを編成し直しましたので、どういう影響が出るかというのは不安だったんですけども、例年のように高い評価を得ているという形でした。

FD合宿セミナーは、例年通り行いまして、学外から44人も参加されて、1泊2日を2回開催しました。次の11番目、FDワークショップの開催は、基調講演を神戸大学の川嶋先生にやっていただきました。午後からは、分科会を3つ設定しました。基盤教育における科学教育は、コーディネーターとして栗山がやり、パネリストとして筑波大学の小笠原先生にお願いしました。後は、昨年度のこのワークショップの分科会は学外の人をいっぱい呼んだのですが、今年は学内中心でやろうということで、第2分科会は基盤教育から導入しましたスタートアップセミナーの成果と課題という形で行いました。第3分科会は、学生主体型授業の冒険ということで我々が行いました。このように盛況のもとに終わりました。

次のページをご覧ください。12番目、学生による授業改善アンケートですけども、公開してすぐに教員からフィードバックしてもらっています。ずっと毎年それぞれのアンケートでやっていますけれども、この教員による授業改善アンケートの実施で、その中から一文だけ抜きますと、学生の授業アンケートは授業改善の参考になりましたかというところで、大変参考になる、少しは参考になるという形のものほとんどです。こういう形で山形大学ではずっと、もう11年ぐらい続けていますけれども、迎えられているという形でございます。

あとは13番目、海外の先進授業の調査ということで、今年の9月にシンガポールに行きまして、シンガポール国立大学と南洋理工大学に行きまして、向こうの方々といろいろ話をさせていただいて、授業も見せていただきました。シンガポール国立大学では、日本の大学、高等教育についてすごい興味があって、逆にずっと聞かれ続けたという部分はあります。こっちが聞きたいのに、向こうの人からですね。そしてもう一つは、南洋理工大学の方では、すごく詳しいFDの説明をしていただきまして、ここで感じたところは、やっぱりFDは学内ではただけでも、海外からも先生たちが聞くようなプログラムをきちんとしっかり立てて、実際に数は少ないんですけども聞きに来られるところがある。恐らく日本としても、そういうところをしっかりと考えなくちゃいけないんじゃないかなと思いました。

余談になりますけども、シンガポールに行きますと、あそこ南シナ海を挟んでシンガポール、フィリピン、そしてこちらか

ら上海からベトナム、ずっとASEANを貫いてる。やっぱりそこから辺りでは、彼らは完全にアジアの時代だという形で認識している。そこには、日本の風景は薄くなっているというところが強く向こうの人たちも言っていました。そういったところで、日本の高等教育も頑張っって発信力を持っていきたいなと個人的には思いました。

次に14番目、本大学の海外での学会での成果発表としては、ISSOTL10、イギリスのリバプールでポスターセッションをしてまいりました。杉原さんを中心にこちらの紙、ポスターセッションをご覧ください。こっち側のタイトルですね、杉原さんを中心として杉原さんと私で山形大学2人、あとこれを作成しました。あっと驚くNG集です。大学授業NG集の発表をしてきたんです。そして、本日午後に見える静岡大学の佐藤龍子先生、その3名で行って発表してきました。あとは田実先生と大島先生でやったんですけども、実際にDVDビデオを持っていきましてやりますと、もう見に来てる人たちは床に座って大笑いをしている。これはやっぱり世界的に共通なんだなということを思いました。DVDの「あっと驚く授業NG集」が、世界的に共有のもので、評価としてもこれは素晴らしいアイデアだと、素晴らしい教材だという評価をいただきました。すごくずっと見続けられていて、そこで我々としても、インターナショナルに通じるものだなということで自信を持ったところでございます。

次に元に戻っていただきまして、全国規模のシンポジウム、本日のシンポジウムを行います。参加人数が113人になっていて、会場の収容力が100人ちょっとなんです。11月で定員を満したしたので、12月からもう断ってる段階です。色々他大学から参加させてほしいという要望がありますけども、すごく人気で早くから断って申しわけないなという感じあります。当日に急遽いらっしゃった方、できるだけ受け付けたいなと思っておりますけども、いっぱいになりますので少し環境が悪いと思えますけども、先生方、御容赦ください。本当にもう少し広い会場でやったほうが良かったなと思っております。

広報活動としましては、本日のシンポジウムが一番のメインですけども、実際には、GPの全国のフォーラムでビッグサイトでやられたもの、今年の1月でやられたもので、私が一番大きいホールでスピーカーとして呼ばれて話をしたこともありますし、いろんな大学とか、学会等で話してるものもあります。また、ナカニシヤ出版から今年の夏にこちらにいらっしゃる木野先生、橋本先生の御協力を得まして、「学生主体型授業の冒険」という本を出させていただきました。そういう形でも発信力を高めて、これからも持続的にぶつんと切れることなく展開をしていきたいと思っています。

簡単ですけども、以上で私の方からの報告でございます。あと1時間15分ぐらいあるので、後は自由な質疑応答という形でいきたいと思えますけども、まず質問ございましたら。

木野 教養セミナーというのは大分前からやってるんですよね。

小田 そうです。

木野 本学でもやっているんですけども、必ずしもこれは人数というのはバラバラで。これ1ヶ所だけじゃなくて全部ですね。

小田 はい。



木野 うちの中ではやっぱり人数を、ある程度上限を決めないとやれないだろうなというようなことで25か35ぐらいの間で上限を決めたいと思うんですけど、先生どういうふうにするんですか。セミナー。

小田 はい。私自体のこの51というものは、コマ数に二つを足してるんですよ。

木野 そういう意味ですか。

小田 はい。ですから、実際には30と20ぐらいなんです。そういう人数で思ってください。しかし、先生の御指摘のように教養セミナーというものの定義は、平成8年の大綱化の時の定義から踏襲していると思えますけども、少人数の特性を生かす授業だということぐらいの定義なんですね。そこにおいて人数制限は30名を目処にと言われるんです。という形で書かれています。ですから、少人数教育なんていうものは20名以下だよという定義は、恐らく日本から流布していると思えますけども、30名は多すぎるよと言われましたけども、30名を超しても、その先生の裁量でという形で、すごく緩い形になっていると思います。

確かに授業のセンス、これは先生の資質によるだろうし、授業科目によっては教養セミナーといっても大人数でできるものもあるし、またそのダイナミズムを楽しんでいるという一義もありますから、そこから辺りは先生の裁量で定員を切っている授業もありますし、割と多目にとっている人たちもいるという感じです。

木野 どっちかという下限のほうを気にしている。

小田 下限を、そうなんです。下限がそうなんです。

木野 5人とかいうふうなのを切った場合は、閉講にするというのを承知してるんですが。

小田 そうなんです。そこにつきましては、どういう形で初め把握したかと言ったら、恐らく平成8年からその問題はありました。はっきり言って教養セミナーで、他の授業もあるんですね。結局、大綱化になりまして、教養のかなり自由市場が出てきたときに、一番始めにわかったのは授業アンケートをやりますと人数がわかってきたんです。一番の授業の評価じゃなくて、授業の実態がわかってきた。

木野 実際の出席率ですか。

小田 はい。これ、実際に50人履修してるのに最後残ったの10人しかいないじゃないかとか、数人しかいない授業、あとゼロというものも、それ以前からちょっと調査もしてフォローしているんですけども、そこら辺りは本当は問題なんだろうけども、やっぱり国立は人的なリソースが大きくて、小さな授業をやっていたって賄いきれるといいますかね、だと思えます。私学さんとちょっと違うところは、そこら辺りは、他のところにしわ寄せがくるような矛盾というのは露呈しないといえますかね。教員1人当たり14人ぐらいの学生数ですから、私学さんと全然違いますね。倍以上の、そういうところではあれですけども、やっぱり授業をある部分の精選というところも、それもあると思います。



絹川 これはあれですか、この教育推進プログラムですか。その報告なんですね。

小田 はい。

絹川 全学的なものじゃないわけですね。

小田 いや、全学に展開しようとしていますから。

絹川 教養セミナーというのはお名前を拝見すると、センターの先生方が中心で開講されていますね。

小田 はい、そうです。

絹川 そうすると、一般の先生方はこういうプログラムに対してどういうふうに参加なさっているんですか。

小田 これは昨年までですと教養セミナーだけであって、

下のスタートアップセミナーというものが。

絹川 スタートアップセミナーというものは、これは全学的なんですか。

小田 そうです。

絹川 これは学生さん、1年生。

小田 1年生です。

絹川 必修ですか。

小田 必修になりました。ですから、最近になって展開、昨年まではこういう少人数の授業は教養セミナーしかなかったんですね。ですから、大きくこの申請書を出した時点とは様相を異にってしまったというかですね。昨年このこの諮問委員会でもお話したんですけども。

絹川 スタートアップセミナーは全学的ですから、これに関してのこの授業運営に関するFDだとか、そういうふうなことについての御報告のほうが大変なような気がするんですけども。

小田 ここは正直にいくと、我々と違う形でFDの展開をやられています。スタートアップセミナーが新しく始まるので、実際に先ずはテキストが作られました、こういうスタートアップセミナー。

絹川 スタートアップセミナーというのは、その責任部署というのはいくなんですか。

小田 これは基盤教育。

絹川 センターとは別なわけですね。

小田 別です。

渡邊 基盤教育院という、昔の教養に相当するような全学の基礎教育をする部門が昨年の秋からスタートしたんですね。ですから、このプログラムとちょっとずれて始まったところなんですけど、今年からやっと始まったものですから、まだ見直しというか評価というのが始まった、来年から評価をしてということになるかとは思いますが。

絹川 きょうの御報告は推進プログラムの方についての事業の御報告ですから、なんですけれども、一般的に考えると、そういうこの全学的なセミナーとね、センターの活動というのはコラボレーションがあるといいですね。

渡邊 そうです、連携して。当然、ただ先生方は皆さん、

この活動には参加する、全学のFDなんかには参加してきますので、当然チェックが行き渡っているというか、発想の仕方は、ここは、たまたま学生主体型というところだけでピックアップさせていただいたので、そうではない少人数もありますし、段々繋がっていくのではないかと思います、今のところは並行して、少しずつスタートしたところなんです。

橋本 逆にいうと、いわば守備範囲である上の教養セミナー、これはセンターのほうで調整が可能というふう、そういう前提になりますけど、その点から言ったときに先ほど木野先生が言われた上限、下限の問題等で、ある程度柔軟性を持たせて常に見直しが必要ではないかという気がします。つまり、極端に人数が少ないという授業については次年度合併するとか、あるいは多いのは2コマ、3コマという形に逆に増やすとか、そういう意味での融通というのは、ある程度全学が範囲でないだけに調整はしやすいのかなという感じはしますが、その辺は何か具体的に見直し作業とか、そういうことはされたんですか。

小田 このコマ数というものが、教養セミナーは基本的には何コマ出さなくちゃいけないというのではないんですね。ですから、コマ数の調整とかそういうものは教養セミナーに限らず、他の授業についても最低ここまで出さないと学生対象に1年間のカリキュラムが組めないというのがありますけども、それにプラスに関しては、山形大学としては他の講義科目でも上限というのはありません。ですから、ボランティアとして、自分が授業したいという人たちに対して締めつけというものはないんですね。



橋本 逆に私が気になるのは、先ほども1回話題に出ていますけど人数少ない方で、学生主体型といったときに人数が少なければ少ないほど主体的になれるかという、そうでもないというのがありますよね。

小田 はい、あります。

橋本 そういう前提に立ったときに、それこそこの科目は次年度どうするかというようなところをやはり常に見直しが必要ではないかという気がするんですが、それは単に少ないから即合併だという話ではなくて、少ないのをどうやって

増やすとかかですね、そういう努力も含めて、何か見直しの作業というものが恐らく必要ではないかなという感じはします。

小田 おっしゃられるところ、その通りだと思います。その基盤として、例えば人数の多さ、少なさはまだ山形大学リソースがありますから、少ない授業でどういうことをやっているんだということが問題だと思うんですね。やっぱり自分はもう1回少人数でやりたいのかどうなのか、仕方なくなったのか。仕方なくなったとしたって、始めは仕方なくであっても、それをどのように展開できるか、そういうことが問われているんだらうと思っています。杓子定規に、多い少ないということだけではなくて、そのやってる内容と言いますか、そこら辺りを我々が組織的に捉えていって、フィードバックしてることが大事なんだろうなというのが橋本先生の意見かなと思います。

山田 今どちらかというところの開講の1番のところに議論が集まっているんですけど、そこに絡めてなんですけど、やっぱり全体のカリキュラムの中でのスタートアップセミナーの位置付けと、そこと教養セミナーの位置付けがちょっと見えにくいところがあるんですけど、関連して教養セミナーというものをどうマネジメントしてるのかということと、例えばそのマネジメントの仕方の一つには、シラバスというものを例えばこの教養セミナーではどういう形で統一化したりとか、それを例えばカリキュラムチェックリストみたいなもので何かマネジメントするツールを使ってFDをやったりとか、そういう例えば受講生の問題とかをどこで誰がどういうふう調整してるのかとかですね、全学生さんの内のこの教養セミナーをとった学生さんがどれぐらいの割合にいるのかとかですね。その辺りの全体の構造の中でのこの教養セミナー、必修なのか、選択必修なのか、自由選択なのかとかですね、その辺りちょっともう少し補足説明いただければと思います。

小田 教養セミナーについては自由選択です。スタートアップセミナーはこれ必修に、今年の前期からなりました。基本的に、学部学科の中で割られて、学部によっても様相が全然違います、正直ですね、これから変わっていく。

絹川 全学的な共通理解というのは、

小田 スタートアップセミナーはあります。それは紙に書かれて、理解しているかどうかは別ですよ。理解しているかどうかは別として、それは大学の実態であって、ですけどもスタートアップセミナーは、まさにはっきり言えば大学への適応です。ですから、この中によくあるような形で、図書館とか、それとかライティングとかそういうところが入っている、よくあるような形でのものです。

木野 スキル。

小田 スキルですよ。高大接続的なもの、大学適応的なものはこのスタートアップセミナーです。ですから、前期にかけて開かれる。これ必修ですから、前期に落としたり退学になるだろうということで、後期にも補講されることになりました。今現在しております。こういうところで、スタートアップセミナーと能動性を引き出すところでは違っている、棲み分け。あくまでも、これは今でも違っているはずなんです。これは別の路線から立ち上がったと思います、学内的には。立ち上がったために整合性がとれてないけれども、結果としてはそのような形で、今でも違っているんだろうと思ってます、明らかに。

山田 その違いをうまく生かして、もう一回再構成している。

小田 というのはあると思いますよ。あると思いますし、そして、やっぱり学生の主体型というものが、別にスキルとかそういうものだけじゃなくて、専門分野の中のいろんな形で、授業であったり、中でモジュールにやるのも踏み込むとかですね、いろんなところの話がこっち側にあるんであって、それはどういう展開していくかなというところは、また問われているんだろうとは思っております。

山田 例えば、履修年次を絞ったりとか、その中である程度体系化したりということは、特に。

小田 ないですね。ですから、恐らく僕は全学はどうか知りません。しかし、問い詰めていくと山田先生が言うように、体系化とかですね、なっていくだろうと、しかし、それが少なくとも山形大学の方式に、学生に合っているのかと言ったら、そしてリソースやら合っているかと言ったら、私はそうもあんまり思わないんですよ。一見、綺麗に体系化していくところでもリソースも少ない、そして学生が極めて学習困難な小さな大学さん、新しい大学さんへ、すごく必要なのかもしれない、リソースやらが。

しかし、山形大学では、このようなある程度自由度をやりながらアウトプットをどうしていくかということが問われていて、全体として1年生を見たときに、コンテストに出てくる学生だけじゃなくて、全体としてはやっぱり我々のこのような取組がやって、積極的になってきたという感じは我々教育してる立場から見えて思っていて、それはがちがちに、何か制度化していくことではないんじゃないかなというふうに思っております。

山田 例えばこのセミナーですけども、単位は1ですか、2ですか。

小田 2単位です。

絹川 教養セミナーとスタートアップセミナーというのはちょっと違うわけですが、せっかくセンターで教養セミナーをな

さってるわけですから、そこでの色々な経験なりノウハウなりが、全学的に広がっていく仕組みが欲しいですね。さっきから私それが一番問題だと、コラボレーションどうやるのか、コラボレーションをですね。どうしてもこういう授業になるとセンターの授業になっちゃてる。それじゃ意味ないわけですね。ですから、そここのところをしっかりと仕組みが知りたいわけですね。どういうふうに広がっていくのかですね。

小田 ですから、そこにつきましては、こういうふうなワークショップを、全学のワークショップを生かしているんですよ。

絹川 ワークショップですよ、ワークショップをやりましたで終わっちゃうわけですね。だから、本当にこの中身がこの教養セミナーで得られた知見が全学の先生方に共有されて、スタートアップセミナーの方も向上するようですね。何かそういう仕組みとこのを知りたい感じがするんですよ。

渡邊 このスタートアップセミナーは、全部共通のテキストを使っているんですが、その後、結局学部ごとの教育に入っていくときに、これを生かしてどう専門教育にやっていくのかというところの制度化というか、プランニングというか、生かすのはこれからの作業であるんだと思います。非常に所謂専門的な学部がありますね、うちはうちのプランでちゃんとやるんだから、よそは口出しをするなというふうな発想では、本当の学生のための授業になっているかどうかというのはありますから、もちろんその専門的なやり方と、こちらで我々が培ってきたものと上手く繋ぐ工夫は、まだこれから先の課題なのかなと私個人的には思います。

小田 今のセンター長が言った通りが実態です。正直におっしゃってですね。人文学部の学部長でもあるんですけど、正直なところだろうと思っています。

でも実際にそういうことを契機にして、決して少人数の教養セミナーやらに絡まなかった人が無理やり絡むようになってきた。ここはいいようにとれば大きなステップなんだろうと、もうこれは規程で学長がやったから、私はそれを利用するしかないんだろうと思っています。

そうしたときに、先生がこうやってワークショップは一つのあれだろうと言ったときに、僕は、だけどこれはそういうことの契機で、一つの何かこういうことを利用するしか私はないと思っているし、今まで培ってきた授業の公開とかですね、我々が培ってきたものを高めるためには、やっぱりいろんな冊子をつくっているけども冊子じゃ限界がある。ビデオもつくっています。各教員が、けどもそこは限界があるんであって、授業はやっぱり見てもらうしかない。

その風土というものはある程度できてきたし、ローカルな部分で言ったらスタートアップセミナー、うちのコースのうちの同僚がやらなくちゃいけない。それですごい困ってるわけ。いい迷惑だと言って、僕はやってないのに全部僕のせいになるわけです。そうしたときに、では始めの2コマつき合いましょうと言って授業設計はしてあげるんです。そうしたときに

グループ学習を見せてやったら、その先生はびっくりするわけですが、はっきり言えば、学生が90分終わったら、もう目が変わっていると。そういうところで、恐らくその時2人の先生が付き合いましたけども、やっぱり、もしこういうものが、スタートアップセミナーがなかったら、私のものをそんなに見る機会はなかったでしょうから、そういうところでローカルに広がっていくんだろうし、それを組織的に、いつかタイミングで合わせてどういうふうにしていくか。

そのためには、こちらとしては大々的に見せたって感激しませんから、ローカルな部分でやっぱり我々の公開と共有をどう展開していくか、恐らく素地はこの10年ぐらいでつくってきたと思いますし、一方からまた新しい動きがあるから、そこから辺りで上手い展開と言いますかね、恐らくスタートアップセミナーをやって、困ってニーズが出てきている状況なんだろうと。

木野 済みません、今のところで関係する8番目の課題発表コンテストというがあるんです。こちらの方と上手く何か繋がれば面白くなるなど。課題発表コンテストとか、その教養セミナーの中での学生の成長というようですけども、むしろ教養セミナーの中でどういうふうな志がありますかね、どういう性格みたいなことを、今の要はスタートアップセミナーなんかの先生方が特に学生ですね、受けていない学生に対してそれを広めていく、そういう一つのいい機会になるんじゃないかなと。この写真とかを見ると、これは発表している、教養セミナーを受けた学生が発表し、それを審査員が審査しているというふうな関係者だけじゃなく。そうじゃなしに、これを実際の他のスタートアップセミナーしか受けていない学生に広めていくという。

小田 そうなんですね。

木野 多分、小田先生も将来の希望と言いますか、あそこのそういう最後に、そういう発表会の、何かどこかの会場を借りてやって。

小田 そうですね。

絹川 小田先生のね。

小田 と思っていて、これのポスターに関してもですね、誰でも参加してくださいという大きなポスターには書いてあるんですね、どなたでも参加自由と。恐らく今の僕、本当は一番の問題はこういうものが増えすぎた。FDやらでも学内で増えすぎて、鮮度をなくしてきている。ですから、今ごろ報告書を見て、昔僕がまさに学生主体型の授業をやったときに、今見ると、宣伝も大してしていないのに学内から殆どの学部の先生たちが来て、顔ぶれ見たら、今だったら敵対してる人じゃないかというぐらいの人たちが興味を持っていた。

けども、たくさんこういうものを展開してきたときに、ある

部分のマンネリズムがでてきたんだろうと。そして、学内でいるんなものができてきて、力が分散されてきたなど。ここが全体としての制度化の、また一つのベクトルに向かっていくところの困難さを僕は感じていて、さて、それをやっぱり無理してもどうしようもないから、こちらとしてはこちらの力をつけながら、違うところで起こっている動きとどう融合して発展させていくかということが今問われているんだろうと。しかし、具体的にはよっぽど強引に、何かこれに出てこないと単位やらないよと言わないと出てこない。教員たちだって、そういう部分はもう出てきていると言いますかね。それはすごくいるんなものが、もう山形大学ぐらいの規模だとありすぎるというのは思っています。それはマンネリズムだけではないですね。

木野 嫌というほどね。

小田 嫌というほどいるんなものがありすぎる。この問題というのものも、いかにして大学の一つのベクトルにしたらいいかというところが、ちょっと私のですね。

絹川 時間かかりますよ。

小田 時間かかる。時間かかるんですよ、先生。けども。

絹川 いやいや、もうこれはあんまり公に言えないんだけども、新潟大学で主専攻、副専攻って出しましたね。その実態は中に入って見ますと、実態はやはり相当問題なんですね。何が変わったのかと云ったら、そうすると担当の副学長の濱口副学長は何か百年河清を俟つような感じなのね。

小田 ああ、そうですか。

絹川 とにかく、こういうものを形、このペーパーワークというのはやったら、100年待つうちに皆それに乗って来るだろうというね。

小田 ああ、そうですか。

絹川 そのぐらいのね、何かスケールなんだな。

橋本 100年。

小田 濱口先生ですらそうです。

絹川 私はそれでいいかとは、間に合わないんじゃないかとも思うんですけどもね。そここのところの戦略がないんですよ。どうしていいか。その実態的には主専攻っていうのは学科専攻なんですよ。学部があって学科があるわけですから、入学試験も全部学部の縦割りですよ。

小田 はい。そうですね。

絹川 主専攻ってことの意味は何なのかというね、そのところが一応全学科目ということになりましてね、主専攻制ですから全学科目、全ての学生に開かれてるんだということで、建前は結構なだけけれども、実態は殆ど変わってないわけですね。それで余計なことですけども、そういうこと考えますと、やっぱり百年河清を俟つというぐらいの魂胆がないと、中々できないのかなというふうに思うわけですけどね。

小田 だけどこっち側、僕が思うには、世界の情勢は100年待ってこないだろうと、これももうグローバルの中で確実に我々は判断しないと、日本だけの問題では僕はないと思っていて、確実に経済やらいろんな問題があるけれども、もう100年も待ってこない、10年も待ってこないんじゃないかと。

そうしたところの中スタンスに立ちながら、こういうふうな改革とか何かの示唆がないと、山形大学の置かれているところがやっぱり東大とやらは違うけれども、だけど、そういうところでは連帯しながらやっていかないと、100年のものはありますよ。恐らく、それを守るべきものは学問とかいろんなものがある、はっきり言えば、だけでもそうじゃないところはこの制度化、まさに主専攻、副専攻というようなところは違った部門なんだろうなと思っていて、それをどうしたらいいか。僕、こちらも答えられないけれども、タイムスケールはもっと短いだろうというふうには思っております。



絹川 ちょっと話は別ですけど、「学生主体型の授業の冒険」という本を私は読ませていただいて、ちょっと書評を書かせていただいたんですが、あれを見るとどの取組、全体を通して、ある一つの学生主体型授業というものはこういうんだというイメージが出てきますけど、それで伺いたいのは、山形大学でもって教養セミナー、それを学生主体型の授業としてやっているというときに、先生方の中で共通認識というか、あるいは共有する方法とか、そういうものは浮かび上がってきたんですか。先生方、ばらばらで。

小田 基本的には、

絹川 学生主体型の授業というテーマがどういうふうに表示してるかですね、ということについての皆さん、先生方の

認識が、少なくともセンターの先生方の中の、あるのかどうかですね。

小田 全学の基盤教育という部分は、教養セミナーというものが学生主体型だという共通認識はないと思います。それは規則には書いていませんからね、定義には、こちらとしては教養セミナー、少人数のものを学生主体型のものというところを有効活用していくところを拡大したい、また、他の授業の講義型もそこに行きたい、専門にも行きたいというところが頭の中にはあります。

だけど、ぱっと見たときに絹川先生から聞かれて、何かと言ったら、恐らくあの本に書いてあるように、始めた平成12年のころ、2000年の頃にはまるっきりなかった、山形大学にですね。もう講義しかなかった。殆ど講義と実験しかなかった。そこにおいて、もっと違うものがあるんじゃないかというところまでやってきて、そして見られて、この10年かかったところにかかなりダイナミズムが出てきている。それは間違いなくあると思ってます。そういうところで、またこういう形でシンボリックな形でGPを採りやってきたところにおいて、またその授業の多様性、主体性というものは上がってきているんだろうと。それは今さっき新潟大学の百年の計というのがありましたけども、やっぱりこういう形で無理して、何か共通テキストをつくるグループありますけども、学長、それとは違ったところというものは、かなり何ですかね、根を張った部分というものはできてきたんだろうと思ってますけど。

絹川 それと学生型授業ということを提唱する意味はね、運動ですか。

小田 一つの運動でしょうね。言われたら、僕は、

絹川 コンセプトとしては、杉原先生に伺いたいんだけど、コンセプトとしてはどうだろう。

杉原 運動とは違うということですか。

絹川 学生主体型授業といったときに、この頃のはやり言葉ですからね、学生主体っていうと。

小田 そうですね。

絹川 だけでも、ここで学生主体型授業ということのプロポーズするには、そこに何か固有っていうか、個性っていうかな、単に運動じゃなくてね、授業の実態をサポートするようなセオリーというのか、何かそういうものが開発されると物すごく役に立ちますけどね。他の先生が真似してもしょうがないわけですけども、にもかかわらず、何かこういうものが学生主体型授業ということでもって、何かそれぞれの先生が考え始めるような何かそういうものができると、運動であること、非常に失礼な言い方したけど、運動なのかと、運動にとどまったのでは、所謂啓蒙活動にとどまるわけですね。

もっと私どもの営みが実態化する、学生主体型授業ということで実態化するような、そういう手がかりをセンターの先生方が指摘していただけたら、あるいはマニュアルと言ったら、ちょっとこれは語弊がありますが、何かそういうフレームワークのようなものが出てくれば、いろんな先生方に参考になりますね。

杉原 そうですね。ちょっと微細なと言ったらあれなんですけども、ビデオを一つ作って、学生主体型授業のノウハウ集といいますか、一応事例集のビデオは作りまして、それを基に今後どう発展させていくかということにはなってくると思うんですけども。一応雛形として学生主体型授業というのは本当にいろんなものを含んでいますけど、とりあえず昨年度にパイロット授業で行いました形で、学生同士でディスカッションをしたり、あるいはプレゼンテーションをしたり、授業時間外に物事を調べたり、そこでまた議論が進んだりという、そういうタイプの雛形を一応用意するんですけども、教養セミナーというのはそれまで以前からずっと走っていますから、多分、各先生方で例えば問題解決型の学生主体型と言いますが、問題発見型とか、あるいは講義スタイルの中でもちょっとペーパーなり、いろいろ使いながら双方向使うという形でアクティブさをつくっていくという、いろんな先生方のスタイル、あるいはニーズというのがあったと思うんですね。恐らく絹川先生としては、いろんなパターンを自覚的に。

絹川 型には収まらないんですけどね、パラエティーがあっというわけですよ。

杉原 そうですよ。そのいろんなパターンに先生自身が自覚的になって、じゃあ、どうしていったらいいのかということに私たちがサポートしていけるような、まず出発点としてのツールが必要だろうということだと思うので、そういう意味ではビデオだとか、あるいは公開授業、ミニ公開授業を毎回やっていますので、そこを出発点に雛形としての先ほど申し上げたような形のグループのディスカッション、プレゼンテーション、そして授業外学習というものをご覧いただきながら、FDのワークショップ等でも紹介しながら、自分にはちょっと合わないなといったときには、先生どんなにされていますみたいな話を検討会でやっていくという。本当に大きなダイナミックな動きとして広がっているわけではないんですけども、できるところから進めている段階としては、そういうことはやっていますけれど。

絹川 ワンパターン、型にはまっちゃうとこれ面白くないですしね、ですから、パラエティーがあるけども、その根底に通底するものがあるというようなね、そういう姿が浮かび上がってくると、それで今ちょっと思ったんだけど、小田先生がこの間編集された「学生主体型授業の冒険」は、山形大学以外の先生方がいっぱい入っておられてますよね。

小田 はい。

絹川 山形大学の先生、センターの先生だけで、学生主体型授業の冒険という本を書いたらどうなんです。それで個性が出てくるんじゃない。

小田 そういう、だから本に関しては、山形大学で書きたいと思ってないんですよ。今の日本の置かれている状況やらに発信力をつけたいと思っていて、僕としては学生の主体型授業の、では先生の言っているコンセプトなり、セオリーなりやったときに、ムーブメントがですね、例えば民主化というムーブメントは、民主化といういろんなコンセプトがありながら恐らく展開されるわけですよ。どこかの協調的のなだけでは私はないと思ってる。ムーブメントとコンセプトは全然別物だと僕は思わなくて、こうやって恐らく、やっている学生主体型の、先生が読まれてやっぱり全体のイメージが湧いてくるような形で恐らく学問の、それぞれの学問、生物学とか数学とかやるかなりのイメージ、規定にあるものとはこれは違ってくる、違うものなんだろうと思ってます。そういうところでは、概念規定をそんなに強くするもんかとかですね、これは結構言わずもがなの同意事項があるだろうと。そして、恐らくムーブメントの形というものはですね、10年前から見たら、これ特殊なムーブメントであり、あと50年後から見たら特殊なムーブメントであるだろうと僕は思って、そういうものに言葉の定義で縮小したくないという部分がある。先生のおっしゃるところは言葉の定義で、より活発にするということはあると思いますよ、確かに。だけど、今のところ私はそうは考えてないと思いますかね。

橋本 そういう点でいくと、そこに通底するような比較的短いフレーズを、例えば五原則とかですね、そういうようなものをまず教養セミナーで管理する、それでベクトルがこうだということを通認識する。これが必要だと思うんですが、先刻の議論の続きから言えば、例えばスタートアップセミナーについては共通のテキストがあるわけですね。

小田 あります。

橋本 ただ、それを実際には使ってないという人も、あるいは学部もあるということであれば、逆にそこに乗り込むべき余地があって、その共通の教科書はセンターのほうに任せてくれと、つまり、ハウツー本ではなくてその理念の部分、山形大学で目指している教育はこういう部分だというのが、そのテキストの中で十分盛り込まれるような、それで共通認識を広めていこうよ、そういう余地が何かあるのかなという感じはしますよね。その可能性はないんですか。共通教科書というのは。

小田 ポリティカルな部分がありますし、もうこれ改訂しないでしょうから。ですから、それは始めから言ってるんですが、スタートアップセミナーというのが高大接続という部分があ

たり、大学の適応というところがあったり、恐らく違うと思うんですね。ですから、そういうところであるだろうし、もう本がいっぱい出てますからね、評判になって、それを改訂ということでもないだろうと思うし、向こうには向こうに任せるというポリティカルな部分があります。



山田 あるいはそうだとすると、教養セミナーというその科目名称に拘るのではなくて、きちっと定義しないのであれば、そういう要素を含み込んだような授業を山形大学では普及させていきたいということを考えれば、敢えて対抗するのはスタートアップセミナーではなくて、現存する教養セミナー以外の教養科目との中にそういう要素を含み込んだものを広げていけば、要するに何も教養セミナーと置かなければいけないのかということで、これは一つのGPの授業なので、見える形でそういうふうに、まずはここでということでもいいと思うんですけど、それ以外の教養の中に、例えばそういう授業をやってみませんかとかしないと、例えば新たにセミナーで立てませんかという先生も負担が大きいので。

小田 そうです。

山田 今ある科目の中にちょっとずつそこに根を張っていくっていう、そういう広げ方もやっぱり一方ではあるのだから、そっちの方がこの事業の発展としてはあるような気がするの、その辺りの今後の考え方というか、それはいかがでしょう。

小田 はい。山田先生がおっしゃってるような形のところで、この3年が終わってと言いますか、途中から常に思ってます。結局は何かと言ったら、一つの授業で2単位でいろんなスキルとか学生の能動性がぱんと身につく、そんなかなことは世の中ないだろうと、そのきっかけとかいろんなものがあって、あるけれども、この全体の能動性というのは4年間全体でやったらいいんだろうと。しかし、そこら辺りをきちんと明確には意識しなくちゃいけない。そして、コアとなるような授業もある程度は必要だろうと。

しかし、あらゆるいろんな授業の中で講義一辺倒だったものが、大講義にしたっているんな主体性を引き出すようなところ、モジュール的な展開というのも十分あるだろうと思っていて、そちらあたりの考え方もいろんなところから提示していきたい。それに合わない先生もいますからね。また、

モジュールで何するのというところはあるから、そのようなところを今3年終わる段階ですね、考えているというところですよ。まさに山田先生と同じような感じですね。いろんな普通の授業というものを我々考えていきたいし、私の身の回りでの学部の先生たちでは、そのような展開をやっておられるようになってきたということもあります。

絹川 さらに言うとね、山形大学のセンターの存在感というかな、存在感というのを何とかして表現したいわけですよ。

小田 有難いですね。いや、それがですね、先生、廃止されるんです。実際、昨年それが話題になっているんです。先生が雪の中、それが昨年話題の中心になって、山形大学のセンターは昨年見直しになったんです。本センターは、時限立法として3年間だけ残される。こういう状況の中で、いろんな改革の中で、我々は3年前のこのプロジェクトが残されて今やっているという形なんですね。という形の中に投げ込まれて、存在感とか、存在感十分出していると思うんですね。いろんな分野で、うちのセンターね。他から見たら廃止されると思っていないというね。

木野 聞きにくいんですが、一応この3年目の後どうなるんですか、センター。

渡邊 この事業っていうか、機能っていうか、やってらっしゃることはずっと続けなきゃいけないことですよ。終わりは無いので。

絹川 GPは切られちゃったでしょう。

渡邊 GPは切られても、それは続けなきゃいけない。

絹川 自前で。

渡邊 自前で何かをするなり、どうするなりってことはやらなきゃいけないってことは、皆知っているわけなんですけど、その形をどうするかは、それこそポリティカルというか、どういうふうにして実現するかということの話になると思うんですが。

絹川 この文科省のプログラムは、これ何年計画ですか。

小田 3年計画です。

渡邊 しかし、これでやめていい話じゃないですからね、FD活動っていうか、これは、学生どんどん変わってくるわけですから、先生も変わるし、それをどう考えるかということを上に向かって発信するという事は続けなきゃいけないかなと思ってます。中々全学の共通の基盤というのは、本当に

この基盤教育の部分しか残ってないところなので、ここで生かしていく。多分、しないとですね、それぞれの専門分野は別になってしまうと話が中々通りにくなりますから、やっぱり初年次とか、そういうところでやっていくことになるのではないかと予想です。

ただ、実際にはいろんなところでこれに絡んだ先生たち、若い先生とかこれに参加して授業のところに持ち帰ってきますので、私のところなんかだと、1年生の後期の授業の中での専門の基礎なんですけども、学生主体、学生がグループつくってテーマを見つけてきてどうやって研究しましょうかと、心理学の素人でどうやってやるかえとこうやってみて、幾つかグループやってというのを1年生でやって、それを3年生でまたやるんです、うちは。それをやっているの、若手の教員が。どんどん取り入れられるところは取り入れてやってきている。

法律や経済の授業なんかでも、そういう演習という今までの、名前は演習なんですけどその中でやるのは学生の発言なり、グループ活動なりを援助するようなプランというのを立てる先生たちは増えているんですよ。

それは決して無駄じゃないというか、ちゃんと生きていて、専門分野が生かされていく。一方で、そういうのが使えない分野はそれはしょうがないので、使えるところでちゃんとやっていくのが少しずつ増えていけばいいんだと思いますね。学生がちゃんと、私が驚いたのは議事進行ができたり、全部発言したりということが皆できるということが、皆できる子が何人かぼんぼんといると、皆できるようになるというかね、活性化する。そういうのは、色々できてきていいんじゃないですか。

山田 その意味で、あんまり好きじゃないかもしれないんですけど、例えば授業評価アンケートを出されていますよね。でも、これもこの授業だけのデータだけでなく、それ以外のほかの教養の科目のデータと比較してみて、例えばやっぱりこういう授業というのは高いんだよとか、あるいは社会人基礎力ということを高めるということがこの事業の目的だったと思うんですけど、例えば社会人基礎力のスコアがどれくらいだったんだということを、それ以外の在學生と比較してみたりとかしながら、例えばそういうデータでもって上に対しては少し証拠資料として出していくという動きも、一方では必要なかなという気もするんですけど、それはここには載ってないけども、実はそういうのがあるのかというのが、もしあれば。



小田 そういうようなデータはあるんですけども、やっぱり高いのはそうなんですけども、教員数が600人ぐらいいて、今さっき言ってきたように、すごいいろんな大学の中で授業を教えたり、研究したりする以外の要素が増えてきて、その中にこのFDやらはワン・オブ・ゼムになったんですよ。そういうところで受け取られ方が弱くなってきている。しかしながら、渡邊先生が言ったように、実際に我々身近にこういう色々な展開をやっているから、自然な形で専門の教育やらに入っていくのは、恐らくよその大学にそんなにないと思いますよ。そのくらい自然な形での浸透力と言いますかね。制度化しない制度浸透力というのは、かなり強いと思います。

ですから、1回それを山田先生が言うように、きちんと見えてコンパクトな形でまとめて、こういう形になってるんだというところをやっぱり見て、また活性化させなくちゃいけないというところは思っています。この活性化させるところを大事なんだろうなというふうに思ってるんですけどね。

絹川 これだけたくさん授業をやっていますからね、大したもんだと思うんですよ。本当によくこんなにできるのかと思うんだけど、こういうことが段々と、じわりじわりと全学的な影響を与えていくんだろうということは確かなわけですね。ちょっと私はこんなにたくさんできるかなという感じになってくるんだけど、ちょっとシンポジウム、本日のようなのを開くのだって大変な努力ですけどね。ですから、せっかくのこういう営みが、何とかセンターの存在感として浸透していくようにしたいもんだと思っている。

小田 思うんですよ。思うんですけども、ポリティカルな部分だから、もうどうしようもない部分もあるんですよ。だから、先生がおっしゃるような形でこういうシンポジウムをやるだけでも大変というのは、例えば10年前だったら1年のすごいイベントですよ、山形大学の我々にとっては、もう開いたら憔悴し切っている。

しかし、我々はこういうのを年間何回も打ってきている。そうしたときに、事務の人たちの力というのがそれはすっごい上がってきてですね、彼らがやってくれますから安心感がある。そして若いスタッフも慣れていくから、たっただって要所をやってくる。昔の不安のようなものなくなってくる。そういうところでのスキルアップと言いますかね、すごいものだと思います。これは全国に誇れる。だから、こういうものだって何

げなくちょっと前に、ほかの2週間ぐらい前だってから「エリアキャンパスもがみ」でまたシンポジウムやっていますし、地元で離れたところで、そういうところではすごいんだろうと思ってます。

しかし、そういうところからセンターの発信力というところで、絹川先生から有難いことをおっしゃっていただけるけれども、本当はもしこちら側にそういうふうなポリティカルなとか、いろんな心配がなくて展開できるような、グローバルな展開をしたいですね。本当はFDというものを国内だけではなくてですね、国外やら、いろんなところをターゲットにして、日本というものの高等教育の発信力を僕はつけたいと思う。それは急がなくちゃいけない。5年、10年ぐらいですね。それは山形大学だけでできることではないけども、こういうところからの研究やらノーベル賞とりますけれども、高等教育が本当に日本の教育力は素晴らしいねと、素晴らしいところ、それはまたすぐ直せばいいんであって、そこらあたりが今問われていて、もし可能だったら、そういうところにもチャレンジしたいなとは思っているんですけどね、国内だけで閉じずにですね。だけど、中々難しいところはありますけれども、国全体として考えていかななくちゃいけないんだろうなと思ってます。

絹川 学生主体型の授業の冒険の、あの本は売れてるんですか。

小田 出版社は本日も売れているって言うんですよ。いっぱい出てます。だけど、売れてると言ってくれてるんだけど、だけど僕の予定では、すぐでも完売してほしいなと勝手に思っているんだけど、それはそうでもない訳ですね。

橋本 いや、2をつくるんですよ。

小田 2はつくります。2をつくるのはどうしてかと言ったら、一つ目がもう売れるかどうかはわからないけども、一つを出したと同時に2もつくるという。

橋本 それこそ、さっきまでナカニシヤ出版と会っていましたが、いいんじゃないですか。これ、売れているんじゃないですか。

小田 売れてると言うんですよ。売れてるらしいんですよ。

絹川 冒険だからね。

小田 冒険、先生、それ何ですか、それ。売るのが冒険、売れるか冒険。もう出版社に損をさせちゃいけないと、僕はそれだけが気になってるんですけどね。だけど本人は、出版社の人は売れていますと、すごくありがとうございますとってくれるから。

絹川 まだ他に、この間私が書いた書評以外にはまだ出てないでしょ。

小田 出てないですね。

絹川 大学教育学会が取り上げるのかな。

橋本 いや、特にはその予定はないんですけど。

絹川 研究費に入ればいいんだよ。

小田 とんでもない。

絹川 私大協にね、私大協にちょっと紹介する。私大協すぐ書きますよ。

小田 私大協は書いてくれました。

絹川 書いてくれた。

小田 はい。新聞に、教育学事新聞にはすぐ取り上げてくれました。

絹川 そうでしたっけ。

小田 はい。

絹川 私、見逃しちゃったかな。

小田 はい。その人とは親しいもので、その人がすぐ取り上げてくれましたけれども。あそこあたりが、僕は小中高の先生までそろえてくれたらいいなと思ってんですよ。他にやっぱり小中高の教員の再研修のやつで、実際に我々のチームの連中がやったらジグソー法なんか知らなかったと、やっぱりすごい興味を持ってる。ですから、そこら辺りは大学のという形でやっていますから届かないんだろうけども、小中高まで届いていってですね、やりたいなとは思っているんですけども。

橋本 主体型授業という、このキーワードでもって少なくとも小中高の先生方は関心を持ちます。その言葉を前面に出していますから、それこそもう余りに陳腐な言葉という先にもありましたけど、逆に馴染みやすいというか、全然何のことやらわからないというような言葉ではなくて、逆にそれぞれが小中高の現場では主体性というか、主体型というか、そういうことを常に意識せざるを得ない。

そういう点でいうと、それがキーワードになって、あるいはタイトルになってというだけでも、かなり市場としてはあり得る。

小田 あり得ると思うんですよ。あり得ると思うんだけど

も、やっぱり何か知られないというところはあるみたいですね。

絹川 学生主体型という言葉では、言葉は同じであってもそういう言葉で使い始めたのは、これが初めて。

橋本 そうですね。

絹川 意外と使ってなかったんですね。

橋本 特に、大学レベルでは使っていません。

絹川 学生を動機づけるとかね。

小田 そうなんですね。

絹川 学生を中心とする。

小田 そういう言葉なんですね。

絹川 続いていますよね。だけど、学生主体型という言葉はなかったね。

小田 ないんですね。

絹川 いろいろ考えてみると。

小田 検索したって。

橋本 学生と言葉がつくので、小中の先生というのは全然違う話だと切ってしまうか。

小田 違います。

橋本 それとも、主体型というところで自分たちの方に引き寄せるか、そっちのバランスですね。

絹川 総合学習はそういうところに絡んでくるんでしょ。

橋本 はい。

絹川 だけど、総合学習は何か評判が段々落ちちゃってね、今それを全部教科の時間に全部すりかえるっていう。

小田 そうですね。

橋本 基本的学習の時間が出てくるよりも前から、主体的な学びなんていう言葉はもうずっと小中で、高はともかく小中でしきりに言われてた言葉ですから、総合的学習がトーンダウンしたからといって消えてしまうものでは多分なくって。

絹川 だけど考えてみたら、何か学生主体型というのは本来当たり前のこと。当たり前のことが、当たり前じゃないから困るわけね。

木野 大学授業というのはね、当たり前のことが実際やるとなると、どうするのっていう話になってきますからね。

小田 何か段々話がちょっと違う方に行って、勝手にいいんですね。こちらです。

木野 全く別のところに。

小田 はい。

木野 教えてほしいんですけど、授業改善との関係です。山形大学の教員アンケートの結果が出ていますけども、驚くべき結果なんですね。大変参考になる。余り参考にならないというのがほんのわずかで、全然参考にならないのはだれもいないとかね。こんなすばらしい結果が、立命館では、授業アンケートを今やってるのに、四、五年前ですね、評判悪かったんで、もう少し今どこでもやっているような簡素化したアンケートに変えたんですけども、そのときに新しいアンケートは授業改善に役立ちますかという、同じ質問をしておるんです。まあ、少しは参考になる。まあまあ参考になるとというのが半分近くはいきましたけども、余り参考にならないと、そのとおりの一応まあと言ってくれたから、まあいいかって言って新しくスタートしたんですが、今やると多分逆転するんだろけれど、年数がたつと、授業アンケート各大学ですずっと浸透して、やるのが当たり前になっているけども、やっていることが本当に授業改善に繋がっているのが問題になっています。

小田 問題ですよ。

木野 山形大学のこれだけすごい教員からの評価があるんですけども、それが授業アンケートが参考にして授業改善がどう進むのか、どっかで何か検証というのはありますか。

小田 それは、このアンケートの中に自由記述の欄があります。ですから、どういうことに役立てましたかという項目やらをやっていますので、それを一覧表に報告書の中にもあるはずですよ。

木野 最初に自分でどういう工夫をされたかということですね。それ実際、学生がどう受けとめて、要するに授業アンケートがどういうふうか。

小田 学生がですね。そこまで結果のことだけでやっていますので、中間の形成的な評価をしてませんからあれで

すけども、

橋本 ここで気になるのは、Nが45しかない。

小田 そうなんです。ですから、どういうことかという、45ぐらいしかまだ返ってこないということですね。三百何十人いるのに、そういうことです。ですから、戻す人というのは熱心だから高いというのはあります。こちら間違いない。しかしながら平成12年にアンケートやった、2000年から始めたんです。このときに、この教員アンケートもやりました。このときも参考になるというのが、5段階評価で4近かったですかね。3.8ぐらいだったですかね。ですから否定的、中間値の3より高いんですね。ここでアンケートは継続できるなと踏んだんです。また、そして実際にやるとやっぱり自由記述というものが、やっぱり参考になるという形で、そのときには人数が多かったですから、正確な人数は言えませんけども。そういう形で、かなりこれもずっとやっているの、飽きてる部分もあるんだろうと思いますけども、返さないというのは。

橋本 山形の授業改善アンケートは、ずっと同じ質問項目が続いてるんですか。

小田 基本的には変わりません。けども、ところどころマイナーチェンジしたところはあります。

橋本 5年前も、だからスタートしたときからずっと大体同じ。

小田 大体ですね。

橋本 それを変えようという話はありませんか。というのは、先ほど全体で4.22ぐらいが出ていて、非常に良い数字である。これは実は岡山大学で1回議論になったのは、ある程度高くなった時点でやはり変えるべきであるというのは、もうそこを見てるだけでは改善の余地は見えてこないから、質問項目を変えるべきである。それで、うちでは何回も質問項目は変えてきました。だから、過去との比較ということで常に議論になって、前と比較できないではないかという話が出てくるんですが、それよりはむしろ何に役立つかという考え方で変えてきたんですが、そういう議論は起きてない。

小田 起きていないですね。やっぱり、起きていないのは、ぱっとやって1回ずつ議論をするような何かな、今、力がないうところはあと思います。これは全学の委員会ですることですから、全学の委員会ですること、今、始めごろのダイナミズムがなくなっていますから。ですから、そこら辺りで吹っかけたら、また大変なことになるかもしれないし、そういうところがまず一つは大きくあります。次に、確かにこの総合評価だけのことで、個別のところのアンケート項目、具体的なところというのは、恐らく見直してですね、余にも高いところ、みんながこれじゃあ、もう聞いたってしょうがないで

すからね、確かに。そういうところでは、見直すところが出てくるかもしれません。まず、参考にして幾つかまたやりたいと思いますけども、やっぱり力があるときに一挙にまた解決しなくちゃ、対症療法的ですと力がそがれますので、うまく大学がまたいい段階になってくると思いますけど。

絹川 計236というのはSAを廃止した授業の時間ですか。

小田 授業の総数ですね。7コマ、例えば私だったら年間例えば30時間やったら、授業の後、他の先生たちも使った回数で授業の総時間という感じですか。

絹川 この場合に気になるのは、やはりアメリカでもそうですけどTAは、ある程度やはりFDやんなきゃいけないですね。この場合のSAに対してはどういうふうな。

小田 これは、このチーム全体としてはやっていません。個別には僕の授業とか、個別にはやられていると思いますということしかできないんです。しかし、先生がおっしゃられるところで、一番その問題を抱えていたのはフィールドワークなんですね。1泊2日で行く。それを2回やる。そして、そこにSAをつける。ですから、この人たちのFDをやらなくちゃいけない。FDいうか、ディベロップメントしなくちゃいけないというところでは、かなり厳しく杉原さんと酒井さんが中心になってやっています。初めごろは余りやらずにただの説明を棒読みしてたので、無意味なので、ここの質を上げようということでやって。

絹川 立命館は、割と学生を使うことにね。

木野 ESって言いまして。

絹川 立命館の例だとね。

木野 人数多いですから、800人ぐらいいますから。

小田 そうなんです。

木野 それは研修を前期後期ともいうことで、必修じゃないですから、かなりな参加率ですね。それからアンケート活動、学生、教育サポーターの学生がそれを通した後の振り返りのアンケート、もう一つはESが入った授業での受講生のアンケート、ESが入ってそれがどういう役に立ったかとかというようなことですね。それから、もう一つは教員アンケート、ESを入れたことによって授業がどう変わったかとか、どういう効果があったかですね。そういう三つの方法からの総合評価をまとめて、毎年アンケート結果を総括してですね。研修の前にもちょっと反映、フィードバックするという形で、規模も大きいですから研修制度がしっかりしないと大変だと。

絹川 それ全部、センターがオペレートしてるわけですか。

木野 今機構になっていますけど、教育推進機構。

橋本 山形のSAは高学年というふうに説明がありますが、基本的には3年生、4年生、あるいは4年生、そういうのを想定してるんですか。

小田 いえ、指定しません。2年生から3、4という形で身近です。

橋本 今の立命のESもそうなんです、関西大学でチューデント・アシスタントを表現を変えてラーニング・アシスタント、LAというふうに変えてるんですけど、基本は2年なんです。つまり、2年が、うちなんかやっておりますこととよく似てますけども、要するにサポートする相手が自分とそんなに年齢差がない。1学年しか変わらない。つまり、サポートする側の人間にしても1年前を振り返りやすいし、逆にサポートされる側からしても非常に年代が近いからという、そういうところで、それこそどう教育するかというのが別途存在しますけれども、その親近感というか、お互いの親近感ですね、これは無視できない重要な要素かなと思うんですが、実際のところ、やはり比率的には上の学年3年生、4年生が多いです。

小田 多いです。結局は何かと言いますと、授業時間が空いてないとうとうもないと。

橋本 はい、そうです。

小田 そういうすごい現実的な問題があって、そして、やっぱり私としたら身近な、例えば研究室に入っている学生の方が、いろんな形でフィードバックできますからね。すごいブラッシュアップできるし、その学生にとってもいい。教育的な効果を確実に狙っているから、そして、やっぱり2年生やら忙しく、同じ時間帯に授業がぶつかると。こういうところで探すのも、またポスターはってやるという形でもないんだと思ってます。他の授業でそういうのやられてるものもあるけども、やっぱり身近で知っている学生、優秀な学生をやっぱりやりたいなと。優秀じゃない学生は中々サポートが難しいところもありますし、先生のおっしゃるところで2年生というところは、いろんな、何年生をターゲットにしたら教育効果があるのかというところは考えなくちゃいけないと思います。けども、身近なところでは、今のところちょっと難しい。よくできますね、だけども。授業はあいてる。

橋本 関西大学は全体で二、三十くらいいると思いますけど、母数は多いから、本当は授業に出なきゃいけないのを。

小田 ちょっと違う形でちょっと話題提供、話題を振りたいんですけども、大学教育学会の来年の課題や研究会ですよね。

橋本 はい、よろしくお願いします。

小田 そうしたときに、僕としてはこの学生主体というよりも、何かな、これをやっていて思ったのは、今頃初年次教育とかキャリア教育とか、いろんなスキルの問題とかありますよね。軒並みこんなのが増えたらたまらんよとはっきり言っ、いや、私から見たら。有限の124単位の中でそうするわけですよ。そしてそれをスキルをみつけたからといって、じゃあ本当に求められてるんですね、遅しさと言いますかね、人間としての生きていく上での遅しさ、それはいろんな問題を解決したり、何かしないと遅くないんだけど、そうしたときの私から見てたら、洗練されたこのカリキュラムよりも、ブルートな授業と言いますかね、それは昔にエリート教育の中にもあったわけです。出てこなくてもいいとかね。イギリスだったらギャッププレイヤーってものがあって、大学に入る前に1年間アルバイトでも、ネパールでもアルバイトしていると、大使の子供がそうだっていうのは僕びっくりしましたけども、こういうものを我々は本当は大学のいろんなレベルとかによってちょっと違うんだけど、山形大学やらもうちょっと本当はブルートの授業って言いますかね。荒い、すごい何ですかね、細かいケアじゃないようなものが本当は、僕は必要じゃないかと思ってるんです。それやってるのはフィールドワークだと私思ってるんだけど、そういうものを例えば課題研究会に僕はぶつきたいんだと、今のものでは思ってるんですよ。余りにも綺麗に今の方向はすごい綺麗な方向のカリキュラム、そして、それも対症療法的な形になってきている。これで本当に骨としての教育というものが成り立つんだろうかというところを、今ちょっとちらっと考えているんです。そこについての御意見をこの場で聞いていいものかどうか分かりませんが、学生主体型授業を通して思ってきておりますけど、絹川先生、どう思われます。

絹川 今ぼやっとして、ポイントは何かですか。

小田 ポイントは、はっきり言ったら、世間の問題を、あんたは何とかしなさいという授業、そこで何とかというのはいろんな対処の仕様がある。しかし、何とかしなくちゃいけないし、自分で考える。そして、行動する。そして、それは解決されないかもしれないけども、何とかやっぱしようという、できたというものだけじゃなくてですね、そういうものがいろんな何か主体性も勿論やるだろうし、プレゼンテーションもやるだろうし、いろんなものをおぼろげに身につけていけると、そういうところが僕は本当は必要なんで、分割されたような、今日はプレゼンテーション能力の授業ですとかいって2単位、次はコミュニケーションですということではないんじゃないかと。すごい今、キャリア教育とかいろんなものが細分化されてくる方向に来ると言いますかね。

絹川 杉原さん、松下さんと、京都の中心になって本を一つつくりましたね。

杉原 はい。新しい能力。新しい能力は教育を変える。

絹川 新しい能力は教育を変えるっていうね。杉原さんも書いているんですけどね。松下さんは、いわゆる能力というものを分析し合っただけで、ばらばらに考えるということはおかしいんじゃないか。例えば学習意欲ということで、何々できる能力とかっていろいろありますね。ジェネリックスキルなんかありますね。そういうものがむしろ総合的に育成されてくるんであって、個別にそれぞれが育成されるんじゃないんだっていう。私も全く同感なんです。私どもはじゃあ、どういふふうにしてそういう能力というものを身につけてきたか。能力があるかどうか問題だけでも、やっぱりそれは学校の営みを通してですよ、総合的にね。だから、こういうプロジェクト全体が、やっぱりそういう能力っていうものをサポートしようっていうか、展開させていくわけですから、余り分析的に考えないで、営みの相対としてサポートしているってことではないんじゃないかと僕は思うんですけどね。

コミュニケーション能力というのは、どうやって育成されるのか。コミュニケーションというのは、ある人たちに言わせれば全人的な事柄であって、人間と人間との対話の中で生まれてくるわけですから、コミュニケーション能力そのものを育成するっていうことはあり得ないというか、不可能なんでね、それ自体ということが。コミュニケーションというのは、人間と人間との間でエネルギーの交換であるなんていう言い方があるんですね。エネルギーの交換、そういう前衛的なものとして受けとめ直してやるべきだろうと、今のだから学習欲としてジェネリックスキルを羅列するのは、私はおかしいんじゃないかと、だと思っているんですよ。答えになるかしら。

小田 いや、そうだと思って、だけでもう一つは、そうしたところにおいて全人的という言葉で置くと、エリート教育と昔のこととやっていて新しいものが、では昔の教育方法で対応できるかと思ったら、恐らく対応できてないから、ニーズは生まれてるとは思うんです。そうしたところにおいて。

絹川 対応できてなくても、その事柄としてはずっと同じでしょ。

小田 同じです。本当の根本はですね、人間的なものの根本は、そこにおいてやっぱり教育という一つのメソッドがあるならば、そのないものをどうやってやったらいいんだというところが問われているんだろうとは思っていますよ。そういうことで、いろんな悪戦苦闘とはしてるんだろうとは思いますが。

絹川 非常に不思議なのはね、エリート教育の要素というものが、実は今のユニバーサルアクセスの中で意味持ってきているんじゃないか。意味を持ち直してね。

小田 そうなんです。そうなんだと思います。

絹川 非常に不思議なことなんですよね。エリート教育の仕方というのは、実は普通の人の教育にね、やっぱりかかってこなきゃいけないし、普通の人の教育になるんだということであってね。

小田 そうですよ。

絹川 それはレベルだとか、何とかというのは、それはいろいろありますけど。

小田 だから、こちら見たらブルートって言ったけども、いろんな雑駁な中から物を抽出する。もっと洗練されていない状態の中からやっていく。まさに昔の学生たちは自我も出てこなずにそこから話し合ったり、部活動やったり、下宿で何とかやったりしてた。そういうところが人間形成をしてきた。恐らく、そういうふうな物事というのが、かなり希薄になってきたと言いますかね。

それともう一つは、こっちからみたらエリート教育、例えば我々、1泊2日で現地体験学習のフィールドワーク出している。そうしたときに、ああ、面白いと思うのは、松下政経塾がまさに現地の工場に、ラジオ工場に働かせる。これはエリート教育なんです。そこの中からはいろんな自分が考えたり、社会というものを学んでいく。こういうところが僕はすごく必要だと思って、それは先生がおっしゃるように市民のレベルまで必要。これをどうやって捉え直すかということと言いますかね。これを分割されない。要素関係にされないところというものを、いま一度問い直すことが、大学に問われていて、でないとやせ細ってくるんじゃないかと。

絹川 だからね、突き詰めるとやっぱり教員の問題なんです。

小田 教員のね。

絹川 教員がね、全人的な存在として、学生と向かい合っているかということが常に問われているわけ。

小田 それは反省すべきは大学教育学会やら、国としたって、そのような方策で進めている。そうしたときに、それぞれの大学が結構自分のところの大学の置かれている状況を忘れて、それに対症療法している。そういうところの問題もあるんだろうと思っているわけですよ。だから、そういうふうな問題も抱えながら、大学教育学会の課題集会上に、僕はこういう企画を、僕は個人的にどうかなと思って。

絹川 あの小田先生の本の書評にも書いたけど、小田先生というその存在が意味を持つわけ。小田先生の意見でそうなるか、学生主体型の授業の展開なんていう

のではない。極端に言うとな、杉原先生のところで意味を持っているわけですよね。だから、突き詰めちゃうとやっぱりFDというのは、それぞれの教員の人間としての存在のあり方にみんな還元されてくると僕は思うんです。

小田 そうです。そこを。

絹川 そう言っちゃくと、身も蓋もないと思うんですよ。

杉原 そうなんですよ。

小田 それをだけど、それが骨格であって、身も蓋もあるようにしたいと思ってるわけですよ。こっちから見たらね。でないと、我々は機械になっちゃう。はっきり言ったらね。そこら辺りを取り戻さないといけないと思ってて、取り戻される率はどうなるか。それも急がなくちゃいけないと思ってんだけど、話がちょうど12時になりました。こちら違う話に向いて悪いんだけど、こういう形で個人的ではありますが、学生主体型授業のこのプロジェクトを通してですね、やっぱりやることもやってきたけども、いろんなことを我々それぞれに考えてやってきたと。それは、大学の中でも色々苦しみながらやってきたし、また学外にも発信したいと思うし、そういうことが日本の高等教育、世界の高等教育に役立つだろうと思っております。

絹川 来年の課題研究集会のテーマは、もう学生主体型だね。

小田 何のタイトルにしたらいいかなどは思ってんですけども。一言ずついただけますか。12時になりました。木野先生から絹川先生、最後に一言ずつ。

木野 3年間おつき合いさせていただいて、それ以前から十分いろんな意味で先端的な取組を進められてきたので、感心の一言ですけども、わずか3年間の間でもあそこに、本にまとめられた、あるいはこういうセミナーとか、いろんなことを成果も随分上がってきたと思います。非常に残念なのは、学内のいろんな状況でそれを上手く生かす先の目処が当面の課題でもったいないなと思いますね。是非、いろんな形でどっかにこれを生かせるように、学内の話ですから、我々に見える話ではないんですけども期待しております。

小田 どうもありがとうございます。

絹川 私はもうみんな言っちゃったから。一言ね、先ほども言いましたけど、これだけの大事な仕事になって本当大変なことですよ。ですから、この成果が是非全学に展開される。山形大学を越えて、共有されるようになれば素晴らしいと思いますね。

小田 ありがとうございます。

絹川 ありがとう。

橋本 私もその言葉を中々言う機会はなかったですけど、とにかく敬意を表したいと思います。特に山形大学のすごいっていう部分は、山形大学で完結せずに流用だったり、もがみだったり、そういうところなるべく他の大学をリードしていこうという、これがスタンスとして何か物すごいエネルギーを感じますし、その中心に小田先生なり、杉原先生なりがおられるということで、そここのところで流石だなという感じはしています。

3年間余り大した意見も言わずに、何か茶々入れるような発言もあったと思いますけども、今後また期待してます。

小田 ありがとうございます。

山田 はい。本当に僕はこの機会を与えていただいて、すごくたくさん勉強させてもらいました。僕みたいな若造がこういう先生方の横に並んで、いろいろ勉強させてもらうという機会を与えられたことを改めて感謝したいと思います。いろいろ細かいことは言いましたけども、私は小田先生の進めておられるスタンス、あるいは、それを支えている杉原先生とかのアプローチというのは個人的には非常に好きです。色々と実務的に難しい問題があるので、私も日々苦悩しながらやってるんですけども、常にやっぱり山形大学の存在というのは、同じ国立大学の厳しいセンターにいる身としては常に刺激になって、支えになっているところがあります。ですので、個人的なレベルでもすごくありがたかったです。ということで、もうお礼しか言えないんですけども、ありがとうございましたということと、できればですね、一応最後の締めになるので、多分中心になって実質的にかかわっておられた杉原先生に、ちょっと最後にコメントをちょっといただきたいなというふうに思います。

杉原 本当、3年間でしたけれどもあつという間に過ぎた感じで、いろいろと御指導いただいてありがとうございました。学内情勢は、今申し上げたような形で中々難しい。こういうボトムアップの活動とトップダウンのシステム化の動きがかちっと重なれば、それにこしたことはないんですけども、それがうまく合わない多分、大学さんのほうが多いんだと思います。私は敢えてチャレンジで、そういう中でどういうふうに苦しみながら、どういうふうにうまくやっていけば、京大の田中先生の言葉でいうと、自己組織化していくかということに敢えてチャレンジしている身なんだろうなと、神様はそういう意味で山形大学よと、全国の苦しんでいる大学さんのちょっといいモデルになってくれないかと言ってらっしゃるんだろうと思って、今のところはちょっと頑張っているという段階です。ですので、センターの今後がどうなるかはわかりませんが、基盤教育のFDということがなくなることはありませんので、そういう中でまた今後も先生方の御指導いただきましたら、私ども

のまた支えにもなりますので、今後ともよろしくお願ひしたい
と思います。ありがとうございます。

小田 栗山さんと酒井さんも一言ずつお願ひします。

栗山 私は2年間なんですけども理学部として、理系として参加させていただいて、実際に手法というのは我々素人ですので先ほどのジグソー法とか、何とかは全然知らないし、そういうのを知ることができたのは非常にうれしいということで、理学部の中でも少しずつ理解者が増えてきているので、学内で広がっていくのは、少し時間はかかるとは思いますけど、そのうち広がっていくだろうというふうに思っています。ありがとうございました。

酒井 私は今年から、本格的に1年生の授業を担当しています。この授業をもつ前にこういう取組のことをいろいろ勉強させていただいて、これから大学の中で活用していきたいと思います。ありがとうございました。

小田 どうも3年間、先生方ありがとうございました。これを生かして我々も前に進んでいきたいと思ひます。では、これで本日の諮問委員会を終わりたいと思ひます。

どうもありがとうございました。